

富山市埋蔵文化財調査報告37

富山市

かみ しん ほ  
上 新 保 遺 跡

発掘調査報告書

—堀川本郷団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告—

2009

富山市教育委員会



1. 上新保遺跡調査地全景（東から）

2. 第2調査区掘立柱建物写真（西から）



1. 第4調査区 SI20 遺物出土状況（東から）  
2. 上新保遺跡出土墨書土器

富山市  
かみ しん ほ  
上 新 保 遺 跡  
発掘調査報告書

—堀川本郷団地造成工事に伴う埋蔵文化財調査報告—

2009

富山市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、富山県富山市上新保・堀地内に所在する上新保遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は株式会社田島木材が行う堀川本郷団地造成工事に伴う発掘調査である。
- 3 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターの指導・監理の下で株式会社アーキジオが担当した。
- 4 調査期間 現地調査 平成20年7月1日～平成20年9月30日  
出土品整理 平成20年10月1日～平成21年9月30日
- 5 調査は、株式会社アーキジオ 森隆 田所人志 が担当した。  
調査監理は富山市教育委員会埋蔵文化財センター（平成20年度）主査学芸員 堀沢祐一・主任学芸員 堀内大介、（平成21年度）主査学芸員 鹿島昌也・堀内大介が担当した。
- 6 発掘調査では、財団法人京都市埋蔵文化財研究所 伊藤潔 から全般的な技術指導を受けた。
- 7 調査に際しては、地元堀町内の方々からは色々のご協力を賜った。記して謝意を表したい。
- 8 理化学的調査はバリノ・サーヴェイ株式会社に依頼し、その成果を第4章に掲載した。
- 9 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 10 本書の執筆は、第1章を堀内大介が、その他を森隆が行った。
- 11 遺構図面に記載される方位は座標北（世界測地Ⅶ系）を示す。また標高水準は東京湾標準潮位を使用した。
- 12 遺構標記は以下の通りである。  
SB：掘立柱建物 SI：竪穴建物 SK：土坑  
SP：柱穴 SD：溝

# 目 次

第1章 調査の経過 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	3
第1節 地理的環境 .....	3
第2節 歴史的環境 .....	3
第3章 調査の概要 .....	5
第1節 調査の方法 .....	5
第2節 自然地形と基本層序 .....	5
第3節 遺構 .....	6
第4節 遺物 .....	13
第4章 理化学的分析 .....	26
第5章 総括 .....	46

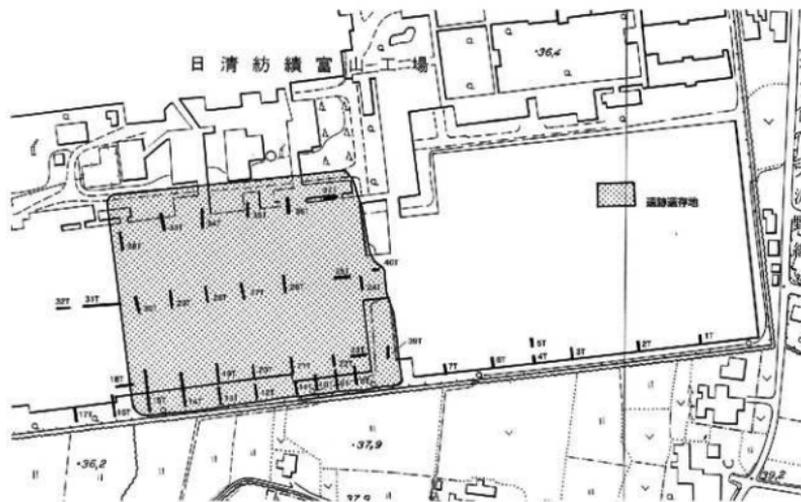
## 第1章 調査の経過

上新保遺跡は、昭和63年～平成3年に富山市教育委員会が実施した市内分布調査で発見された遺跡である。古代～近世の遺跡で、220,000㎡の範囲に広がる。遺跡は、平成5年3月発行『富山市道跡地図（改訂版）』では、埋蔵文化財包蔵地（市NO.201497）として周知されている。

平成6年、組合施行土地区画整理事業に伴う試掘確認調査により、遺跡南部における遺構所在状況が把握され（富山市教委1996）、平成8年～平成10年にかけて同事業に伴う発掘調査が実施された。調査の結果、遺跡は中世を主体とする西側の第1地区と、中世・古代が2層重複する東側の第2地区に分かれた。特に第2地区においては、奈良・平安時代に120棟の竪穴建物跡と25棟の掘立柱建物が検出され、大規模な集落跡であることが明らかとなった（富山市教委2000）。

平成19年、遺跡北東部において分譲宅地造成工事が計画され、試掘確認調査を実施した。調査の結果、5,500㎡に平安時代・中世の遺構・遺物を確認した。その後、道路部分704㎡について発掘調査を実施し、平安時代の17棟の竪穴建物跡と3棟の掘立柱建物跡・畑跡、中世の溝跡などが検出された（富山市教委2009）。

平成19年8月、旧日清紡績富山工場跡地である約155,000㎡において商業用地及び分譲住宅地造成工事が計画され、同年11月8日に富山市教育委員会へ「埋蔵文化財の所在確認依頼書」が提出された。工事計画南側の一部が上新保遺跡に含まれており、施工者である株式会社田島木材と協議し、施工者の協力で試掘確認調査を行なうこととなった。平成20年4月14日～4月18日まで試掘確認調査を行なった結果、東側は工場の基礎により遺跡は破壊されていたが、西側9,150㎡で埋蔵文化財の所在が確認された。北側への遺跡の拡大が考えられたため、同年4月23日・5月7日に施工者と協議し、北側への追加試掘を5月12・13日に実施した。調査の結果、約15,500㎡に遺構・遺物を確認した。遺構は平安時代の竪穴建物跡や溝跡を確認した。



第1図 上新保遺跡試掘トレンチ配置図

試掘結果は、同年5月23日に施工者の田島木材へ報告し、この調査結果に基づき協議した。宅地部分は盛土造成により保護し、道路部分は道路構造令に基づく工事を行う2,740㎡について発掘調査を行うこととした。また発掘調査の実施は、田島木材の全面的協力を受け、施工者と委託契約した民間発掘会社が行い、市埋蔵文化財センターが監理することとした。民間発掘会社は株式会社アーキジオが選定された。

この協議結果措置について、平成20年6月30日付けで施工者である田島木材・市教委・アーキジオの三者による協定を締結し、7月1日から発掘調査に着手した。

発掘作業は同年9月30日まで実施し、奈良～平安時代の堅穴建物跡・堀立柱建物跡・畑跡、古代～中世の自然流路跡を検出した。市埋蔵文化財センターが現地調査完了を確認後、同日付けで現地を引き渡した。同年9月28日に現地説明会を開催し、約150名が参加した。

その後、引き続き平成21年9月30日まで出土品整理を実施した。

(堀内)



8 T 遺構検出状況



21 T 遺構検出状況



29 T 遺構検出状況



33 T 遺構検出状況

第2図 試掘調査トレンチ写真

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

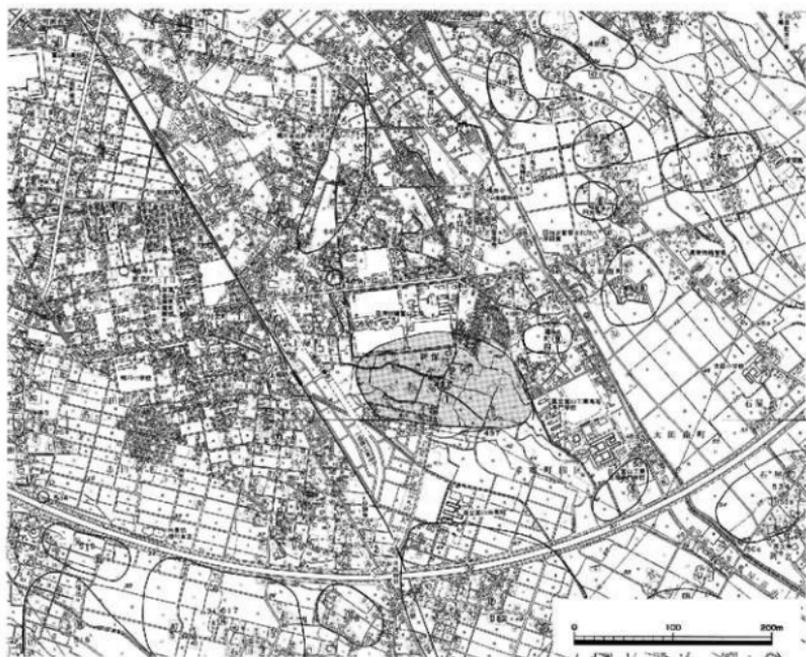
富山県は、本州北東日本海側の能登半島の付け根付近に位置する。県内は中央部を南北に走る呉羽丘陵で大きく東西に二分し、それぞれ「呉西」「呉東」と呼称されることが多い。富山県の県域全体を見渡すと、南部は大きくは山岳地域に、中央から北部の海岸線に沿っては平野部が発達している。この平野部は大きくは4つからなり、西から東にかけて氷見平野、砺波・射水平野、富山平野、黒部平野と続く。このなかで富山平野は県中央部に位置し、東は早月川扇状地を東端に、西は前述の呉羽丘陵を西端とする地域に広がりを見せる。富山市の市域は従来はこの富山平野を中心としていた。ところが平成17年の市町村合併によって、それまで富山市の南側に隣接所在した旧婦中町、八尾町、細入村、大沢野町、大山町を新たに市域に取り込んだ結果、富山市の市域は大きく拡大した。すなわち市域北側の富山平野を中心とした平野部に加えて、新たに南部の丘陵山地を加えて県土の約3割を占める広大な市域を形成するに至った。

一方今回報告する上新保遺跡は、旧富山市の市域内にあり富山平野内の一角に所在している。この富山平野内を流下する主要河川としては早月川、神通川、常願寺川などの水系があり、とくに常願寺川扇状地の発達が発達が最も著しくみられる。上新保遺跡はこの常願寺川と神通川に挟まれた複合扇状地上の末端付近に占地している。調査地付近の現況高は36m前後を数えるが、調査対象地となる旧工場敷地内は全体に約1～2mほどの盛り上がりが見られるため、遺構面の標高はその分が低くなる34m前後となっている。付近の現地形は概ね低平であり、丘陵・台地等の起伏はみられないが、およそ北西方向にむかって緩傾斜する地勢を有している。また周辺部での遺跡調査では埋没した自然河道跡が見つかることも多い。今回の調査でも平成8～10年度調査地から続く旧河道跡が検出されている。このように、かつては扇状地末端付近から氾濫原にかけて多数の自然河道が発達し、これらの河道に挟まれた微高地上に多くの遺跡が営まれていたものと考えられる。

### 第2節 歴史的環境

上新保遺跡の所在する富山市では、旧石器時代から近世まで長期にわたる時代の遺跡がみつまっている。旧石器時代の遺跡は多くないが、呉羽山丘陵以西の丘陵上あるいは扇状地上の境野新遺跡から東北地方の東山系石刃技法の石器が出土している。また開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡からはナイフ形石器などの出土が報告されている。縄文時代の遺跡としては、大沢野段丘上に立地する国指定史跡の直坂遺跡や、扇状地上には石田遺跡・吉岡遺跡・大利屋敷遺跡が所在する。また、呉羽山丘陵周辺では立石を伴う竪穴建物群が確認された開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡（中期中葉）などの集落遺跡が分布している。さらに丘陵北側には国指定史跡の北代遺跡が所在する。弥生時代の集落遺跡では、旧婦中町内の南部Ⅰ遺跡、鍛冶町遺跡がある。また六治古塚墳墓や富崎墳墓群、鏡坂墳墓群などでは、山陰地域との文化的接触を物語る四隅突出墳墓がみつまっている。弥生時代から古墳時代では千坊山遺跡で竪穴建物がまとめて調査されており、近年は六治古塚墳墓などの弥生墳墓群とともに、千坊山遺跡群と呼称され、研究・調査が進められている。古墳時代では大沢野段丘の先端部に伊豆ノ宮古墳があり、旧婦中町内には杉谷A遺跡、五ツ塚古墳、宮崎千里古墳群などの存在が知られる。西部の丘陵上には王塚古墳、勅使塚古墳などの首長墓級の前方後方墳が築造されている。また古墳時代後期になると、呉羽丘陵の斜面を利用して横穴墓が構築されている。古代以降になると、低地である扇状地上にも多くの集落遺跡が展開されるようになる。律令期の国郡制のもとでは、

富山市は婦負郡の郡域にある。「和名類聚抄」によると婦負郡内には十余りの郷名が知られる。上新保遺跡の周辺では、任海宮田遺跡、吉倉B遺跡・南中田D遺跡・栗山椿原遺跡・友杉遺跡などの古代の集落遺跡が密に分布している。このうち任海宮田遺跡では、広範囲にわたって多数の竪穴建物群やこれを管理する大規模掘立柱建物群、平地では珍しい土師器焼成窯などがみつまっている。多彩釉陶器や緑釉陶器、円面硯、石帯などとともに墨書土器も多数出土しており、富山平野における古代の開墾集落の実態をよく示す考古学的な資料を提供している。中世になると一帯には徳大寺領宮河荘が所在したことが文献資料から窺うことができる。14世紀代の文献によるとこの宮河荘の荘域は、富山市の熊野川から神通川左岸の旧婦中町に及ぶ広大なものであったと考えられている。該当地域には吉倉A遺跡・吉倉B遺跡・南中田A遺跡・南中田D遺跡・任海鎌倉遺跡などの中世の集落遺跡の存在が知られる。これらの諸遺跡は熊野川から神通川に挟まれた東西1.0km、南北1.5kmの範囲内に密集して所在しており、さながら一続きの中世遺跡群を形成しているかのような様相を呈している。またこれとは別に中世豪族越前氏の越前館跡や菩提寺である最勝寺なども本調査地の周辺に所在している。近世になると付近は飛騨街道・八尾道・岩木道が交差する交通の要衝となる。近世は大規模広範に水田開発が進んだ時期でもある。現在調査地周辺では宅地開発が盛んになり都市化が著しいが、ほんの少し前まで普通に見られたような村落と水田が織りなす富山平野の景観が成立するのも近世以降のことと考えられる。



- ①：上新保遺跡 ②：本郷椎木遺跡 ③：太田中田Ⅰ遺跡 ④：太田惣見遺跡 ⑤：太田中田Ⅱ遺跡 ⑥：太田本郷遺跡 ⑦：大宮町遺跡  
 ⑧：太田南町遺跡 ⑨：本郷水ノ上遺跡 ⑩：本郷町遺跡 ⑪：新名遺跡 ⑫：布市北遺跡 ⑬：石田打富遺跡 ⑭：石田北遺跡  
 ⑮：二俣北遺跡 ⑯：二俣遺跡

第3図 上新保遺跡周辺遺跡分布図

## 第3章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

調査の経過で説明があった通り、今回の調査は事前に実施された富山市教育委員会の試掘結果に基づいて本調査を計画した。今回の調査地は旧日清紡績富山工場の敷地内の南西側の一角に所在する(図版1上段)。上新保遺跡の周知の遺跡の範囲内では北側に位置する。既往の発掘調査は平成8年から11年にかけての時期に実施された。これらの調査は主に本調査地の南側に隣接する地域でおこなわれ、報告書も既に刊行されている。今回の調査地は旧工場敷地内でも南側の敷地境界に近い位置に所在する。掘削調査の対象となったのは区画整理事業計画に伴う道路部分で、細長いトレンチ状を早した調査区からなる。このため本報告書では記述の便宜を図るため、第1～7調査区を設定した(図版1下段)。これらの調査区の配置は、大きく南北二本の道路部分(第1調査区・第4調査区)と、これと交差する東西二本の道路部分(第2調査区、第3調査区)を中心に、さらに第4調査区の東側に拡張する3カ所の短い調査区(第5～7調査区)から構成される。またこれとは別に現地調査においては、国土座標軸に同調し全調査区をカバーする10m単位の方形区画を設置した。この方形区画の南西角を任意の起点(A1)とし、東西軸を1、2、3…南北軸をA、B、C…と呼称し、両者を組み合わせ一辺10m単位の調査区を設定した。例えばA1地区とは、南西角の杭番号がA1となる10m四方の区画のことを指す。この方形区画を基準に、空中写真測量や検出遺構の記載、出土遺物の分類収納などの作業をおこなった。調査はまず機械掘削によって、敷地内を厚く被覆している盛り土・整地土の除去作業から開始した。これらの機械掘削が終了した調査区から包含層掘削、遺構検出、遺構掘削の作業を順次実施していった。

### 第2節 自然地形と基本層序

調査地周辺は現況で平坦ではあるものの、北西に向かってわずかずつ緩傾斜する地形と推定される。このためか本調査地でも南東角にあたる第7調査区付近が最も高く、現地表面から約1m(標高35.3m)で遺構面となる地山層(黄褐色系砂粘質土層)が露出する。これに対し遺構面が最も深いのは第1調査区北側付近で、現地表面から1.3mほどの深さにある遺構面の標高は34m前後となる。このことから全体地形が北西側に緩傾斜する様相が窺える。一方現地表面から遺構面までが最も深いのは第4調査区北側から第5・6調査区にかけての部分で、およそ現地表面から約2m掘削して遺構面となる。但し標高は34.6～34.7m程度であり、第1調査区北付近よりも明らかに高いことがわかる。各調査区的基本的な層序はややバラツキはあるものの、遺構面直上0.2～0.3mまでは旧耕作土と床土のサンドイッチ状の互層が連続する状況を示し、その後遺構面直上に広く黒褐色の遺物包含層が被覆する様相が窺える(図版2上段)。また第1調査区南側や第2、第7調査区のように旧耕作土・床土を除去すると直接遺構面が露出する場所が南側一帯で見受けられる。これらの地域での検出遺構には上面を削平されているようなものも多くみられる。調査地全体に遺構面の深度は深いものの、後世の開墾に伴う攪乱・削平は現地表面から深いところまで及んでいることが確認できる。このことは各調査地で検出された堅穴建物自体の残存深をみると、その多くが0.25m未満であることから首肯される。今回の調査では古代以外の時期の遺構はほとんど検出できなかった。このことから当地における古代集落が廃絶して以後、長い期間当地周辺で耕作が繰り返され現況に至った様相が、各調査区の基本土層の観察からも窺うことができる。この他にも、工場の基礎が随所に攪乱坑として検出されており、残念ながら遺構の残存状態は決して良くない状況であったといえよう。

### 第3節 遺構

今回の調査では古代集落に関連する遺構が多くみつまっている。主な検出遺構としては掘立柱建物8棟、竪穴建物30棟、土坑、柱穴、溝などである(図版3)。これに対し古代以外の時期の遺構はほとんどみつかっておらずほぼ古代にのみ限定された遺構の検出状況を示している。この傾向は出土遺物にも反映しており、古代以外の時期の出土遺物はきわめて少ない。以下に今回の調査で検出した遺構の概略を記述していく。

#### 掘立柱建物

**SB01**(図版4)：第1調査区の北端に位置する。SI01の西側に隣接する。南北2間分(4m)の柱列が検出されるのみで、建物本体の過半は調査区の西側の調査地外へとのびている。このため正確な建物の規模・構造などは不明である。南北の棟方向は $N6^{\circ}E$ の方位をとる。柱穴掘方のプランは隅丸方形で、一辺0.7~1.1m前後、検出面からの深さは0.45~0.6m前後の規模を測る。柱穴内の覆土は暗灰褐色~灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕跡はみつからない。

**SB02**(図版4)：第1調査区の中央に位置する。SB03・04の西側に隣接する。東西3間(4.9m)、南北2間(3.2m)で総柱構造を有するが、北柱列で一カ所柱穴が欠落する場所がみられる。建物の棟方向は $N1^{\circ}E$ をとる。柱穴掘方のプランは隅丸方形で、一辺0.6~0.95m前後、検出面からの深さは0.2~0.55m前後の規模を測る。床面積は15.7 $m^2$ 。柱穴内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕跡はみつからない。

**SB03**(図版4)：第2調査区の西側に位置する。SB02の東側に隣接する。SB04と重複して検出されるが、先後関係は不明である。東西4間(10.8m)、南北2間(4.4m)で総柱構造を有する。建物の棟方向は $N3^{\circ}E$ をとる。柱穴掘方のプランは隅丸方形で、一辺0.75~1.1m前後、検出面からの深さは0.2~0.75mと柱穴規模が他の掘立柱建物よりも人型である。建物の床面積は47.5 $m^2$ 。柱穴内の覆土は灰黄褐色~黒褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕跡はみつからない。柱穴内の覆土からは須恵器蓋(097~099)の破片が出土している。

**SB04**(図版4)：第2調査区の西側に位置する。SB02の東側に隣接する。SB03と重複して検出されるが、先後関係は不明である。東西2間(5.1m)、南北2間(5m)以上の規模で、建物自体はさらに北側の調査地外へとのびている。このため建物の正確な規模は不明である。建物の構造は総柱ではなく側柱建物と考えられる。建物の棟方向は $N4^{\circ}W$ をとる。柱穴掘方のプランは隅丸方形で、一辺0.5~0.8m前後、検出面からの深さは0.25~0.55m前後の規模を測る。柱穴内の覆土は灰黄褐色~黒褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕跡はみつからない。柱穴内の覆土からは須恵器蓋(147・148)の破片が出土している。

**SB05**(図版5)：第2調査区の中央やや西よりに位置する。SB03・04とSB06のちょうど間にある。東西2間(3.8m)分の柱列のみが検出される。建物の本体の大部分は調査区外の北側にあるものと推定される。建物の棟方向は $N1^{\circ}E$ と推定される。柱穴掘方のプランは隅丸方形で、一辺0.55~0.8m前後、検出面からの深さは0.35~0.4m前後の規模を測る。柱穴内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。柱痕跡はみつからない。

**SB06**(図版5)：第2調査区の中央付近に位置する。SB05の東側に隣接する。東西3間(6.2m)、南北2間以上(2.5m)で総柱構造の可能性が高いが現状では断定できない。建物自体は調査区の南側に広がるものと推定される。建物の棟方向は $N1^{\circ}W$ をとる。柱穴掘方のプランは隅丸方形で、一辺0.7~

1 m前後。検出面からの深さは0.3~0.4m前後の規模を測る。柱穴内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。概ね全ての柱穴で柱痕跡がみついている。柱痕は径0.2~0.25m前後のものが多く、柱穴内の覆土からは土師器小型甕(109)の破片が出土している。

**SB07** (図版5) : 第4調査区の北側に位置する。東西2間(2.3m)、南北3間(7.1m)の規模の側柱建物と考えられる。建物の床面積は16.3㎡前後と推定される。建物の棟方向はN7°Eで、ほぼ真北方位を示す。柱穴堀方のプランは隅丸方形で一辺0.6~0.8m前後。検出面からの深さは0.25~0.4m前後の規模を測る。柱穴内の覆土は灰黄褐色~黒褐色砂粘質土層を基調とする。東西棟建物の多い本調査地では数少ない南北棟の棟方向が確認できる事例である。柱穴内から柱の一部と考えられる木質部材が出土している。

**SB08** (図版5) : 第2・4・7調査区のちょうど交わる交差点付近に位置する。東西2間(約5m)、南北3間(7.9m)の規模の側柱建物と考えられる。建物の床面積は推定で39.5㎡前後と考えられる。建物の棟方向はN19°Eをとる。今回検出した建物では真東西南北方向の棟方向が多いのに対し、棟方向が大きく東側にぶれているのがこの建物の特徴を示す。柱穴堀方のプランは隅丸方形で、一辺0.55~1m前後。検出面からの深さは0.2~0.35m前後の規模を測る。柱穴内の覆土は褐灰色~灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。東側の南北柱列で柱痕跡がみついている。柱痕は径0.2~0.25m前後のものが多く、SB07と同様に、東西棟建物の多い本調査地では数少ない南北棟の建物と捉えられる。

#### 竪穴建物

**SI01** (図版6) : 第1調査区の北端に位置する。SB01の東側に隣接する。付近での竪穴建物はこれ1棟のみが検出されている。建物の平面プランは方形と思われるが、建物の東側が調査地外となり、全容をうかがい知ることは現状ではできない。東西3m以上、南北4.1m、検出面からの深さ0.35mを測る。正確な床面積は不明。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土は暗褐色砂粘質土層が主体となる。出土遺物には須恵器蓋杯、土師器甕(001~007)などがある。

**SI02** (図版6) : 第1調査区の南端に位置する。付近での竪穴建物はこれ1棟のみが検出されている。建物の平面プランは方形と思われるが、建物の東側が調査地外となり全容は不詳である。東西3m以上、南北3.5mの規模が復元される。検出面からの深さは0.1mと浅く残りが良くない。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土は暗褐色砂粘質土層となる。出土遺物には須恵器杯(008)がある。

**SI03** (図版6) : 第2調査区中央やや西側に位置する。SB03と一部重複する。建物の平面プランは方形と思われるが、建物の北側が調査地外となり全容は不詳である。東西4.52m、南北4.5mの規模を有す。床面積は18.1㎡となる。検出面からの深さは0.25mを測る。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土は暗褐色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には能登式製埴土器の底部破片(009)がある。

**SI04** (図版6) : 第2調査区の中央付近に位置する。SB03の東側に隣接する。建物の平面プランは方形と思われるが、部分検出であり全容は不詳である。東西2m以上、南北2m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.1mを測る。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物には須恵器杯、土師器甕(010~014)などがある。

**SI05** (図版7) : 第2調査区の中央やや東側に位置する。SB06の東側に隣接する。建物の平面プランは方形と思われるが、一部未検出であり全容は不詳である。東西3m以上、南北3.2mの規模を有す。

床面積はおおよそ10㎡弱程度である。検出面からの深さは0.18mを測る。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には須恵器蓋 (015) などがある。

**SI06** (図版7) : 第2調査区の東側に位置する。SI05の東側に隣接する。建物の平面プランは方形と思われるが、一部未検出であり全容は不詳である。東西5.2m、南北3m以上、竈の煙道を含めた全長6.2mの規模を有す。床面積はおおよそ25㎡程度である。検出面からの深さは0.12mを測る。建物の東側で作り付けの竈が検出されている。竈部分の全長2.68m、幅約1.2m、不整形長方形を呈している。焼き口の右側に袖石が残されている。竈の左袖に接して浅く高まる部分が見られる。また床面全体は貼床が施されている。焼き口床面からは石や土器類が出土している。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には須恵器杯、土師器甕 (016~018) などがある。

**SI07** (図版8) : 第2調査区の東側に位置する。SI08・09の西側に隣接する。建物の平面プランは方形と思われるが、一部分のみの検出であり全容は不詳である。東西1.5m以上、南北3.1m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.1mを測る。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土は灰黄褐色～にぶい黄褐色砂粘質土層である。作図可能な出土遺物は認められない。

**SI08** (図版8) : 第2調査区の東側に位置する。SI07の東側に隣接する。SI09と重複した位置にあり、SI09に切り込まれこれに先行する。建物の平面プランは隅丸方形でやや不整形を呈する。東西2.62m、南北2.9m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.28mを測る。柱穴や竈などは検出されていない。建物内の覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層を主体とする、建物の床面に灰黄褐色～明黄褐色砂粘質土の貼床を施す。出土遺物には須恵器杯蓋、土師器甕 (019~024) などがある。

**SI09** (図版8) : 第2調査区の東側に位置する。SI07の東側に隣接する。SI08と重複した位置にあり、SI08を切り込み、これに後出する。建物の平面プランは方形と推定されるが、本体の大半は南側の調査区外となる。東西4.3m以上、南北1.4m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.28mを測る。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物には覆土上面から出した須恵器杯 (025) がある。

**SI10** (図版8) : 第2調査区の東端に位置する。SI08・09の東側に隣接する。建物の平面プランは方形と推定されるが、本体の半分は南側の調査区外となる。東西3.82m、南北2.4m以上、竈を含めた全長5.08mの規模を有す。検出面からの深さは0.28mを測る。建物の西側で作付けの竈が検出されている。幅0.9m、長さ1.9m、高さ0.3mの隅丸長方形を呈している。竈の焼き口の両脇には袖石が二個残存している。焼き口前庭部から若干の遺物が散乱して検出されている。また床面全体には貼床が施されている。建物内の覆土は暗褐色～黒褐色砂粘質土層が基調となる。出土遺物には須恵器蓋杯、黒色土器、土師器甕 (026~036) などがある。

**SI11** (図版9) : 第3調査区の西端に位置する。SI12の西側に隣接し、一部が重複する。断面観察すると、SI12に切り込まれこれに先行する時期と考えられる。建物の平面プランは方形と推定されるが、本体の一部は南側の調査区外となる。東西4.3m、南北4.6m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.54mを測る。建物内の覆土はにぶい黄褐色～黄灰色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には須恵器杯、土師器甕、土師器取っ手付き鉢 (037~044) などがある。

**SI12** (図版9) : 第3調査区の西端に位置する。SI11の東側に隣接し、一部が重複する。断面観察すると、SI11を切り込みこれに後出する時期と考えられる。建物の平面プランは方形と推定されるが、本体の大半は南側の調査区外となる。東西3.7m、南北1.7m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.4m

を測る。建物内の覆土は黄灰色砂粘質土層となる。建物の西壁に接して径0.48m、深さ0.1mの円形の柱穴が検出されている。この柱穴の上面では石が、内部の覆土からは焼土が検出された。出土遺物には須恵器蓋、土師器甕（045～049）などがある。

**SI13**（図版9）：第3調査区の西端に位置する。SI11・12の東側に隣接する。建物の平面プランは方形と推定されるが、本体の一部は南側の調査区外となる。東西5.34m、南北4.2m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.24mを測る。建物の北壁中央やや東寄りの場所で竈と推定される遺構を検出している。幅0.52m、長さ1.54m以上の細長い溝状の形態である。残存深0.1m。竈内からは焼土が出土する。建物内の覆土は黄灰色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には土師器甕（050）がある。

**SI14**（図版10）：第3調査区の中央やや西側に位置する。SI15の西側に隣接する。建物の平面プランは方形と推定されるが、本体の一部のみの検出であり全容は知り得ない。東西3.4m以上、南北2.3m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.28mを測る。床面の東側に部分的に貼床が施されている。建物内の覆土は灰黄褐色～黒褐色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には須恵器杯（051）などがある。

**SI15**（図版10）：第3調査区の中央付近に位置する。SI14の東側に隣接する。建物の平面プランは隅丸方形と推定されるが、北側半分が後世の溝に切り込まれ消失している。南東角から溝状の落ち込みが分岐している。東西3.5m、南北2.5m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.18mを測る。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層が主体となる。出土遺物には土師器鍋、甕（052～054）がある。

**SI16**（図版19）：第3調査区の東端付近に位置する。SI17と重複する位置にある。断面観察によると、SI17に切り込まれこれに先行する時期と考えられる。建物の平面プランは方形と推定されるが、北側半分が調査区外となり全容は不明である。東西2.7m、南北2.4m以上の規模を有す。検出面からの深さは0.18mを測る。住居の東南角部分で作り付けの竈が検出されている。幅0.7m以上、長さ1.02mで、おおよそ方形のプランを有する。竈床面中央付近で土師器長甕の体部破片の出土がみられる。建物内の覆土は黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物には須恵器杯（055）、土師器甕（056・057）などがある。

**SI17**（図版10）：第3調査区の東端付近に位置する。SI16と重複する位置にある。断面観察によると、SI16を切り込みこれに後出する時期と考えられる。建物の平面プランは方形と推定されるが、北側半分の一部が調査区外となり全容は不明である。東西4.22m、南北4.24mの規模を有す。床面積は17.9㎡である。検出面からの深さは0.22mを測る。建物の東壁北端近くで作り付けの竈が検出されている。幅0.86m、長さ1.1mで隅丸方形のプランを有する。床面中央付近から土師器長甕の破片が出土している。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には須恵器蓋杯、土師器甕（058～065）などがある。

**SI18**（図版11）：第4調査区の北端に位置する。SB07の北側に隣接する。付近での堅穴建物はこれ1棟のみが検出されている。建物の平面プランは方形と思われるが、建物の東側が消失しており全容をうかがい知ることができない。東西3.72m以上、南北3.4m、検出面からの深さ0.1mを測る。正確な床面積は不明。建物の南西角で作り付けの竈が検出されている。建物自体の残りが悪いことからわかるように、竈も煙道部分は残存せず、竈の基底部と左袖の張り出し部分のみが確認できる。また床面全体に貼床が施されている。竈の床面直上で土師器長甕の破片などが散乱して検出されている。建物内の覆土は褐灰色砂粘質土層を主体とする。出土遺物には土師器甕（066～068）などがある。

**SI19**（図版11）：第4調査区の南側に位置する。SI20・21の東側に隣接する。建物の平面プランは方形である。東西2.7m、南北3.1m、検出面からの深さ0.09mを測る。床面積は8.37㎡を測る。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物は認

められない。

**SI20** (図版11) : 第4調査区の南側に位置する。SI19の西側に隣接する。SI21と重複しこれに切り込まれる。建物の平面プランは方形であるが、一部は調査区の西側にのびる。東西2.4m以上、南北2.36m、検出面からの深さ0.2mを測る。建物内の覆土はにぶい黄褐色～暗褐色砂粘質土層となる。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていないが、建物の床面から遺物が散乱した状態で出土した。出土遺物には須恵器杯、土師器甕 (069～077) などがある。

**SI21** (図版11) : 第4調査区の南側に位置する。SI19の西側に隣接する。SI20と重複しこれを切り込む。建物の平面プランは方形であるが、一部は調査区の西側にのびる。東西2.8m以上、南北1.18m、検出面からの深さ0.1mを測る。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層となる。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。出土遺物には土師器甕 (078・079) がある。

**SI22** (図版11) : 第4調査区の南側に位置する。SI19～21の南側に隣接する。建物の平面プランは方形であるが、一部は調査区の東側にのびる。東西3.1m以上、南北3.34m、検出面からの深さ0.08mを測る。建物内の覆土は褐灰色砂粘質土層を主体とする。床面の一部に貼床がみられる。出土遺物には土師器甕 (080～085) などがある。

**SI23** (図版12) : 第6調査区の西側に位置する。付近での堅穴建物はこれ1棟のみが検出されている。建物の平面プランは方形である。本調査地では珍しく堅穴建物の全容を知れる事例である。東西3m、南北2.63m、竈の運道部分を含めた全長3.48mの規模となる。床面積は7.89㎡、検出面からの深さ0.12mを測る。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を主体とする。建物の東壁や南側で作り付けの竈が検出されている。竈は幅0.83m、長さ1.57m、焚き口付近が浅くピット状に落ち込み、そこから煙道が東側に直線的にのびる形態である。また床面全体には貼床が施されている。図化可能な出土遺物は認められない。

**SI24** (図版12) : 第7調査区の西側に位置する。周辺にはSI27・28・29などが密集して所在する。建物の平面プランは方形である。本体の南側半分が調査地外となる。このため建物の全容はうかがい知れないが、東西3.95m、南北2.5m以上の規模を測る。検出面からの深さ0.24mを測る。建物内の覆土は浅黄色～にぶい黄褐色砂粘質土層となる。須恵器蓋、土師器甕 (086～091) が出土している。

**SI25** (図版12) : 第7調査区の中央に位置する。周辺にはSI27・28・29などが密集して所在する。建物の平面プランは方形である。本調査地では珍しく全容を知ることのできる事例である。東西3.23m、南北3.13m、検出面からの深さ0.17m、床面積10.1㎡を測る。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を主体とする。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。出土遺物は認められない。

**SI26** (図版12) : 第7調査区の中央に位置する。SI25の東側に位置する。建物の平面プランは方形であるが、本体の大半が北側の調査区外となる。東西4.81m、南北2.3m以上、検出面からの深さ0.2mを測る。建物内の覆土は黒褐色～灰黄褐色砂粘質土層を主体とする。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。須恵器杯、土師器甕 (092～095) などが出土している。

**SI27** (図版13) : 第7調査区の西側に位置する。周辺にはSI28・29などが密集して所在する。建物の平面プランは方形である。断面観察からSI28・29を切り込みこれに後出する。東西3.35m、南北3.25m以上、検出面からの深さ0.25mを測る。建物内の覆土は砂粘質土層となる。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。須恵器蓋杯、土師器甕 (140～145) が出土している。

**SI28** (図版13) : 第7調査区の西側に位置する。周辺にはSI27・29などが密集して所在する。建物の平面プランは方形である。断面観察からSI29を切り込みこれに後出する。さらにSI27に切り込まれ、これに先行する。東西3.32m、南北2.9m以上、検出面からの深さ0.27mを測る。建物内の覆土はにぶい褐

色砂粘質土層が主体となる。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。遺物としては須恵器蓋杯、土師器杯壺（135～139）などが出土している。

**SI29**（図版13）：第7調査区の西側に位置する。周辺にはSI27・28などが密集して所在する。建物の平面プランは方形と推定される。断面観察からSI27・28に切り込まれこれに先行する。東西2.3m以上、南北0.8m以上、検出面からの深さ0.3mを測る。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層が主体となる。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。須恵器杯、壺、土師器杯、皿、椀、甕（123～134）、鉄洋（553）などが出土している。

**SI30**（図版13）：第2調査区中央やや東側に位置する。SI05と06の間に位置する。建物の平面プランは方形であるが、部分検出のため竈穴建物の全容は不詳である。東西1.5m以上、南北2.6m以上、検出面からの深さ0.07mを測る。建物内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層となる。柱穴や竈、貼床などの内部施設は検出されていない。須恵器蓋杯（111～113）などが出土している。

### 土坑

**SK01**（図版14）：第2調査区西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.69～0.82m、検出面からの深さ0.32mを測る。土坑内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては土師器壺口縁（096）などがある。

**SK02**（図版14）：第2調査区西側に位置する。SB03の柱穴の一つである。平面プランは不整形円形を呈する。長径1.03m、短径1m、検出面からの深さ0.5mを測る。土坑内の覆土は上層黒褐色砂粘質土層、下層灰黄褐色砂粘質土層となる。柱痕痕跡は認められない。出土遺物には須恵器蓋（097・098）がある。

**SK03**（図版14）：第2調査区西側に位置する。SB03の柱穴の一つである。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.63～0.78m、検出面からの深さ0.45mを測る。土坑内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。また中央付近で柱痕痕跡が検出されている。出土遺物としては須恵器蓋（099）がある。

**SK04**（図版14）：第2調査区西側に位置する。平面プランは瓢箪形を呈する。長径5.9m、短径2.4m、検出面からの深さ0.15mを測る。土坑内の覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては土製支脚（100）がある。

**SK05**（図版14）：第2調査区西側に位置する。SB02・03の東側に隣接する。平面プランは長楕円形を呈する。長径2.03m、短径0.94m、検出面からの深さ0.53mを測る。土坑内の覆土は褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物として土師器甕（101）、土師器墨書杯底部破片（102）がある。

**SK06**（図版14）：第2調査区西側に位置する。SB02・03の東側に隣接する。SK07と重複しこれを切り込んでいる。平面プランは楕円形を呈する。長径1.11m、短径0.88m、検出面からの深さ0.6mを測る。土坑内の覆土は浅黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては須恵器蓋（103・104）がある。

**SK07**（図版14）：第2調査区西側に位置する。SB02・03の東側に隣接する。SK06と重複しこれを切り込まれている。平面プランは不整形楕円形を呈する。長径1.62m、短径0.9m以上、検出面からの深さ0.56mを測る。土坑内の覆土は浅黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては須恵器杯（105）がある。

**SK08**（図版14）：第2調査区西側に位置する。SB02・03の東側に隣接する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.82～0.87m、検出面からの深さ0.48mを測る。土坑内の覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては須恵器蓋（106）がある。

**SK09**（図版14）：第2調査区中央に位置する。SB05の東側に隣接する。平面プランは円形を呈する。

径0.7m、検出面からの深さ0.38mを測る。土坑内の覆土はにぶい黄橙色砂粘質土層などで構成される。出土遺物としては須恵器杯(107)がある。

**SK10** (図版14) : 第2調査区の中央に位置する。SB06の柱穴の一つである。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.82~0.87m、検出面からの深さ0.34mを測る。土坑内の覆土は浅黄褐色砂粘質土層などから構成される。柱穴中央に柱痕痕跡が残る。出土遺物としては須恵器杯(108)がある。

**SK11** (図版15) : 第2調査区の中央に位置する。SB06の柱穴のひとつである。平面プランは円形を呈する。径0.7m、検出面からの深さ0.3mを測る。土坑内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層である。柱穴中央に柱痕痕跡が残る。出土遺物としては土師器壺(109)がある。

**SK12** (図版15) : 第2調査区の中央に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.7~0.83m、検出面からの深さ0.14mを測る。土坑内の堆積土層はにぶい黄橙色砂粘質土層などで構成される。出土遺物としては須恵器杯(110)がある。

**SK13** (図版15) : 第2調査区の東側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.78~0.85m、検出面からの深さ0.5mを測る。土坑内の堆積土層は黒褐色砂粘質土層などで構成される。出土遺物としては須恵器杯(114)がある。

**SK14** (図版15) : 第2調査区の西側に位置する。SB03の柱穴の一つである。平面プランは円形を呈する。径0.84~0.95m、検出面からの深さ0.38mを測る。土坑内の堆積土層は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては土師器皿(115)、土師器甕(116)がある。

**SK15** (図版15) : 第2調査区の中央に位置する。平面プランは不整形円形を呈する。長径1.46m、短径1.18m、検出面からの深さ0.12mを測る。土坑内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層などで構成される。出土遺物としては須恵器蓋(117)がある。

**SK16** (図版15) : 第1調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈する。径0.77~0.8m、検出面からの深さ0.57mを測る。土坑内の覆土は上層褐色砂粘質土層、下層黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物としては須恵器蓋(118)がある。

**SK17** (図版15) : 第7調査区西側に位置する。平面プランは円形を呈する。径0.97~1m、検出面からの深さ0.18mを測る。土坑内の覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては土師器壺(119・120)がある。

**SK18** (図版15) : 第7調査区西側に位置する。平面プランは円形を呈する。径1m、検出面からの深さ0.18mを測る。土坑内の覆土は褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては土師器杯(121・122)がある。

## 柱穴

**SP01** (図版3) : 第2調査区東端付近に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.6m、検出面からの深さ0.31mを測る。土坑内の覆土は褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には土師器甕取っ手破片(146)がある。

**SP02** (図版3) : 第2調査区の西端付近に位置する。SB04の柱穴の一つを構成する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.72m、検出面からの深さ0.45mを測る。土坑内の覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては須恵器蓋破片(147)がある。

**SP03** (図版3) : 第2調査区の西端付近に位置する。SB04の柱穴の一つを構成する。平面プランは隅丸方形を呈する。一辺0.52m、検出面からの深さ0.37mを測る。土坑内の覆土は黒褐色砂粘質土層であ

る。出土遺物としては須恵器蓋（148）がある。

**SP04**（図版3）：第2調査区中央付近に位置する。平面プランは円形を呈する。長径0.58m、短径0.46m、検出面からの深さ0.24mを測る。土坑内の覆土にはぶい黄褐色砂粘質土層である。出土遺物としては土師器甕（149・150）がある。

**SP05**（図版15）：第4調査区北側に位置する。SB07の柱穴の一つである。平面プランは円形を呈する。径0.73m、検出面からの深さ0.28mを測る。土坑内の覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。柱穴内からは柱材と考えられる木製品が出土している。

**SP06**（図版3）：第2調査区中央付近に位置する。平面プランは円形を呈する。長径0.5m、検出面からの深さ0.16mを測る。土坑内の覆土は上層はぶい黄褐色砂粘質土層、下層は黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物としては磁石（552）がある。

**SP07**（図版3）：第4調査区のSB07を構成する柱穴の一つである。平面プランは隅丸方形を呈す。一辺0.68～0.78m、深さ0.43mの規模である。柱穴内の覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。柱穴内から柱痕木片が出土している。

## 溝

**SD01**（図版3）：第2調査区中央付近から第1トレンチ南側にかけて南東から北西にむかっのびる旧河道と考えられる。上流の第2調査区付近での規模は最大幅7m、検出面からの深さ0.45m、下流の第1調査区付近での規模は最大幅6.8m、検出面からの深さ0.88mを測る。溝内の堆積土層は上層が黄灰色系砂粘質土層で、下層から地山直上に黒褐色系砂粘質土層が堆積する。出土遺物としては古代の須恵器、土師器、黒色土器などがある（151～170）。この溝は平成8～10年度調査地Ⅱ地区検出のSD01の下流部分にあたるものと推定される。報告文のなかでは中世段階にはほぼ埋没した河道跡と考えられている。

**SD02**（図版3）：第4調査区北端付近に位置する。幅0.56m、長さ2.04m、検出面からの深さ0.3mを測る。溝内の堆積土層は砂粘質土層である。出土遺物としては須恵器杯（171～173）がある。

**SD03**（図版2）：第2調査区東端部にあり第4調査区中央と交わる位置で検出された溝である（図版2下段）。最大幅1.88m、長さ9m以上、検出面からの深さ0.25mを測る。溝内の堆積土層はぶい黄褐色砂粘質土層を主体とし、これに一部黒褐色砂粘質土層が混入する。出土遺物としては須恵器杯類、土師器甕（174～178）がある。

**古代の小溝群**（図版2）：第3調査区西側で概ね南北方向を向く小溝群を検出した（図版2中段）。これらの小溝群は竪穴建物に後出する時期でこれを切り込んでいる。出土遺物もなく時期は不詳であるが、平成8～10年度調査地Ⅱ地区でも同様の小溝が多数検出されている。報告文では古代の畑に関連する小溝群と捉えられており、本調査地の小溝も同種の遺構であると判断される。

## 第4節 遺物

上新保遺跡からは、主に古代を中心とした時期の遺物が多数出土している。出土遺物の主体を占めるのは土器類である。土器類は遺物収納用コンテナで約32箱分の数量がある。土器の種類としては古代の土師器、須恵器が過半を占め、これに少量の黒色土器が認められる。古代以外の出土遺物はきわめて少ない。中世土師器、珠洲、近世の越中瀬戸などがみられるが、きわめて微量である。土器類以外では柱穴から出土した建物の柱材のほか鉄滓、磁石などがある。古代の遺物は竪穴建物、土抗、柱

穴、溝などから出土している他、包含層から出土したものも多い。以下に遺構出土の遺物から順次記述していく。なお出土量の多い須恵器の杯類については記述の便宜をはかるため、底部が平底で高台のつかないものを杯A、貼り付けの高台を有するものを杯Bと呼称する。また須恵器杯に比べ数は少ないものの、土師器杯についても同様の便宜的分類を適用する。

#### 竪穴建物出土遺物

**SI01** (図版16 001~007) : 001・002は須恵器蓋である。001は器高がなく扁平な天井部を有し、口縁端部を下方に短く折り曲げる。天井部の中央に扁平な宝珠状つまみを有する。口径15.3cm、器高2.6cmの法量を有する。002もほぼ同形態の蓋である。003は須恵器杯Aで体部が外方に逆「ハ」字状に大きく開く。復元口径10.8cm、器高3.1cmの法量を有す。004~007は土師器である。004は小型の鉢である。口縁部は短く「く」字状に屈曲する。底部はやや丸底気味である。体部外面にハケの痕跡が残る。口径12.8cm、器高5.2cmの法量を有す。005は取っ手付き鉢である。球形の体部から口縁部が短く直立する。取っ手は断面が長楕円形を呈し、短く上方につまみあげる。残存する取っ手は1個であるが、取っ手の形態が短く扁平なため両手保持のための2個の取っ手に図上復元した。006・007は土師器甕の口縁部破片である。口縁部はいずれも「く」字状を呈するが、006は口縁部の端面が平坦で切り立っており、中法量の長甕と考えられる。007は大法量の甕と思われる、口縁端部は単に丸くおさめる。

**SI02** (図版16 008) : 008は須恵器杯Aの破片である。底端部が強く屈曲して、口縁部がゆるやかな「S」字状を描く。

**SI03** (図版16 009) : 009は製塩土師の底部破片である。能登式製塩土師の尖底部分に相当するものと考えられる。今回の調査地出土品で実測可能な製塩土師はこれ1点のみである。付近は海岸部より10kmほど内陸に位置するが、富山平野上に展開する古代集落では製塩土師の出土がしばしば報告される。おそらく容器として転用されて運び込まれたのであろう。

**SI04** (図版16 010~014) : 010・011は須恵器杯Bである。法量はやや異なるものの、両者とも底端部に外方に踏ん張る断面台形の低い高台が貼り付けされている。012~014は土師器長甕である。いずれも「く」字状口縁を呈するが、口縁端部を内側に巻き込むように肥厚させている。口縁部および体部の内外に横方向の回転カキ目を施す。外面の体部下半は縦方向に手持ちヘラ削りされる。

**SI05** (図版16 015) : 須恵器蓋の小破片が1点のみ出土している。口縁部は先端を下方につまみだすようにして作出され、断面は嘴状を呈する。

**SI06** (図版16 016~018) : 016は須恵器杯Aである。底端部の屈曲が弱く、浅く外方へ開く口縁部を有する。底部は切り離し後に回転ヘラ削りが施されている。017は小型の土師器甕である。平底気味の球形体部から口縁部が受け口状に内湾して立ち上がる。内面および体部外面上半は横ナデされる。体部下半は手持ちヘラ削りが施されている。018は「く」字状口縁を有する長甕である。口縁端部は丸くおさめる。口縁部内面および体部の内外面に回転カキ目調整する。体部下半は叩き目と当具痕が残る。

**SI08** (図版16 019~024) : 019・020はともに須恵器蓋の小破片である。019は天井部のみが、020は口縁端部のみが残存する。021・022は須恵器杯Bである。021は底部のみの破片。022は口径15.3cm、器高6.3cmの大型法量の杯である。高台の形状は角高台。体部は直立気味に外傾する。023・024は中型の土師器甕で、球形体部に「く」字状口縁部を有し、口縁端部は内側に巻き込むように肥厚させている。体部外面の上半は回転横ナデ、下半は外面が手持ちヘラ削り、内面はハケ調整される。法量は023が口径19cm、024が口径19.4cm、器高18.8cmとなる。

**S109** (図版16 025) : 須恵器杯Aが1点出土している。平坦な底部から体部が浅く直線的に開く形態である。口径11.4cm、器高3.4cmの法量を有する。

**S110** (図版16 026~036) : 026~030は須恵器蓋である。026・027はやや小型の蓋で、口径12.3cm、器高2.4~2.7cmを測る。天井部の宝珠状つまみは扁平だが稜線は鋭い。口縁端部は下方に短くつまみ出す。028・029は天井部から口縁部がなだらかに開き、口縁端部は短く三角形状につまみ出す。029の法量は口径17cm、器高3.6cmを測る。030は犬井部から口縁部にかけて緩やかに「S」字状を描く。口縁端部は内側に巻き込むように肥厚させる。口径15.8cm、器高2.5cmの法量を有する。031は須恵器杯Aである。平坦な底部から体部が開く。032は黒色土器大型杯の底部で、内黒焼成のいわゆるA類である。内底面全体にランダムで荒いヘラ磨きを施す。本調査地での黒色土器の出土は少ない。これは平安時代以降の遺物が相対的に少ないことと関連するものと考えられる。033~036は土師器小型甕である。033、036は底部の破片。034・035は球形・平底の底部に短く「く」字状に開く形態。口縁端部はわずかに内側に屈曲させる。体部上半は横ナデ、下半外面は手持ちヘラ削りを施す。法量はほぼ復元できる024では、口径19.4cm、器高18.8cm、底部径8cmを測る。

**S111** (図版17 037~044) : S111からは土師器甕類が多く出土している。まず043は須恵器蓋である。低平だが丸みを帯びた犬井部から口縁部が「S」字状に屈曲する。口縁端部は嚙上に先端が尖る。口径14.8cm、器高2.6cmの法量を有する。037~042はいずれも体部が長胴型を呈する土師器長甕である。口縁部はいずれも「く」字状に屈曲し短く開くが、端部の形状には面を有するもの(038~040)と、単に丸くおさめるもの(037、042)がある。器面調整では、口縁部内面に回転力を利用した横ハケを施すものが多いが、体部については外面に縦方向のハケを施すもの(037、040)と、内外ともカキ目を施すもの(038)がある。また図上復元ではほぼ器形の全体を知ることのできる042では、体部外面上半3分の1をカキ目調整、外面中位下半に叩き目、体部下半から底部にかけては縦方向の手持ちヘラ削りが観察される。体部内面は上半部がカキ目調整、中位から下半が縦方向のハケ調整、底部付近がヨコナデとなっている。法量は口径20cm、体部最大径が21.2cm、器高は30cm前後と推定される。本遺跡出土資料の中では土師器長甕の好例といえよう。041は土師器鍋の口縁部破片である。口縁部は短く「く」字状に屈曲し、口縁端部に端面を有す。044は土師器取っ手付き鉢である。基本的な形態や調整手法はS101出土の005に類似するが、取っ手が角状で厚みがあり側方に突出する形態である。

**S112** (図版17 045~049) : 045は須恵器蓋の天井部破片である。046~049はいずれも土師器長甕の口縁部破片と考えられる。体部から口縁部が屈曲して逆「ハ」字状に開く形態である。口縁端部は丸くおさめるもの(046・047、049)と、丸みを帯びるが端面を形成するもの(048)とがある。体部調整では内外面とも回転力を利用しない縦ハケを施すもの(046)、内外面とも回転力を利用した横方向のカキ目を施すもの(048)などがある。

**S113** (図版17 050) : 050は土師器長甕の底部破片と考えられる。外面には縦方向のハケ調整が、内面は一樣にナデ仕上げが施されている。

**S114** (図版17 051) : 051は須恵器杯Bである。体部は底端部から緩やかに屈曲し外傾する。高台は「ハ」字状に踏ん張るもので、底端部よりかなり内側に貼り付けされる。口径14.3cm、器高3.9cmの法量を有す。

**S115** (図版17 052~054) : 052は土師器長甕の底部破片である。体部外面には縦方向の手持ちヘラ削りが、内面にはランダムな方向のハケ調整がみられる。053も土師器長甕の体部破片である。外面の上半には横方向のカキ目が、下半は縦方向の手持ちヘラ削りが施される。内面は一樣にヨコナデ仕上げ

されている。054は土師器鍋の体部破片と考えられる。外面上位はカキ目、下半は手持ちヘラ削り。内面は横方向のランダムなハケ調整が施されている。

**SI16** (図版17 055~057) : 055は須恵器杯Bの底部破片である。高台は外方に踏ん張る「ハ」字状の形態である。056は土師器長甕の口縁部破片で、口縁端部に端面を有する。内外面をカキ目調整する。057も土師器長甕の体部破片で、外面上半および内面を縦ないし斜方向のハケ調整、外面下半を縦方向の手持ちヘラ削りしている。

**SI17** (図版17 058~065) : 058~060は須恵器蓋である。058は口径12.3cm、器高2.3cmと小振りの法量で、口縁端部は内側に肥厚させるように丸く巻き込む。059は天井部の宝珠状つまみが扁平で大きい。口縁端部は外方に吻上に鋭くつまみ出している。口径16cm、器高3.2cmの法量を有する。060は蓋の小破片で、口縁端部は短く下方に折り曲げる。061は須恵器杯Aで、平坦な底部より体部が屈曲して斜外方に直線的に開く。062、064・065は土師器長甕の口縁部破片で、口縁端部は丸くおさめるもの(062、064)と端面をもつもの(065)がある。064については体部の内外面に縦ないし斜方向のハケ調整を施す。063は土師器小型甕の底部破片と考えられる。外面は手持ちヘラ削りされている。

**SI18** (図版18 066~068) : 066は砲弾型の長胴を有する典型的な土師器長甕である。口縁部は短く逆「ハ」字状に開き、端部は丸くおさめる。体部上半は内外ともヨコナデ仕上げ、下半は外面が縦方向の手持ちヘラ削り、内面は斜方向のランダムなハケ調整を施す。底部は丸底。口径20.2cm、体部最大径21.8cm、器高34.9cmの法量を有する。067は土師器長甕の体部破片で、上半の内外面はカキ目、下半は外面が縦方向の手持ちヘラ削り、内面は斜方向のハケ調整が施される。068も長甕の口縁部破片で、端面のある「く」字状口縁と、内外にカキ目調整を施した体部を有する。

**SI20** (図版18 069~077) : 073は須恵器杯Aの口縁部破片と考えられる。074は土師器小型甕の口縁部破片である。069~072、075~077は土師器長甕。070~072は口縁端部に面を有する。他は単に丸くおさめている。070~072、076・077は体部の内外がカキ目調整される。069・075は外面は縦方向のハケ調整を施す。概ね口縁部径が体部最大径を上回っているが、075のみやや張りのある体部を有する。

**SI21** (図版18 078・079) : 078・079とも土師器鉢の口縁部と考えられる。体部から口縁部が屈曲して口縁部は外傾気味に立ち上がる。いずれも口縁端部は面を有する。体部外面にはカキ目が残る。口径は30cmを超える

**SI22** (図版18 080~085) : 080は土師器小型甕の口縁部破片、081は底部破片である。082~085は土師器長甕の口縁部破片である。いずれも体部から口縁部が逆「ハ」字状に開き、端部に面を有する。083・084は体部の内外面にカキ目を施す。これに対し082・083は体部内外面を縦方向にハケ調整している。

**SI24** (図版18 086~091) : 086~088は須恵器蓋である。086・087は口縁部破片で、丸みのある天井部から口縁部がなだらかにのび、口縁端部は下方に短く折り曲げられる。088は宝珠状つまみのみが残存する。089~091は土師器長甕である。089・090は口縁部の破片で、口縁端面を内側につまみ出し、断面が三角形形状を呈する。091は底部の破片で、丸底ではなく平底を早している。

**SI26** (図版18 092~095) : 092は土師器杯Aの底部破片である。093は須恵器杯Aで、平坦な体部から口縁部が外傾して直線的に広がる。口径13.2cm、器高8.6cmの法量を有する。094・095は土師器小型甕の口縁部破片である。逆「ハ」字状に開く口縁部の端部は軽く内側につまみ出している。体部の内外面はヨコナデ調整される。

**SI27** (図版19 140~145) : 140・141は須恵器蓋で、なだらかな丸みを帯びた天井部と下方に短く巻き込んだような口縁端部を有する。いずれも天井部の宝珠状つまみを欠失している。143・144は須恵

器杯Bの底部破片である。高台形態には、底端部の内側に角高台を有する143と、外方に踏ん張る「ハ」字状高台の144がある。145は土師器長甕の口縁部小破片である。外反して丸く収める口縁部の形態である。

**SI28** (図版19 135~139) : 135は須恵器蓋でなだらかな丸みを帯びた天井部と下方に短く折り曲げた口縁端部を有する。136は須恵器杯Aで、平底の底端部から体部が緩やかに内湾しながら開く。口縁部の内外に煤が付着している。口径11.8cm、器高3.6cmの法量を有する137・138はいずれも土師器杯Aの底部である。139は土師器小型甕の口縁部破片で、短く「く」字状に開く口縁部の端部は内側に巻き込むように肥厚させている。

**SI29** (図版19 123~134) : 123~127は土師器杯Aである。いずれも平坦な底部から体部が内湾しながら開き、口縁端部は丸くおさめる。体部下半から底部外面に回転ヘラ削りを加え、底端部が鋭くエッジが立っているものが多い。また赤彩はみられないものの、明るい赤褐色に発色する胎土を使用している。法量は口径11~12cm、器高4~5cm台におさまる。128は赤彩土師器の皿の口縁部破片である。体部から口縁部が浅く直線的に開く形態である。内外面が赤彩されている。129は赤彩土師器の杯B底部である。一応杯Bとしたが、壺系器模倣の器形であり、本来は碗とすべきものであろう。高台は「ハ」字状に踏ん張る貼り付け高台で、内底面には回転糸切りの痕跡が残る。内底面および体部外面に赤彩が残存する。130は須恵器杯Bの体部破片と考えられる。体部は直線的に外傾する。131、133は土師器小型甕の口縁部破片である。口縁端部は内側に巻き込むように肥厚させる。132、134は土師器長甕の口縁部破片である。口縁端部に面を持ち、132についてはさらに内端をつまみ上げるように持ち上げている。553は鉄滓である。長軸9.5cm、短軸8.2cm、厚さ4.1cmの現況残存である。形状からみると碗型滓と考えられ、分析結果もこれを証左している。ただ今回の調査で鍛冶に関連する遺物は残念ながらこの1点だけである。

**SI30** (図版19 111~113) : 111・112は須恵器蓋である。111は低平な天井部に扁平な宝珠状ツマミを付す。口縁端部は内側に短く急角度に折り込んでいる。口径15.8cm、器高3.2cmの法量を有す。112は111に比べ口径は小さいが器高は増す。天井部中央の宝珠状つまみも高さのあるしっかりしたものが付く。口径11.3cm、器高3.3cmの法量を有す。113は須恵器杯Aで、底部から体部が屈曲して外傾気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収めず面を有する。口径11.2cm、器高3.8cmの法量を有する。

#### 土坑出土遺物

**SK01** (図版19 096) : 096は、土師器鉢の口縁部の小破片である。「く」字状に外反する口縁部の端部は面取りを施す。

**SK02** (図版19 097・098) : 097・098は須恵器蓋の破片である。097は天井部から口縁部にかけて緩やかに丸みを帯び、端部は下方に短く折り曲げている。098は低平な天井部を有し、口縁端部は短く三角形形状につまみ出す。

**SK03** (図版19 099) : 099は須恵器蓋である。復元口径11.6cmと小振りの法量で、口縁端部は短く斜外方に折り曲げている。

**SK04** (図版19 100) : 100は土師器焼成の土製支脚の破片と考えられる。円柱状に手づくね成形されている。

**SK05** (図版19 101・102) : 101は土師器長甕の体部破片と思われる。外面に叩き目、内面に当具痕が残る。このうち内面の当具痕は放射状(車輪状)を呈している。同様の当具は北陸以外では北部九

州地域でもみることができる。102は土師器杯Aの底部破片で、外底面に墨書が確認できる（字義の判読は不明）。底部には回転糸切り痕がそのまま残る。

**SK06**（図版19 103・104）：103・104は須恵器蓋である。天井部は丸みを帯びて浅く開き、口縁端部は短く下方に折り曲げている、103は天井部中央に扁平な宝珠状ツマミを有する。口径15cm、器高3.2cmの法量を測る。

**SK07**（図版19 105）：105は須恵器杯Bの底部破片である。「ハ」字状に踏ん張る高台を有する。

**SK08**（図版19 106）：106は須恵器蓋で、天井部は丸みを帯びて浅く開き、口縁端部は短く下方に折り曲げる。天井部中央に扁平な宝珠状ツマミを有する。口径12.6cm、器高2.9cmの法量を測る。

**SK09**（図版19 107）：107は須恵器杯Bの底部破片で、高台の形状は角高台を呈する。

**SK10**（図版19 108）：108は須恵器杯Bの底部破片である。幅のある角状の高台が付く。

**SK11**（図版19 109）：109は土師器の壺である。口縁端部は玉縁状に外部に肥厚している。

**SK12**（図版19 110）：110は須恵器杯Bである。口縁部を欠失するが、杯部は深く体部が外傾気味に直線的に立ち上がる形態である。底部には外方に踏ん張る「ハ」字状の高台がつく。外底面に「×」字状のヘラ記号を刻む。

**SK13**（図版19 114）：114は須恵器杯Aである。底端部の屈曲は弱く、体部は短く外傾する。口径14.2cm、器高3.1cmの法量を測る。

**SK14**（図版19 115・116）：115は本調査地では珍しい土師器皿の口縁部破片である。体部から口縁部にかけて直線的に浅く開き、端部は鋭く尖らせている。口縁端部周囲に沿って煤の付着する部分が見られる。116は「く」字状口縁を有する土師器甕の破片で、口縁端部に端面を有する。

**SK15**（図版19 117）：117は器高のある須恵器蓋の口縁部破片である。

**SK16**（図版19 118）：118は須恵器蓋の天井部破片で、宝珠状ツマミの剥脱した痕跡が残る。

**SK17**（図版19 119・120）：119・120はともに土師器長甕の口縁部破片である。119は口縁端部を内側に巻き込むように肥厚させており、断面が球状を呈する。120も同形態の甕と考えられるが、端部内側の肥厚面が剥脱しており残存しない。

**SK18**（図版19 121～122）：2点とも土師器杯Aである。121は平坦な底部から切り立つように体部が内湾気味に浅く開き、口縁端部は鋭く仕上げる。体部の内外面に回転ヨコナデ痕が残る。体部下半から底部外面は丁寧に回転ヘラ削りが施されている。赤彩はみられないが、明るい赤褐色に発色する胎土を使用している。口径11.8cm、器高3.8cmの法量が復元される。122も土師器杯Aである。形態は121に類似するものの、底部外面はヘラ削りされずに、糸切り痕がそのまま残る。胎土も赤褐色に発色せず黄灰色で、砂粒を多く含むものが使われている。口径13.6cm、器高4.4cmを測り、121よりも心持ち大法量となっている。

#### 柱穴出土遺物

**SP01**（図版19 146）：146は土師器甌の取っ手と考えられる。典型的な土師器の甌は本調査地では確認されていないが、形状や大きさから考えると、砲弾型で平底有孔型甌の取っ手の可能性が高いものと考えられる。

**SP02**（図版19 147）：147は須恵器蓋の口縁部小破片で、口縁端部は短く下方に折り曲げている。

**SP03**（図版19 148）：148は須恵器蓋で、扁平な天井部に緩く屈曲する口縁部を有し、端部は下方に折り曲げるようにして作り出されている。天井部中央の宝珠状ツマミも高さがなく扁平である。口径13.5cm、器高2.2cmの法量を有す。

**SP04** (図版19 149・150) : 149は土師器長甕の口縁部破片である。口縁端部は短く受け口状につまみ出している。150は土師器小型甕の底部である。

**SP05** : 掘立柱建物の柱部材と考えられるが、保存状況は良くない。榑榑同定で杉材とされる。

**SP06** (図版28 552) : 552は砥石である。上端を大きく折損し、下端も欠失部分が見られる。角柱状を呈する。残存長10.6cm、幅3.5cm、厚さ2.4cmを測る。4面とも使用しており、中央部分が使用に伴う摩滅でへこんでいる。

## 溝出土遺物

**SD01** (図版20 151~170) : 151~156は須恵器蓋である。天井部から口縁部にかけて緩く「S」字状をえがく154以外は、概ね丸みをおびてゆるやかに開く器形のものとなる。口縁端部は内側に丸く肥厚するようにおさめられるものが多い。法量は151~153が口径12~13cm台、それ以外はやや大振りの法量となる。157~162は須恵器杯Bである。157は復元口径16.8cmを測る大法量の杯Bの口縁部、158は同様の大法量の底部破片である。これに比べ159~162はやや小振りの法量を有する杯Bである。器形の全容がわかる159・160では底端部から屈曲して直線的に外傾する体部に、わずかに外方に踏ん張る角高台に近い形態の高台が貼り付けされる。法量は159が口径12cm、器高3.5cm、160が口径11.8cm、器高3.8cmとなる。163~166は須恵器杯Aである。平坦な底部から体部が強く屈曲し、体部が直線的に開く形態である。このうちほぼ同形態の165、166については口径11~12cm台、器高3.1~3.2cmの法量を有す。167は赤土上土師器杯Aの底部破片である。168は須恵器壺の頸部破片である。本遺跡では須恵器貯蔵具の出土はきわめて少ない傾向にある。169は黒色土器の大型杯Aの体部破片である。内面には荒く太い手持ちヘラ磨きが施されている。口縁部と底部を欠失する。170は土師器長甕の口縁部と考えられる。「く」字状口縁の端部には面取りを施す。

**SD02** (図版20 171~173) : 171は須恵器壺の口縁部破片である。172は須恵器大型甕の口縁部破片で、斜外方にひらく口縁部の内端を上方に軽くつまみ出している。外面には省略され彫刻化した波状文の痕跡が観察される。173は土師器小型甕の口縁部破片である。体部の内外面はヨコナデされる。口縁端部は内側に肥厚させており、一見受け口状の口縁を呈している。

**SD03** (図版20 174~178) : 174・175は須恵器蓋の口縁部破片である。174は口縁部内端に短いカエリを有する形態で、天井部外面にも回転ヘラ削りが増えられている。7世紀代に遡る時期の須恵器である。本調査地ではこれ以外にも包含層出土遺物のなかに何点か7世紀代に遡る時期の須恵器が出土している。これに対し175は口縁端部を短く下方に折り返す形態の蓋である。176~178は須恵器杯Bである。器形の全容がわかる176では、径の大きな底部から体部がみじかく直線的に外傾し底端部の内側に低い「ハ」字状に開く高台が貼り付けされる。口径15cm、器高3.6cmの法量を有する。他の2点も176とほぼ同型式の須恵器杯Bの破片と考えられる。

## 包含層出土遺物

**第1調査区出土遺物** (図版20 179~図版21 218) : 179~189は須恵器蓋である。完存するのは179のみで他は破片資料である。179は丸みを帯びた天井部から口縁部が浅く開き、端部は斜外方に短く先端を尖らせる。天井部には円筒状に近い形状の宝珠状ツマミを付ける。口径10.6cm、器高2.7cmの法量を有する。180~185は口縁部の破片である。端部の形状には下方に短くつまみ出すもの(180・181・184)、内側に巻き込むように折り曲げるもの(182・183)、天井部が面取り風になるもの(185)がある。186

～189は天井部の破片で、口縁部を欠失する。186を除き天井部中央には宝珠状ツマミを貼り付けている。また189については、内面にヘラ記号と考えられる条痕が観察される。190～194は須恵器杯Bである。190が外方に「ハ」字状に踏ん張る高台形態である。他は概ね角状形態の高台が底端部内側に貼り付けられている。体部は底端部から強く屈曲して外傾しながら直線的に立ち上がるものが多い。法量は191が口径15.8cm、器高4.4cm、194が口径11.8cm、器高3.5cmとなる。195～203は須恵器杯Aである。195～198は平坦な底部から底端部が緩く屈曲して体部が外傾して開く。口径に比べ器高が低く浅い形態である。口径11～12cm台、器高3.5cm前後の法量を有する。これに比べ199～201は平坦な底部から外底面に稜を有しながら体部が外傾して大きく開く。口径に比べ器高もあり深い形態である。202・203は須恵器杯Aの底部破片である。204・205は須恵器甕の口縁部破片で、口縁端部の面幅を広くとり、上面を水平か内傾気味に仕上げている。206・207は須恵器広口壺である。残りの良い207では、斜外方に外反気味に開く頸部に、受け口状に内端を上方につまみ出した口縁部が付く。体部は上半部で鋭く屈曲し、その屈曲稜線上に並行して一条の沈線を巡らせる。沈線はさらに肩部と頸部中位にも二条一単位のものも施されている。体部下半は底部に向かってほぼ直線的に窄まり、底部には欠失するものの足高で「ハ」字状に大きく踏ん張る高台の痕跡が認められる。口径15.2cm、体部最大径19cm、器高は23cm前後と考えられる。既述のように本遺跡の場合、須恵器壺・甕類と言った貯蔵容器の出土はきわめて少ないのが実情である。208は土師器の鉢か瓶の取っ手と考えられる。209は須恵器杯Aの底部破片で、底部外面に回転切り痕が残る。210・213は土師器甕の口縁部破片で、ともに口縁部が「く」字状に短く外反し、先端は鋭く仕上げる。球状ないしはそれに近い体部が想定される。211・212、214～216は土師器長甕である。211・216は「く」字状に短く折り曲げた口縁部の先端を丸くおさめる。体部の内外面にカキ目が残る。212も長甕の体部破片である。底部は欠失するが平底に近い形態のようである。214・215は「く」字状口縁部の端部に面を有するタイプである。端部下端を側方につまみ出すもの(214)と、上端を三角形につまみあげるもの(215)がある。217は削りだしの輪高台を有する椀で、内面に灰釉が施釉されている。近世以降の時期の所産と考えられる。218は近世の越中瀬戸灰釉小皿の底部破片で、内底面に菊花文のスタンプがみられる。時期的に見ていずれも包含層中での後世の混入と考えられる。

**第2調査区出土遺物** (図版21 219～図版22 285) : 219～243は須恵器甕である。219～224は、比較的扁平な天井部から口縁部が浅く開く形態である。口縁端部は下方につまみ出すようにして作出されるため、断面が三角形ないしは嘴状を呈している。天井部には扁平な宝珠状ツマミがみられる。法量は口径14～16cm、器高2.8～3.4cmを測る。219については内面の中央に「×」字状のヘラ記号が刻まれている。225～227は天井部が盛り上がり器高のあるタイプの甕である。口縁端部は内側に肥厚するように丸め込んでいる。天井部のツマミも退化して寸胴型となる。法量は225は口径15.8cm、器高4.9cm、226が口径16.1cm、器高4cmとなる。225については天井部外面に「一」字状のヘラ記号を刻み込んでいる。228～233・240・241は口縁端部の形状が断面角状になるものである。とくに残りの良い233の例では、平坦な天井部から体部が浅く下方に開き、天井部中央には扁平な宝珠状ツマミを付している。口径11.5cm、器高2.7cmの法量を測る。235・236は全体に器高がなく低平で、天井部と口縁部の境界が不明瞭である。口縁端部は内側に巻き込むように丸く収めている。235は口径12.4cm、器高2.9cm、236は口径13cm、器高2.1cmの法量を有する。236については内面の中央に「×」字状のヘラ記号を刻んでいる。237～243は口縁端部を下方に折り曲げる形態である。244～254は須恵器杯Bである。245～248は口径に比べ器高が低く体部が浅い角度で外傾し、外方に「ハ」字状に踏ん張る高台を有するものである。器

形の全容のわかる245では、復元口径14cm、器高3.6cmの法量を有する。これに比べ244・250・251は外方に「ハ」字状に踏ん張る高台を有するもの、口径に比べ器高があり、体部が底端部で強く屈曲し、外傾気味に立ち上がる形態である。法量にはいくつかの構成があるが、器形の全容の知れる251では口径10.4cm、器高4.2cm、252では口径12.1cm、器高4.3cmの法量を測る。251については内底面に「=」字状のヘラ記号を刻んでいる。252～254は、器形自体は251・252に類似するが、底部の貼り付け高台が「ハ」字状に外方に踏ん張るものではなく、角状のものとなっている。255は須恵器壺の底部破片で外方に「ハ」字状に踏ん張る高台を有する。広口壺か長頸壺かの区別はこの部位からは困難である。256・257は須恵器鉢の口縁部破片である。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部は水平かやや内傾する幅の広い端面を有する。258～266は須恵器杯Aである。258～265は平坦な底部から底端部が緩く屈曲して体部が外傾して開く。口径に比べ器高が低く浅い形態である。底端部の屈曲が緩く境界が不明瞭なもの(258～261)と、底端部の屈曲が強く体部と底部の境界が明瞭なもの(262～265)がある。法量については前者では258が口径13.1cm、器高3.7cm、後者の262が口径10.6cm、器高3.2cm、264が口径11.6cm、器高3.1cmを測る。266は同じ須恵器杯Aだが、口径に比べ底部径が小さく、体部が斜外方に大きく開く形態を有す。口径12.6cm、器高3.7cmの法量を有す。267土師器杯Aの底部破片で、外底面に回転糸切り痕が残る。268・269は赤彩土師器杯Aの底部破片である。このうち269の底部外面に回転糸切り痕が残る。270も赤彩土師器である。体部の破片だが、外面に墨書文字がみられる(「大」か?)。271・272は土師器中型甕である。張りのある体部から口縁部が「く」字状に短く開く。口縁端部の形状はいずれも面取りするものである。器面調整では271には内面にカキ目痕が残る他、272では内外面をハケ調整のうえからカキ目を施し、さらに外面下半には縦方向の手持ちヘラ削りを加えている。273・274・276～280は土師器長甕の口縁部破片である。口縁端部が面取りされるもの(273・277)、さらに口縁端部の上端がつまみ上げられるもの(274・278・279)、丸くおさめているもの(280)などがある。体部の内外面にカキ目調整がみられるものが多い。275は土師器小型壺の口縁部破片で、端部の上端を上方につまみ上げている。281は土師器鉢の体部破片で、内外に斜方向のハケ調整が施されている。282・283は土師器鉢の口縁部破片で、282は口縁部に面を持つが、283は口縁端部を大きく厚ませ丸く仕上げている。284は土師器小型甕で上半部を欠失する。体部の内外面はヨコナデされ、平底の底部外面には回転糸切り痕が残る。285は口縁端部に立ち上がり有する古墳時代タイプの須恵器杯である。口径11.6cm、器高2.8cmの法量を有する。型式特徴および法量から飛鳥Ⅱ期の時期に相当するものと考えられる。7世紀前半～中葉頃の年代観が与えられる。本調査地では最も古い時期に遇上する須恵器となる。

**第3調査区出土遺物**(図版22 286～図版23 322): 286～295は須恵器蓋である。219～224は、比較的低下な天井部から口縁部が浅く開く形態である。このうち286・287は口縁端部は下方につまみ出すようにして作出されるため、断面が三角形ないしは喙状を呈している。288は口縁端部を面取りする。289は天井部の高まりがほとんど無い平坦なもので、端部の折り返しもほとんどみられない。内面の隅に小さく「X」と墨書されている。290～292も比較的低下な天井部から口縁部が浅く開く形態であるが、口縁端部は短く下方に直角に折り返している。290については天井部中央に扁平な宝珠状つまみがつく。口径16.4cm、器高3.3cmの法量を測る。293は平坦な天井部から口縁端部にかけて軽く「S」字状を描くように屈曲する。294・295は天井部の破片である。296～301は須恵器杯Aである。296～298は平坦な底部から底端部が緩く屈曲して体部が外傾して開く。口径に比べ器高が低く浅い形態である。296は口径13.7cm、器高3.7cm、298は口径11.6cm、器高3.4cmを測る。299～301は平坦な底部から底端部が強

く屈曲し体部が外傾気味に直線的に立ち上がる。300では口径12.2cm、器高4cmの法量を測る。302～309は須恵器杯Bである。302は外方に「ハ」字状に踏ん張る高台を有する。口径に比べ器高があり、体部が底端部で強く屈曲し、外傾気味に立ち上がる形態である。口径11.4cm、器高4cmを測る。303も同形態だが角状形態の高台が底端部内側に貼り付けされる。口径10cm、器高3.6cmの法量を有する。304～308は平坦な底部から底端部が緩く屈曲して体部が外傾して開く。口径に比べ器高が低く浅い形態である。高台の形状は基本的に外方に「ハ」字状に踏ん張るものだが、かなり扁平となっているものが多くみられる。器形の全容が知れる事例では口径14cm台、器高4cm前後の法量である。309については内底面に「×」字状のヘラ記号を刻んでいる。310は須恵器甕の口縁部破片で、口縁端部に広い面を有し、断面が三角状を呈している。311は横瓶の体部破片で、内面に当具痕が残る。外面に縦方向のカキ目が見られ横瓶の体部破片であることがわかる。312・313は土師器小型甕の口縁部で、口縁端面の下端を強くするため、「S」字に似た断面形状を呈する。314・317～319は土師器長甕である。いずれも口縁端部に面を有するが、上端をつまみ上げるもの(314)や下端を側方につまみ出すもの(319)などもみられる。体部調整については317・318の場合、体部外面上半および内面には縦方向のハケ調整の上からカキ目を施し、体部下半についてはさらに縦方向の手持ちヘラ削りを加える。315・316は土師器取っ手付き鉢である。とくに316は取っ手部分が細長いことから、封取っ手ではなく片取っ手と考え作図した。体部外面および取っ手部分にもハケ調整が施されている。320は土師器の鉢、321は土師器甕と考えられる形態であるが、ともにハケ調整の単位や施し方や胎土などが共通している。このうち320は斜外方に直線的にのびる体部から口縁部が水平方向に短く屈曲するもので、端部は細く仕上げる。321は口縁部を欠失するが、体部が緩やかに内湾しており、平底の甕として復元図化した。ハケは両例とも共通している。まずハケの目の単位がきわめて荒く一見ヘラ磨きと見まがうほど目幅があり深い。これを手持ちで体部外面は縦方向に、内面は横方向に手持ちで施している。基本的に回転台を使用しない成形・調整手法であると考えられよう。このような土師器甕(鉢)の出土事例は本調査地でも少ない。322は土師器鉢の口縁部破片で口縁端部に面を有する。体部外面にカキ目が観察される。

**第4調査区出土遺物** (図版23 323～335・551・図版24 336～図版25 410) : 323～339・551は須恵器蓋である。323・324は口縁部内面にカエリを有する蓋である。天井部外面は回転ヘラ削りが施される。天井部には宝珠状つまみを付ける。法量は小振りで323では口径10.8cm台、器高2.1cmを測る。両例とも7世紀代に遡る時期の製品と考えられる。325～339・551は丸みを帯びた天井部から口縁部が浅く開く形態である。端部の形状には下方に短くつまみ出すもの(325～331・333・334・337～339)、内側に巻き込むように折り曲げるもの(332・335・551)がある。天井部に扁平な宝珠状のつまみを有する。335については体部外面に墨痕が残る。転用視の可能性もある。551は墨書土器で、口縁部外面に「=」字状の記号風の墨書を施す。340から350は須恵器杯Aである。340～345は平坦な底部から底端部が緩く屈曲して体部が外傾して開く。口径に比べ器高が低く浅い形態である。また底端部の稜線もそれほど鋭くない。口径12～13cm台、器高2.5～3.5cm前後の法量を有する。これに比べ346～350は平坦な底部から外底面に稜を有しながら体部が外傾して大きく開く。口径に比べ器高もあり深い形態である。口径12～13cm台、器高3.2～3.5cm前後の法量を有する。346は墨書土器で、底部外面に「=」字状の記号風の墨書を施す。350も墨書土器で、底部外面に二カ所に「十」字状の墨書を施す。また、底部内面中央には、今度はヘラ記号状に「十」の字を刻んである。351～358・360～369は須恵器杯Bである。351～356は口径に比べ器高が低く体部が浅い角度で外傾し、外方に「ハ」字状に踏ん張る高台を有するものである。器形の全容のわかる351では復元口径13.3cm、器高3.7cm、352では口径14cm、器高4.4cmの法量

を有する。357・358・360～369は平坦な底部から体部が強く屈曲して外傾して大きく開く。口径に比べ器高もあり深い形態である。法量には口径10.5cm、器高3.7cmのやや小振りなもの(357)と、口径14～16cm、器高5～6cmの大振りの法量を有するもの(361・362)と、大きく二種類がみられる。高台は基本的に角状のものが多く、外方へ「ハ」字状に踏ん張るものは少ない。底部の切り離しは大半がヘラ切りであるが、365のみ底部外面に回転糸切り痕が残る。また墨書土器が2点認められる。363は底部外面に墨書を施しているが、字義は不明である。364も底部外面に「＝」と記号状の墨書を施す。359は須恵器皿Bの底部破片である。高台は高さのある角状を呈する。370・371は土師器皿である。いずれも浅い角度で口縁部が大きく開く形態である。371は底部が残存しており、平底の無高台であることがわかる。底部外面には回転糸切り痕が残る。法量は口径13.6cm、器高2cmと扁平である。372は須恵器壺の口縁部破片である。口縁端部を嘴状に大きく測方に突出させている。373は須恵器壺の口縁部破片である。口縁部は屈曲して大きく外反し、端部は三角状に仕上げる。374は須恵器壺の体部破片である。375は須恵器双耳壺の体部破片である。小振りの体部に似合わず大型の環状の取っ手が二個肩部に付く。平安時代中期に盛行する多耳壺と比べると耳部分の装飾化があまり認められない古手の双耳壺と考えられる。376・377は須恵器壺の底部破片である。「ハ」字状に大きく開く高脚高台を有す。378は黒色土器の体部破片である。内面にランダムな方向のヘラ磨きがみられる。379～385・387～390は土師器杯Aである。平底の底部から体部が内湾しながら開く形態で、口縁端部は丸くおさめる。底端部は鋭い稜線を有するものが多い。底部外面には回転糸切り痕がそのまま残るもの(381・382・384・387～389)と、回転ヘラ削りが加えられていて、切り離し痕跡が残らないもの(380・383・385)がある。法量には大小二種がある。小法量のものには口径12～12.5cm、器高3.8～4.5cm、大法量のものには口径17cm、器高7cm前後の法量を有す。381・387・390は墨書土器である。381は外底面に「西」の文字が墨書される。387も外底面に墨書がみられる。「真」の文字にみえるが下半部が欠失するため確信はない。390は底端部に「＝」記号風の墨書がみられる。386は土師器杯Aに類似した形態の須恵器杯Aである。切り高台風の底部から体部が内湾しながら開く。底端部の稜線は切り立って鋭い。底部は回転ヘラ削り調整される。大振りの法量で口径16.9cm、器高6cmを測る。391～400は土師器小型壺である。391は口縁部が短く逆「ハ」字状に開く形態で、口縁端部は丸くおさめる。体部内面にはハケ調整が施される。392・393は口縁部が浅く開き、口縁内端を内側に巻き込むように丸く仕上げる。394～400は底部の破片である。394は底部外面に回転糸切り痕が残るが、大半は体部下半から底部外面がヘラ削りされ、切り離し痕跡は残されていない。また395は内底面にコテあて痕が残る事例である。401～404は土師器鍋の口縁部破片である。「く」字状に屈曲する口縁部の先端に端面を有するもの(402)、端部を上方向に折り曲げて丸く仕上げるもの(403)、端部を内側に折り返して肥厚させるもの(404)がある。体部の内外面はカキ目調整されるものが多い。405～409は土師器長壺である。405・406は、口縁部を短く逆「ハ」字状に開き端部を丸くおさめる。体部内面は横方向の、外面は縦方向のハケ調整を施す。408・409は口縁端部を内側に肥厚させ丸く仕上げている。体部の内外面にはカキ目調整が残る。410は土師器取っ手付き瓶の口縁部破片と推定される。胴部から口縁部がほぼ直立しており、口縁端部に広い面を有する。体部の内外面は荒いハケ調整がみられる。

**第5調査区出土遺物** (図版25 411) : 第5調査区は第4調査区北端から東側に拡張して小規模調査区であり、出土遺物は少ない。411は土師器小型壺である。球形体部から口縁部が「く」字状に開き、口縁端部は丸くおさめる。体部の内外面は横ナア調整されている。

**第6調査区出土遺物** (図版25 412～418) : 第6調査区も第5調査区同様第4調査区中央付近から東

側に拡張した小規模調査区で、やはり出土遺物は少ない。412は須恵器蓋である。低平な天井部から口縁部が浅く短く開き、口縁端部は丸め気味におさめる。天井部中央に宝珠状つまみを有する。口径12.9cm、器高2.5cmの法量を有する。413は須恵器杯Aである。径の大きな底部から体部が斜外方に直線的にのびる。口径12.6cm、器高3.2cmの法量である。414は須恵器杯Bである。底端部の内側には角状に近いかなり扁平な高台が貼り付けされる。415は須恵器杯の口縁部破片である。416は土師器小型甕の破片で、口縁部は短く内湾している。417は土師器甕ないしは鍋の口縁部破片。418は土師器長甕の口縁部破片で、逆「ハ」字状に開く口縁部の端部は面を有する。

**第7調査区出土遺物**（図版25 419～図版26 452）：第7調査区も第4調査区南端付近から東側に拡張した小規模調査区であるが、堅穴建物が複数棟検出されたことなどもあり、包含層からの出土遺物も多く認められる。419～422は須恵器蓋である。419は天井部から口縁部が緩やかに「S」字状を呈し、天井部中央にボタン状のつまみを有する。420は天井部に高さがなく低平で、口縁端部は端面に近い形状である。421・422は高さのある天井部を有し、口縁端部は下方に短く折り曲げる。421は天井部中央に高さのある宝珠状つまみが付されている。423～425は須恵器杯Aである。径の大きな底部から体部が外傾気味に開く。法量は口径12cm前後、器高3～3.2cmを測る。426～430は須恵器杯Bである。破片ばかりであるが、いずれも口径に比べ器高のある深身の体部を有するタイプである。底部外面には角状高台が貼り付けされる。431は須恵器広口壺の口縁部破片である。浅い角度で外反する口縁部の先端は面取りし、さらに下端を下方に三角につまみ出している。432～441は土師器杯Aである。平坦な底部から体部が内湾しながら開くもので、底端部は鋭く稜線を有するものが多い。底端部および外面をヘラ削り調整するもの（432・434・435・439）と、底部外面に回転糸切り痕がそのまま残るもの（433・437・440・441）がある。434については外面に墨書がみられるが、薄くにじんでおり字義は判読できない。442～449は土師器小型甕である。442～446・449はいずれも口縁端部を内側に折り込むようにして肥厚させるものである。体部の内外面は横ナデ調整される。447・448は「く」字状に開く口縁部を有し、端部は丸くおさめる。452は底部の破片で体部下半は手持ちヘラ削りされる。450・451は土師器長甕で、逆「ハ」字状に開く口縁部の先端は内側に折り込むようにして肥厚させている。

**その他の出土遺物**（図版26 453～図版27 489）：人力掘削の排出土、攪乱土抗その他側溝掘削土などの出土遺物で地点を確認できなかったものをその他に一括した。453～460は須恵器蓋である。453・454はやや大振りの法量のもので、端部を下方に短く折り曲げるもの（453）と丸くおさめるもの（454）がある。455は天井部が平型で高さがなく、口縁端部も端面状に仕上げている。450～458は口径に比べ高さのある天井部から体部が丸みをもって開くタイプで、口縁端部は丸くおさめるものが多い。459・460は天井部のみの破片で、口縁部を欠失する。461～468は須恵器杯Aである。口径11cm、器高3.3～3.4cm前後のもの（461～464・466～468）と、口径12.6～13cm、器高3.4～3.7cmのやや法量の大きなもの（464・465）がある。前者の形態では平坦な底部から体部が緩く屈曲して外傾するもの（461・462）と、底端部の稜線が鋭い463がある。後者では2点とも底端部の屈曲が緩やかで底端部の稜線は明瞭でない。なお465の底部外面には「×」字状のヘラ記号が刻まれている。468は墨書土器である。土師器杯Aに類似した形態で、底部外面に回転糸切り痕を残している。底部外面の中央付近に「○」の記号状の墨書がみられる。471～476は須恵器杯Bである。いずれも底端部の内側に外方に踏ん張る「ハ」字状の高台を貼り付けており、角状のものは認められない。法量は器形の全容のわかる472は口径14.2cm、器高4.4cm、476では口径11.2cm、器高3.8cmを測る。本例では底部外面に「一」字状のヘラ記号が刻まれている。477は内底面に広く自然釉の付着がみられ広口壺の器形と考えられる、底部外面には「ハ」字状に大き

く踏ん張る高脚高台が付く。478・481～483は土師器小型甕である。口縁部の形態には「く」字状に開く481・482、端部をやや内面に肥厚させる478、受け口状に屈曲して上方につまみ上げる483などがある。479は削り出し高台を有する灰軸陶器の底部破片である。近世以降の時期に比定される。480は土師器杯Aの底部破片で、内底面に墨書がみられるが、小破片のため字義は不明である。484は取っ手付き瓶の取っ手部分である。485～488は土師器長甕である。口縁端部は面取りさせるもの(485～487)と、内側に肥厚させるもの(488)がある。体部の内外面の調整は486が内外とも上半は横方向のカキ目、下半は叩き目と当具痕を残す。487は外面上半がカキ目調整し、下半はそのうえから縦方向の手持ちヘラ削りを施す。488は体部外面全体にカキ目痕が残る。489は土師器鍋の口縁部破片である。

## 試掘調査

**試掘調査時出土遺物** (図版27 490～図版28 550) : 試掘調査時に出土した遺物を一括してここに掲載した。記述の便をはかるため、各トレンチ単位ではなく器種単位で一括図示した。490～497は須恵器蓋である。490は天井部の破片で、低平な宝珠状ツマミを有する。491～497は口縁部の破片で、口縁端部を短く下方に折り曲げ細く仕上げるもの(492・495)、やや厚みのある角状に近いもの(491・493・494・496)、端面を丸めるもの(497)がある。498～504は土師器杯Aの口縁部破片である。505～509は須恵器杯Aである。505・506は平底の底部から体部が緩く屈曲し口縁部が斜外方に開くもので、底端部の境界は明瞭でない。これに対し507～509は切り高台風の底部から体部が斜外方へ直線的に開くもので、底端部の稜は鋭い。510～518は須恵器杯の口縁部破片である。杯A・杯Bの明確な区別は現状では難しい。519～522は須恵器杯Bの底部破片である。高台には角高台(519)と、「ハ」字状に外方へ踏ん張るもの(520・521)、さらに高さのあるもの(522)がある。523は須恵器の広口壺ないしは長頸壺の体部破片である。524は須恵器横瓶の体部破片である。525・526は土師器杯の口縁部小破片、527～532は土師器杯Aの底部破片である。このうち527・528の底部外面には回転糸切り痕が残る。533・534は土師器長甕である。いずれも短く開く「く」字状口縁部を有し、端部は軽く面取りしている。535～545・547～550は土師器甕の口縁部破片である。「く」字状に短く外反し口縁端部を丸くおさめるもの(536～539・545)、端部を面取りして端面を作りだすもの(535・540・547・548)、肥厚気味に丸く仕上げるもの(543・544・550)、端面を内側に折り曲げ受け口状を呈するもの(541・542・549)などがある。546は土師器長甕の底部破片で、底部は丸底状を呈している。

## 第4章 理化学的分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### I. 堆積層および遺構の年代

#### 1. 試料

本項目および後述する古植生の検討に供する試料の採取にあたり、調査区内に認められた堆積層のうち、調査区北東の代表的な断面3箇所（図版3 1～3地点）を設定し、層相観察を行った。各地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として図4に示す。

各調査地点の堆積層の累重状況はほぼ類似し、現在の整地・盛土層直下は、上位より淡灰色泥質砂、下に凸な外形をなすシルト～細粒・中粒砂（1地点のみ）、灰色泥質砂、暗灰色泥質砂（2地点のみ）、灰色シルト～細粒砂（1・2地点のみ）、黒～黒灰色泥（土壌構造が発達）、淡暗灰色砂質泥、暗灰色泥質砂、黒～黒褐色泥質砂および黒色砂（土壌構造が発達、2地点は不明瞭）、灰色シルト質砂（2地点は不明瞭）に大きく区分される。ほとんどの層準で樹木ないし草本植物の根痕が確認され、それらの生物擾乱により初生の堆積構造は不明瞭となっている。また、土壌構造が発達する層準を挟在する。なお、発掘調査の結果、下位の灰色シルト質砂層上面が遺構の検出面とされている。

以上の層相から、調査地点は土壌発達する時期を挟在する氾濫原の堆積環境であったことが推定される。また、遺構検出面より下位の堆積層は、遺構壁面などで砂礫層が確認されている。この堆積物は、河床および流路充填堆積物の可能性があるが、地層の外形が不明であるため特定には至らない。

放射性炭素年代測定試料は、上記した遺構確認面より検出されたSP07（J11）およびSP05から出土した柱根と、調査区堆積層下部の黒色砂からなる土壌（3地点；試料番号8）である。

#### 2. 分析方法

柱根試料は、樹種同定試料の採取の際に行った木取観察の結果から、観察範囲内における外側年輪



第4図 1～3地点模式柱状図および試料採取位置

部分より木片を採取し、分析に供する。木片はHClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。一方、土壌試料は、HClによる炭酸塩等酸可溶成分を除去する。試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。放射性炭素年代は、 $\delta^{13}C$ の値を用いて同位体効果の補正を行った値(補正值)と、補正前の値を併記する。

補正年代を用いて、暦年較正を実施する。暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)の北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。その際、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。暦年較正は、CALIB 5.02のマニュアルに従い、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いる。暦年較正結果は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ ( $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲)の値を示す。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線などの改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。表中の相対比(確率分布)とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

### 3. 結果および考察

結果を表1に示す。同位体効果による補正を行った測定結果(補正年代)は、SP07(J11)柱根は1,270±30yrBP、P75柱根は1,460±30yrBP、黒色砂(3地点;試料番号8)は2,060±30yrBPを示した

表1. 暦年較正結果

試料名	増正年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正前) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)						相対比	測定機関Code
J11 SP07 柱根(内丸;木片)	1,270 ± 30	-26.96 ± 0.74	1,272 ± 32	0	cal AD 686	- cal AD 727	cal BP 1,264	- 1,223	0.543	IAAA-S2084	
					cal AD 737	- cal AD 771	cal BP 1,213	- 1,179	0.457		
					cal AD 683	- cal AD 783	cal BP 1,287	- 1,167	0.940		
				2 $\sigma$	cal AD 788	- cal AD 814	cal BP 1,162	- 1,136	0.041		
					cal AD 843	- cal AD 858	cal BP 1,107	- 1,092	0.016		
					cal AD 585	- cal AD 640	cal BP 1,385	- 1,310	1.000		
SP05 柱根(内丸;木片)	1,460 ± 30	-27.55 ± 0.46	1,455 ± 33	0	cal AD 554	- cal AD 650	cal BP 1,396	- 1,300	1.000	IAAA-S2085	
					cal BC 158	- cal BC 135	cal BP 2,108	- 2,085	0.179		
					cal BC 115	- cal BC 40	cal BP 2,065	- 1,990	0.814		
				2 $\sigma$	cal BC 7	- cal BC 5	cal BP 1,957	- 1,955	0.007		
					cal BC 174	- cal AD 5	cal BP 2,124	- 1,945	0.997		
					cal AD 13	- cal AD 16	cal BP 1,937	- 1,934	0.003		
3地点 試料番号8 (黒色砂算上)	2,060 ± 30	-13.48 ± 0.59	2,062 ± 33	0	cal AD 13	- cal AD 16	cal BP 1,937	- 1,934	0.003	IAAA-S2986	
					cal BC 174	- cal AD 5	cal BP 2,124	- 1,945	0.997		
					cal BC 174	- cal AD 5	cal BP 2,124	- 1,945	0.997		
				2 $\sigma$	cal AD 13	- cal AD 16	cal BP 1,937	- 1,934	0.003		
					cal BC 174	- cal AD 5	cal BP 2,124	- 1,945	0.997		
					cal BC 174	- cal AD 5	cal BP 2,124	- 1,945	0.997		

(表1)。また、これらの補正年代に基づく暦年較正結果( $\sigma$ )は、SP07(J11)柱根はcalAD686-calAD771、SP05柱根はcalAD585-calAD640、黒色砂(3地点;試料番号8)はcalBC158-calAD5であった(表1)。各試料より得られた暦年代を参考とすると、SP07(J11)柱根は7世紀後半~8世紀後半、SP05柱根は6世紀後半~7世紀中頃の資料と推定される。また、黒色砂(3地点;試料番号8)は、紀元前2世紀~紀元1世紀頃に相当する暦年代を示したことから、弥生時代頃にはすでに土壌が形成されていたと推定される。

## II. 古植生

### 1. 試料

試料は、調査区北東の1~3地点の堆積層より採取した土壌46点(1地点;試料番号1~30,2地点;試料番号1~4,3地点;試料番号1~12)である。各土壌試料の採取位置を図1に示す。

本分析では、土壌試料46点のうち、黒~黒灰色泥質砂(1地点;試料番号25)、淡暗灰色泥質砂(1地点;試料番号19)、黒~黒灰色泥(2地点;試料番号1)、灰色泥質砂(1地点;試料番号7)の4点を対象に花粉分析、これらの4試料と黒色砂(1地点;試料番号27、2地点;試料番号8)、淡暗灰色泥質砂および黒~黒灰色泥(1地点;18・16・14)、淡灰色泥質砂(1地点;試料番号1)の10点を対象に植物珪酸体分析を行う。

### 2. 分析方法

#### (1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

#### (2) 植物珪酸体分析・灰像分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示し、層的变化を図示する。各分類群の含量は100単位として表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した100単位として表示する。また、100個/g未満は「<100」で表示する。

### 3. 結果

#### (1) 花粉分析

結果を表2に示す。いずれの試料も検出される花粉化石数は少なく、解析に有効な個体数は検出されない。また、わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く、その殆どは花粉外膜の壊れた状態である。

検出された分類群は、木本花粉ではモミ属、マツ属、スギ属が、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科がわずかに認められる。なお、暗灰色泥質砂（1地点；試料番号22）ではヨモギ属の花粉塊が多く認められる。

表2 花粉分析結果

分類群	1地点				
	試料名	7	22	25	1
木本花粉					
モミ属	-	-	-	1	
マツ属	-	1	-	-	
スギ属	2	2	-	-	
草本花粉					
イネ科	-	4	-	1	
ヨモギ属	-	23	-	2	
キク亜科	-	1	-	-	
タンポポ亜科	1	-	-	-	
シダ類孢子					
シダ類孢子	35	39	7	29	
合計					
木本花粉	2	3	0	1	
草本花粉	1	28	0	3	
シダ類孢子	35	39	7	29	
植物	38	70	7	33	

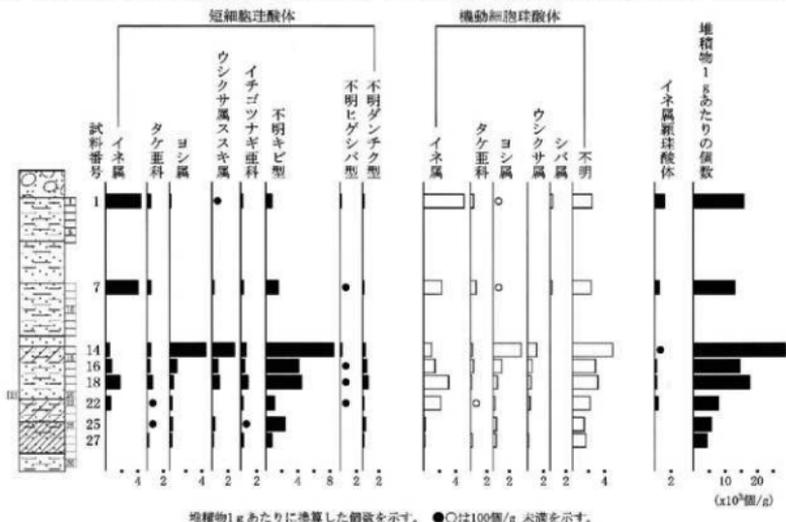
#### (2) 植物珪酸体分析・灰像分析

結果を図5・7、表3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど保存状態は不良である。以下に、地点毎の産状を述べる。

##### 1) 1地点

1地点の植物珪酸体含量は約28,900~4,200個/gと試料間で変化が認められる。黒色砂~暗灰色泥質砂（試料番号27~22）では約7,800~4,200個/gと概して低いが、上方に向かって含量が高くなる傾向が認められる。これより上位の淡暗灰色泥質砂~淡灰色泥質砂（試料番号18~1）では約28,900~13,000個/gと高く、淡暗灰色泥質砂上部の黒色泥（試料番号14）で最も高い値を示す。

植物珪酸体は、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ属、イチゴツナギ亜科、シバ属などが検出される。栽培植物のイネ属は、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、籾殻に形成される顆粒珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は、約4,400~500個/g、機



第5図 1地点の植物珪酸体含量

分析群	1地点								3地点	
	1	7	14	16	19	22	25	27	1	8
イネ科葉部植物珪酸体										
イネ属	4,400	4,000	500	700	1,800	600	-	-	800	-
タケ亜科	400	500	500	400	700	<100	<100	200	400	<100
ヨシ属	100	-	4,500	900	400	300	400	200	2,500	900
ウシクサ属ススキ属	<100	200	2,800	700	900	-	400	100	900	200
イチゴツナギ亜科	300	300	700	500	900	300	<100	300	900	100
不明キビ目	800	1,500	8,500	4,100	4,500	1,100	2,100	700	4,000	1,300
不明ヒゲシハ型	100	<100	200	<100	<100	<100	-	-	300	100
不明ダンクモ	200	100	300	500	700	100	400	100	1,200	<100
フナギ属植物珪酸体										
イネ属	5,100	2,300	1,000	1,500	3,100	2,100	200	100	1,000	<100
タケ亜科	400	700	200	400	100	<100	-	200	300	100
ヨシ属	<100	<100	3,500	1,100	500	200	400	400	2,200	900
ウシクサ属	-	-	1,200	600	400	300	-	100	800	200
シバ属	300	200	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	2,500	2,300	5,000	2,900	3,200	2,200	1,500	1,700	4,300	1,900
雑草類珪酸体										
イネ属珪酸体	1,200	600	<100	200	200	400	-	-	<100	-
合 計										
イネ科葉部植物珪酸体	6,300	6,800	17,900	7,900	9,500	2,500	3,600	1,700	11,100	2,700
イネ科葉部植物珪酸体	8,300	5,600	10,900	6,400	7,400	4,900	2,100	2,500	8,500	3,200
珪酸体珪酸片	1,200	600	100	200	200	400	0	0	100	0
珪 酸 片	15,900	13,000	28,900	14,500	17,600	7,800	5,700	4,200	19,700	5,900

動細胞珪酸体は約5,100~100個/g、顆粒酸体は約1,200~100個/g未満であり、淡褐色灰色泥質砂（試料番号18）および淡灰色泥質砂で含量が高い。また、黒色砂（試料番号27）および黒灰色泥質砂（試料番号25）は、イネ属の機動細胞珪酸体を検出されるが含量は極めて低い。

この他の分類群は、ヨシ属およびススキ属を含むウシクサ属が黒色砂～黒および黒灰色泥（試料番号27～14）にかけて含量が高くなる傾向にあり、これより上位試料では極めて低い。また、シバ属は、黒～黒灰色泥より上位試料（試料番号7,1）でのみ検出される。

## 2) 2地点

1地点の黒～黒灰泥（試料番号14）に対比される試料番号1の植物珪酸体含量は約19,700個/gである。1地点の黒色泥と比較すると含量は低いが、今回の分析試料中では高い値である。植物珪酸体は、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ属、イチゴツナギ亜科などが検出され、1地点の黒～黒灰色泥および下位試料と同様の組成を示す。イネ属は、葉部や穎の珪酸体を検出され、短細胞珪酸体は約800個/g、機動細胞珪酸体は約1,000個/g、顆粒酸体が100個/g未満である。この他の分類群では、ヨシ属の含量が高い。

## 3) 3地点

1地点の黒色砂（試料番号27）に対比される試料番号8の植物珪酸体含量は約5,900個/gであり、1地点と同様に含量が低い。植物珪酸体は、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ属、イチゴツナギ亜科などが検出されるが、いずれも含量は低い。

## 4. 考察

### (1) 古植生

黒色砂および黒～黒灰色泥における植物珪酸体群集は、タケ亜科やヨシ属、ススキ属およびウシクサ属、イチゴツナギ亜科などが認められた。このことから、弥生時代～古代頃は、これらのイネ科植物が生育したと考えられる。また、これらの堆積物ではヨシ属が増加することから、ヨシ属が生育する湿潤な環境へと変化した可能性がある。これらの試料における花粉化石は、いずれの試料も産出が少なかったことから、詳細な検討には至らなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常

に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。また、検出された分類群は、比較的分解に強い花粉や、分解が進んでも同定可能な花粉であったことから、その多くは経年変化により分解・消失したと推定される。わずかに検出された花粉化石には、イネ科やヨモギ属などの人里植物とされる分類群が認められたことから、周辺にこれらの草本類が生育したと推定される。

これより上位の灰色～淡灰色泥質砂では、タケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科、シバ属などが検出された。このことから、古代以降も基本的には同様のイネ科植物が生育したと推定される。

上新保遺跡では、今回の調査区の南側で実施された発掘調査に伴って植物珪酸体分析が行われている(株式会社古環境研究所,2000)。その結果によれば、ヨシ属の含量が高くなる層準や上位試料でシバ属が検出されるという特徴が認められる。分析対象とした堆積物の詳細な対比は困難であるが、今回の分析結果は概ね同様の変化を示していると考えられる。

## (2) イネ属の消長

1～3地点の各土壌試料を対象とした植物珪酸体分析の結果、栽培植物のイネ属が検出された。イネ属の植物珪酸体は、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、籾殻に形成される穎珪酸体が確認された。イネ属は、黒色砂および上位の堆積物に相当する各試料より検出されたが、黒色砂および上位の暗灰色泥質砂では、機動細胞珪酸体が約200～100個/g未満と含量は極めて低かった。これより上位の暗灰色泥質砂～黒色および黒灰色泥では、短細胞珪酸体は約1,800～500個/g、機動細胞珪酸体は約3,100～1,000個/gであり、穎珪酸体も認められた。さらに上位の灰色泥質砂(1地点;試料番号7)では短細胞珪酸体は約4,000個/g、機動細胞珪酸体は約2,300個/g、淡灰色泥質砂(1地点;試料番号1)では短細胞珪酸体は約4,400個/g、機動細胞珪酸体は約5,100個/gであり、2試料からは穎珪酸体も検出された。

水出跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山,2000)。これを基準とすると、淡灰色泥混質砂(1地点;試料番号1)では稲作が行われていたと考えられる。灰色泥質砂(1地点;試料番号7)や淡暗灰色泥質砂・暗灰色泥質砂(1地点;試料番号18,22)なども、今回の分析試料中では比較的含量が高く、層位的変化においてもピークを示す。これらの産状を考慮すると、これらの土層においても稲作が行われていた、あるいはイネの植物体を利用していた可能性がある。

## Ⅲ. 植物資源利用

### 1. 試料

試料は、古代の竪穴建物(SI11, SI12)の焼土より採取した土壌と、炭化材が多量出土した土坑(SK15)より採取した炭化材(試料No.1～5)および炭化物混じり土壌、さらに、上記した放射性炭素年代測定試料に供した柱根2点(J11 SP07, SP05)である。このうち、SI11試料は微細な炭化物が混じる暗オリーブ灰色を呈する泥質砂、SI12試料は炭化物が混じる暗灰色泥混質砂、SK15の土壌試料は炭化材の細片が混じる黒色泥である。

これらの試料のうち、土壌試料(SI11, SI12, SK15)を対象に灰像分析および微細物分析、土坑(SK15)出土炭化材5点と柱根2点を対象に樹種同定を行う。

## 2. 分析方法

### (1) 灰像分析

堅穴建物の焼土および土坑埋積物試料では、燃焼物の痕跡、特にイネ科草本類の痕跡を検討するため、試料中に含まれる珪化組織片（灰像）や植物珪酸体の産状に注目する。分析対象とされた3試料では、灰等は明瞭に観察されなかったことから、前述した植物珪酸体分析に準じて処理（2-（2）を参照）を行い、その濃集と分離を試みる。

結果は、単体の植物珪酸体の産状（含量）および珪化組織片の産状を表に示す。また、植物珪酸体含量は、堆積物における産状との比較・検討のため、図示する。

### (2) 微細物分析

試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の篩内の試料を粒徑別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材などの微細遺物を抽出する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）などとの対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。炭化材の微細片や分析残渣などは、48時間70℃乾燥後の重量（附着する土の重量を含む）を表示する。炭化材は最大径を記録した後、5点を対象に樹種同定を行う。分析後は、抽出物を種類毎に容器に入れて保管する。種実は70%程度のエタノール溶液で液浸する。

### (3) 樹種同定

柱根試料は、木取りの観察した後、観察範囲内の最外年輪より採取した年代測定試料より同定用試料を分割する。剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレバラートを作製する。作製したプレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。一方、炭化材試料は、自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。

各試料の観察で確認された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

## 3. 結果

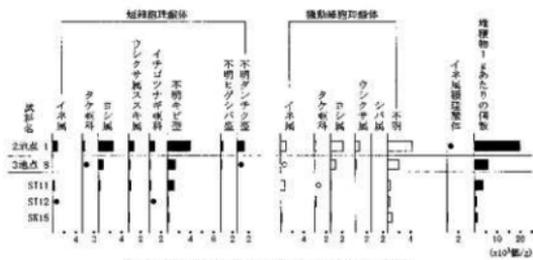
### (1) 植物珪酸体分析・灰像分析

結果を表4,第6図に示す。各遺構の植物珪酸体含量は、SI11は約3,700個/g、SI12は約900個/g、SK15は約1,500個/gである。SP07では、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。SI12では、イネ属やタケ亜科などがわずかに認められる。SK15では、イネ属やヨシ属、ススキ属などが認められる。

表4. 植物珪酸体含量および灰像分析結果 (個/g)

	SI11	SI12	SK15
分類群	幾十	幾十	
イネ科葉節節間部珪酸体			
イネ属	300	<100	-
タケ亜科	-	-	-
ヨシ属	300	-	-
ウシクサ属ススキ属	300	-	100
イチゴツナギ亜科	200	<100	-
不明キビ型	1,200	100	300
不明ヒゲシハ型	-	-	-
不明ランチウ型	-	-	-
イネ科葉身節間部珪酸体			
イネ属	700	-	100
タケ亜科	<100	300	-
ヨシ属	100	-	100
ウシクサ属	-	-	-
シハ属	-	-	-
不明	500	300	800
珪化植体片			
イネ科珪酸体	-	-	100
合計			
イネ科葉節節間部珪酸体	2,300	300	400
イネ科葉身節間部珪酸体	1,400	600	1,000
珪化植体片	0	0	100
総計	3,700	900	1,500
珪像片			
イネ属珪酸体	-	-	+
イネ属珪酸体	+	+	-
イネ属節間部珪酸体	-	+	-
ススキ属節間部珪酸体	+	+	-

<十個>→多い、+抽出、-非抽出



第6図 2・3地点および各遺構の植物珪酸体含量

また、3試料の組織片の産状は、SI11はイネ属の短細胞列や機動細胞列、スキ属の短細胞列が検出され、イネ属の短細胞列の産出が目立つ。SI12は、イネ属の機動細胞列やスキ属の短細胞列が検出される。SK15からは、イネ属の穎珪酸体が僅かに検出される。

## (2) 微細物分析

結果を表5に示す。竪穴建物 (SI11, SI12) の焼土からは、炭化材が検出されたが、種実遺体は検出されない。土坑 (SK15) 試料からは、栽培種のイネの炭化胚乳4個、炭化穎63個、草本のイネ科の炭化胚乳9個、アカザ科の種子6個、および炭化材が検出された。検出された種実のうち、アカザ科は保存状態が良好で、炭化は認められない。アカザ科は、この他に検出された多くの炭化植物と保存状態が異なることから、混入の可能性が高い。このことから、本報告では結果記載にとどめている。以下に、検出された種実の形態的特徴等を記す。

### ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎の破片が検出された。炭化しており黒色。やや偏平な長楕円体。胚乳は、長さ4.0-5.5mm、幅2.5-3.5mm、厚さ1.0-1.5mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の縦隆条が配列する。穎附着個体が確認される。穎は、完形ならば長さ6.0-7.5mm、幅3.0-4.0mm、厚さ2.0mm程度。破片は最大2.7mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲粒を構成する。穎は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

### ・イネ科 (Gramineae)

胚乳が検出された。炭化しており黒色、長さ1.3mm、幅1.2mm、厚さ0.5mm程度のやや偏平な球体や、長さ1.3mm、幅0.7mm、厚さ0.5mm程度のやや偏平な長楕円体など、形態の異なる複数種を一括している。背面は丸みがあり、基部正中線上に胚の痕跡があり、丸く窪む。腹面は平ら。表面は粗面。

表5. 微細物分析結果

分類群	部位	状態	SI11		SI12	SK15
			焼土	焼土	焼土	
草本						
イネ	胚乳	炭化	完形	-	-	2
	穎(基柄)	炭化	破片	-	-	2
		炭化	破片	-	-	46
イネ科	胚乳	炭化	完形	-	-	9
	アカザ科	種子	完形	-	-	2
炭化材	破片	炭化	完形	-	-	4
		炭化	破片	-	-	2
	最大径(mm)	炭化	完形	0.94	0.61	14.23
		炭化	破片	12	15	27
分析量(g)	炭化	完形	200	200	200	
	炭化	破片	363.58	385.64	272.25	
	炭化	破片	6.12	16.59	7.85	

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子が検出された。黒色、径1.2mm程度のやや扁平な円盤状。基部は凹み、鱗がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様放射状に配列し、光沢がある。

(3) 樹種同定

結果を表6に示す。柱根および堅穴建物の焼土、土坑出土炭化材、同埋積物から検出された炭化材は、針葉樹2分類群(スギ・ヒノキ科)と広葉樹4分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ・ケヤキ・サクラ属)に同定された。SK15の微細物分析で検出された炭化材には、樹皮(2点)も認められた。以下に、各分類群の解剖学的特徴などを記す。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

試料は小片であり、年輪界で割れている。軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん厚角が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高。放射

表6. 樹種同定結果

Gr	遺構名	試料名	状態	木取	点数	樹種	備考
	SI11焼土	—	炭化材	—	5	サクラ属(5)	微細物分析検出試料
	SI12焼土	—	炭化材	—	5	ケヤキ(5)	微細物分析検出試料
SK15	—	CW1	炭化材	—	1	クリ	
		CW2	炭化材	—	1	クリ	
		CW3	炭化材	—	1	ケヤキ	
		CW4	炭化材	—	1	クリ	
		CW5	炭化材	—	1	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
	—	炭化材	—	10	ヒノキ科(1) コナラ属コナラ亜属クヌギ節(4) クリ(2) ケヤキ(1) 樹皮(2)	微細物分析検出試料	
J11	SP07	柱根	生材	分割材	1	スギ	
	SP05	柱根	生材	分割材	1	スギ	

組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

#### ・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-6個が複合、年輪界に向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、環孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

#### 4. 考察

柱根試料2点は、残存部の観察では分割材と推定され、いずれも針葉樹のスギであった。スギの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工は容易とされる。富山市および周辺地域における古代の柱材を対象とした分析調査では、水橋渡町・辻ヶ堂遺跡の木柱にスギ(長谷川,2005)、黒河中老田遺跡(射水市)の柱根にクリ(元興寺文化財研究所,2004)、東木津遺跡(高岡市)の柱根にモクレン属(パリオ・サーヴェイ株式会社,2003)が確認されている。柱根の木材利用の傾向は、本遺跡周辺では調査事例が少なく不明であるが、今回の分析結果からスギ材の利用が指摘される。

燃料材と推定される炭化材からは、針葉樹のヒノキ科、広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節、クリ、ケヤキ、サクラ属と樹皮が確認された(表7)。焼土試料は、単一の種類で構成される傾向にあるため、同一個体に由来する炭化材が細片化した可能性があるが、少なくとも2種類の木材が燃料材として利用されていたことが明らかとなった。土坑(SK15)では、底面より出土した棒状を呈する比較的大きな炭化材(CW1~5)は広葉樹の3分類群(クヌギ節、クリ、ケヤキ)、微細物分析で検出された炭化材は、針葉樹のヒノキ科、広葉樹の3分類群(クヌギ節、クリ、ケヤキ)と樹皮が確認された。このことから、本遺構では、少なくとも4種類の木材の利用が窺える。

クヌギ節やクリ、ケヤキは、二次林や河畔林を構成する落葉広葉樹であり、その木材は比較的硬重であり強度が高い。サクラ属もクヌギ節等と共に二次林や河畔林を構成する種類である。このことから、遺跡周辺の河川沿いの河畔等に生育した樹木を利用したと考えられる。一方、ヒノキ科は、本地域では丘陵や山地の尾根上に生育する種類が多く、後背山地等からもたらされた可能性がある。

また、これらの遺構における植物珪酸体および微細物分析の結果、堅穴建物の焼土ではイネ属やスキ属の葉部に由来する組織片(灰像)、土坑埋積物試料からはイネ属の穎に由来する組織片(灰像)や炭化したイネの胚乳や穎が検出された。したがって、燃料材として稲藁やイネの籾殻、スキなどの利用が考えられる。なお、イネ科草本類は、燃焼しやすく、一時的な火力はあるが、燃焼時間が短いことから焚き付け材として利用されたと考えられる。イネの胚乳は、明瞭に形状を留めており、穎

表7. 遺構別種類構成

分類群	部位	状態	SP07	SP05	SI11	SI12	SK15
			柱根	柱根	焼土	焼土	
<b>木本</b>							
スギ	材	炭化	1	1	-	-	
ヒノキ	材	炭化	-	-	-	-	1
コナラ属コナラ亜属クヌギ節	材	炭化	-	-	-	-	5
クリ	材	炭化	-	-	-	-	5
ケヤキ	材	炭化	-	-	-	5	2
サクラ属	材	炭化	-	-	5	-	-
樹皮		炭化	-	-	-	-	2
<b>草本</b>							
イネ	胚乳	炭化	-	-	-	-	2
		炭化	-	-	-	-	2
		炭化	-	-	-	-	46
穎(草部)	炭化	-	-	-	-	17	
	炭化	-	-	-	-	9	
イネ科	胚乳	炭化	-	-	-	-	9

\*炭化したアカザ科の種下は除外。

付着個体も認められた。胚乳は可食部であることから初設等に混入した初の可能性がある。

本遺跡では、過去にも土坑や堅穴建物内の堆積物や炭化材を対象として燃料材の検討が行われている。この分析調査結果では、コナラ節やブナ属の炭化材、イネ属およびススキ属の葉部の珪化組織片が確認されている（バリノ・サーヴェイ株式会社,2008aMS）。これらの分析結果を考慮すると、周辺や後背の山地や丘陵に生育する樹木や、周辺に人里植物として成育したと考えられるススキやイネの可食部以外の部位が利用されたと推定される。

#### IV. 堅穴建物の床面構成堆積物の微細構造観察

##### 1. 試料

試料は、堅穴建物床面のうち硬化面として検出された箇所より採取した不攪乱柱状試料（床面～深さ約30cm程度）である。本分析では、古代の堅穴建物の床面の構造に関する情報を得ることを目的としたことから、軟X線写真撮影観察を行う。調査試料の肉眼による層相観察結果は、軟X線写真の記載と合わせて結果で述べる。

##### 2. 分析方法

不攪乱柱状試料について、幅7cm、長さ30cm、厚さ1cmの板状に成形し、湿潤状態のまま、管電圧50kvp、電流3mA、照射時間270秒のX線強度条件において軟X線写真撮影を実施した。X線写真の記載は、堆積物については宮田ほか（1990）、土壌については佐藤（1990a・b）・森ほか（1992）・成岡（1993）などを参考とする。

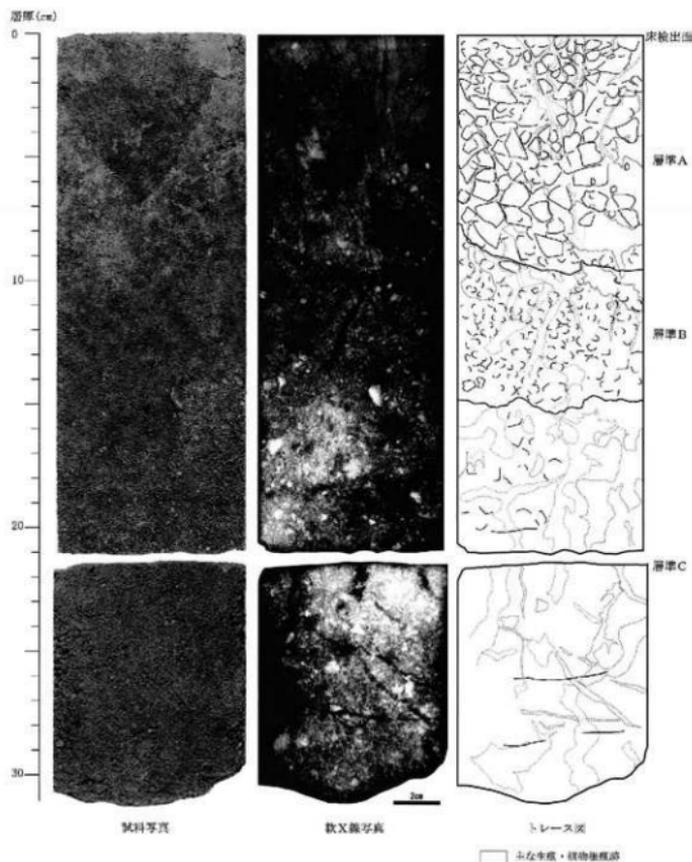
##### 3. 結果

試料および軟X線写真および主な構造のトレースを第7図に示す。軟X線写真の明るい部分はより高い密度の物質（ここではおもにシルトと砂・礫、酸化鉄や炭酸鉄）からなり、暗い部分は低密度の物質（水分の多い粘土、細粒のシルト、植物性の炭片、植物遺体、孔隙など）からなる。試料最上部の床検出面より下位堆積物は、層相変化から3層準に区分される。ここでは便宜的に上位より層準A・B・Cとする。以下に試料および軟X線写真観察結果について述べる。

層準A：褐灰色泥質砂ないし腐植質砂質泥（土壌）の偽礫からなる。偽礫は、亜角状をなすものが主体をなす。大きさは不揃いで長軸で1cmから2cmのものからなり、不規則に配置する。床検出面付近では偽礫の大きさが小さくなり、長軸方向が水平方向を向くものが目立つ。また、各偽礫は褐灰色砂質泥からなる偽礫は塊状構造をなすものが多いのに対して、腐植質泥の偽礫は著しく擾乱された間隙密度の高い土壌構造を呈している。軟X線写真でも偽礫の性状の違いによる色調の違いが確認される。また、本層準は、上位層準から連続する1～2cm程度の垂直方向に伸びる根系などの生物擾乱の影響を受けている。以上の層相から、層準Aは人為的に攪拌された堆積物と判断される。

層準B：やや腐植に富む暗褐灰色を呈する泥質砂からなる。1mm以下の微細な根系、上位から連続する1～2cm前後の植物根など間隙が発達している。これらの生物擾乱により著しく乱れており、間隙に画された大きさの比較的揃った、亜角～亜円状を呈する集合体が確認される。上位の層準Aとの層界は凹凸が著しい。以上の層相から、本層準は氾濫堆積物を母材とする土壌化層準と推定される。本層準最上部は、層準A形成期の人為的攪拌の影響を受けている。

層準C：褐灰色を呈する、塊状をなす泥・細礫混じり細粒～中粒砂からなる。また、上位層準から



第7図 堆積物の試料・軟X線写真および主な構造のトレース図

連続する垂直方向に伸びる幅1~10mmの植物根痕が多数確認される。軟X線写真では密度が高く、均質な状況が確認される。本層準も生物擾乱の影響により初成の堆積構造が不明瞭となっているが、層準Bほどではなく、下部層準では不明瞭ながら水平方向の不連続な葉理構造が確認される。以上の層相から、本層準は調査区が位置する氾濫原堆積物であることが推定される。

#### 4. 考察

上述してきた試料の肉眼観察および軟X線写真観察結果から、堅穴建物の床面（検出面）より下位約10cm程度（層準A）が人為的に攪拌されている堆積物からなることが窺える。本層準を構成する偽礫は、氾濫堆積物と氾濫堆積後の土壌発達層準に由来するものからなること、本層準と下位層準の層

界は凹凸が著しいこと、さらに偽礫の大きさが最上部で小さくなり、水平方向に扁平なものが日立つことから、本層準は建物の堅穴を掘削時の加工期に形成された堆積物で、掘削時の凹凸を土壌などを利用して整地していることが推定される。

この人為的攪乱層準の下位堆積物は、層相・軟X線写真から、氾濫堆積物を母材とする土壌（層準B）と氾濫堆積物（層準C）からなることが推定される。このうち、層準Bの土壌層は、調査区内の氾濫原堆積物中に挟する最下位の放射性炭素年代測定値から弥生時代頃と推定される土壌層に対比される可能性がある。今回の調査では堅穴建物の構築層準について十分な検討を行っていないが、調査区の堆積層の累重状況を踏まえると、弥生時代頃の土壌層を覆う氾濫堆積物形成後、安定した地表環境に変化し、継続的な土壌発達が進化した時期に構築された可能性が高い。

## V. 鉄滓の金属学的調査

### 1. 試料

試料は、古代～平安時代の堅穴建物（SI29）から出土した鉄滓1点（D13× SI29 X30Y120）である。

### 2. 分析方法

#### (1) 外観観察

試料の外観上の特徴を、肉眼およびデジタルカメラにて観察・記録する。

デジタルカメラ；Finepix F401型（富士写真フィルム工業製）

#### (2) 断面マクロ・ミクロ組織観察

代表的な箇所をダイヤモンドカッターにて切り取り、洗浄・乾燥後、樹脂埋め込みして組織を固定する。その後、鏡面になるまで研磨して断面組織を現出し、金属顕微鏡にて観察・記録する。

金属顕微鏡；BX51M型（オリンパス光学工業製）

#### (3) 成分分析

組織観察用試料を用いて、代表的な鉱物相の定性分析をX線マイクロアナライザー（EPMA）にて行う。

X線マイクロアナライザー（EPMA）；JXA8100型（日本電子製）

## 4. 結果および考察

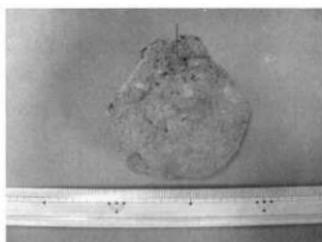
### (1) 外観および断面組織観察結果

第8図に鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織を示す。鉄滓は、茶黄色で楕円形状を呈し、大きさは90×90×40mm、重さ368grを測り、周囲には焼土が固着している。

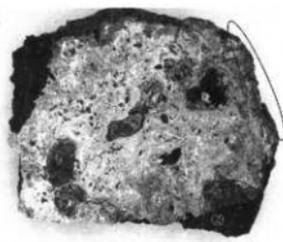
内部の組織は殆どが鉄錆で構成されているが、塊周囲にはウスタイト（FeO）を主体とする鉄滓組成の領域が一部に存在する。鉄錆領域は、元は熔融あるいは半熔融した鉄が開閉の異物（粘土等）を巻き込みながら固化し、その後錆化した様相を示す。一方、鉄滓領域は、一部のウスタイト（FeO）には風化している様子がみられ、この鉄滓が長い年月にわたって地中に存在したことが窺える。

### (2) 鉱物相の定性分析結果

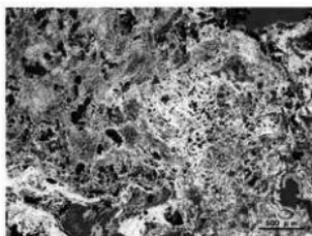
第9図に鉄滓組成領域の代表的な箇所の鉱物相分析結果を示す。また、主要検出元素（酸化物に換算した結果）の一覧を表8に示す。全体的には鉄分の高い鉄滓である。明灰色の丸みを帯びた結晶がウスタイト（FeO）で、若干のアルミ（Al）・マグネシウム（Mg）・チタン（Ti）分を含む。また、



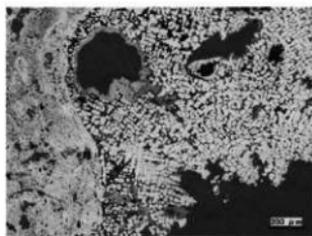
1. 外観(赤線枠内:東京試料採取場所)



2. 断面マクロ組織(赤線内:鉄滓領域、鉄線領域)



3. 鉄線領域の断面ミクロ組織(写真2-①)

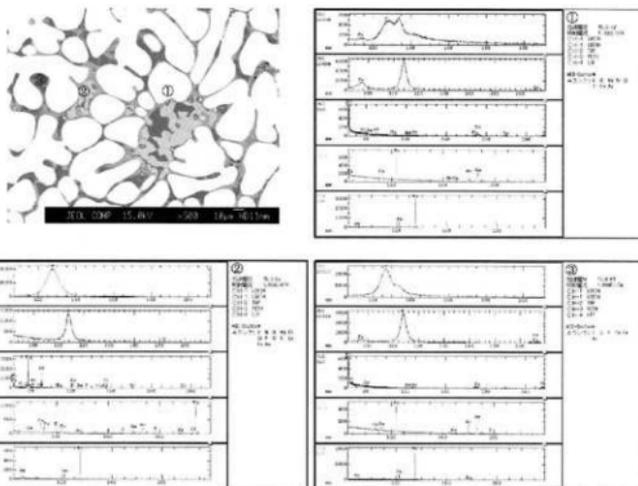


4. 鉄滓領域の断面ミクロ組織(写真2-②)

第8図 鉄滓の外観と断面組織

マトリックス中の灰色結晶はウスタイト ( $\text{FeO}$ ) で、若干の燐 (P) やカルシウム (Ca) を含むものであった。恐らく、鉄錆の一部と考えられる。一方、マトリックス中の黒色領域は非晶質珪酸塩である。周囲の粘土成分と鉄分との反応生成物とみられる。

以上の断面組織観察および鉱物相の成分分析結果から、今回の分析試料に供された鉄滓は、溶融あるいは半溶融した鉄が周囲の粘土等を巻き込んで固化し、錆化したものと判断される。また、今回の分析結果は、北押川B遺跡や御坊山遺跡(富山市)で出土した碗型鉄滓を対象とした分析調査結果(表9, パリノ・サーヴェイ株式会社, 2008:2008bMS) と基本的には同類の組成を有するものと言える。本遺跡では鉄滓などの遺物の出土が少ないことや、精錬や鍛冶に関わる炉や燃料材(木炭)を得るための炭窯などは検出されていないが、今回の分析結果は鍛冶操作が行われていた可能性を示す資料と言える。



第9図 植物相の定性分析結果 (EPMA)

表8. 鉄沼中の鉱物相定性分析結果(単位:重量%)

分析箇所	鉱物相*	FeO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	TiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	SO <sub>3</sub>
①	W	98.3	0.38	0.78	-	0.38	0.19	-	-	-
	r	98.6	-	-	0.31	-	-	1.05	-	-
②	W	30.6	39.4	22.4	1.77	0.48	-	2.75	1.28	1.32
	S	21.0	41.0	18.0	8.16	-	0.46	3.65	5.79	-
北押川③遺跡 SK270	W	94.8	-	1.54	-	-	3.06	-	-	-
	F	84.9	31.6	0.58	0.34	1.56	0.37	0.93	-	-
柳屋鉄塚	W	21.0	41.0	18.0	8.16	-	0.46	3.65	5.79	-
	S	21.0	41.0	18.0	8.16	-	0.46	3.65	5.79	-
新井山遺跡	W	92.5	-	1.47	-	0.91	5.12	-	-	-
	F	58.3	32.4	-	1.98	6.77	0.56	-	-	-
河区 自然史路 №2264	W	9.11	31.0	12.1	27.7	-	0.49	15.8	2.54	-
	S	9.11	31.0	12.1	27.7	-	0.49	15.8	2.54	-

W:フラスタイト(FeO), r:鉄燐, F:フアライト(FeO-SiO<sub>2</sub>), S:非晶質鉄燐

## <引用文献>

元興寺文化財研究所,2004,黒河中老田遺跡樹體鑑定報告書,「黒河尺目遺跡・黒河中老田遺跡発掘調査報告一 主要地方道小杉線中線臨時道路交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一」,富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第25集,富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所,287-294.

長谷川益夫,2005,富山市水橋町・辻ヶ堂遺跡出土木製品の樹種について,「富山市水橋町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書 一病院施設等建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)一」,富山県埋蔵文化財調査報告140,富山県教育委員会,22-24.

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.

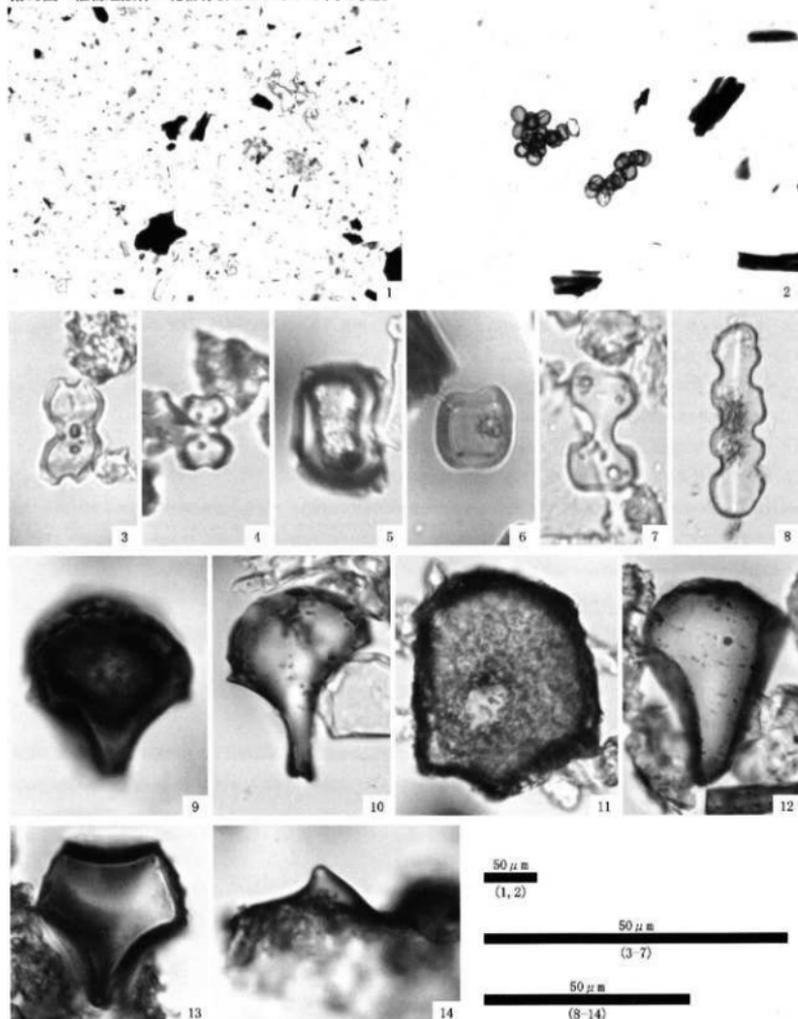
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.

- 株式会社古環境研究所,2000,上新保遺跡における自然科学分析,「富山県富山市上新保遺跡発掘調査報告書-富山市上新保地区土地区画整理事業に先立つ発掘調査」,富山市教育委員会,226-236.
- 近藤純二,2004,植物ケイ酸体研究,ペドロジスト,48,46-64.
- 三宅 尚・中越 信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態,植生史研究,6,15-30.
- 宮田雄一郎・山村恒夫・錦谷 淳・岩田専夫・八幡雅之・結城智也・芝崎秀一,1990,淡水生アルタの形成過程-琵琶湖俊知川河口部を例として-2.地質構成と堆積相,地質学雑誌,96,839-858.
- 森 也寸志・滋賀慎子・岩岡志治・渡辺紹裕・丸山利輔,1992,土壌利用による土壌間隙構造の差異-軟X線による観察を中心として-,土壌の物理性, No. 66,19-27.
- 中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 成岡市,1993,土壌粗間隙の形態とその測定法-土壌の不均一性と物質移動の研究前編,日本土壤肥料科学雑誌,64-1,90-97.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2003,東木津遺跡から出土した柱木の年代と樹種,「東木津遺跡調査概報-ガソリンスタンドの建設にともなう発掘調査-」,高岡市埋蔵文化財調査概報第52号,高岡市教育委員会,24-25.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2008,第4章 第1節 北押川B遺跡の理化学分析,「富山市北押川B遺跡発掘調査報告書-呉羽南部企業同地開発工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)-」,富山市埋蔵文化財調査報告,富山市教育委員会,95-119.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2008aMS,富山市上新保遺跡自然科学分析報告,9p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2008bMS,御坊山・北押川C遺跡の自然科学分析,47p.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄二・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐藤幸一,1990a,八郎潟干拓地重粘土水田上の粗間隙の発達とその意義,農業土木学会誌,60,25-30.
- 佐藤幸一,1990b,八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗間隙の発達とその意義,農業土木学会誌,60,287-292.
- 萬地 謙・伊東隆夫,1982,同況木材組織,地球社,176p.
- 杉山真二,2000,植物珪酸体(プラント・オパール),辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学,同成社,189-213.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子,化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第10図 植物珪酸体・花粉分析プレパラート内の状況

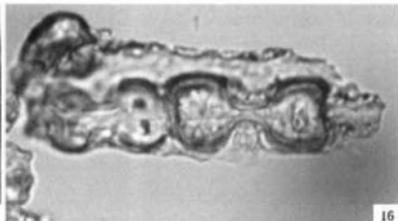


1. プレパラート内の状況(1地点:22)
2. プレパラート内の状況(1地点:22)
3. イネ属短細胞珪酸体(1地点:7)
4. イネ属短細胞珪酸体(1地点:22)
5. タケ亜科短細胞珪酸体(1地点:22)
6. ヨシ属短細胞珪酸体(1地点:14)
7. ススキ属短細胞珪酸体(1地点:14)
8. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(1地点:14)
9. イネ属機動細胞珪酸体(1地点:7)
10. イネ属機動細胞珪酸体(1地点:22)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(1地点:14)
12. ウシクサ属機動細胞珪酸体(1地点:14)
13. シバ属機動細胞珪酸体(1地点:1)
14. イネ属類珪酸体(1地点:1)

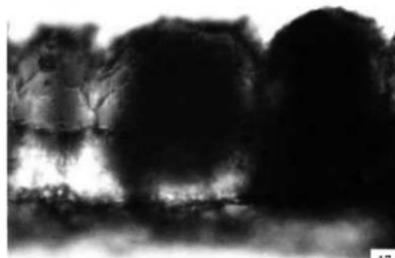
第11図 灰像・種実遺体



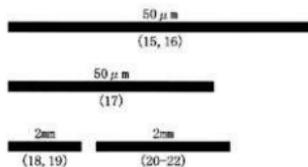
15



16



17



18a

18b



19



20a



20b



21a



21b

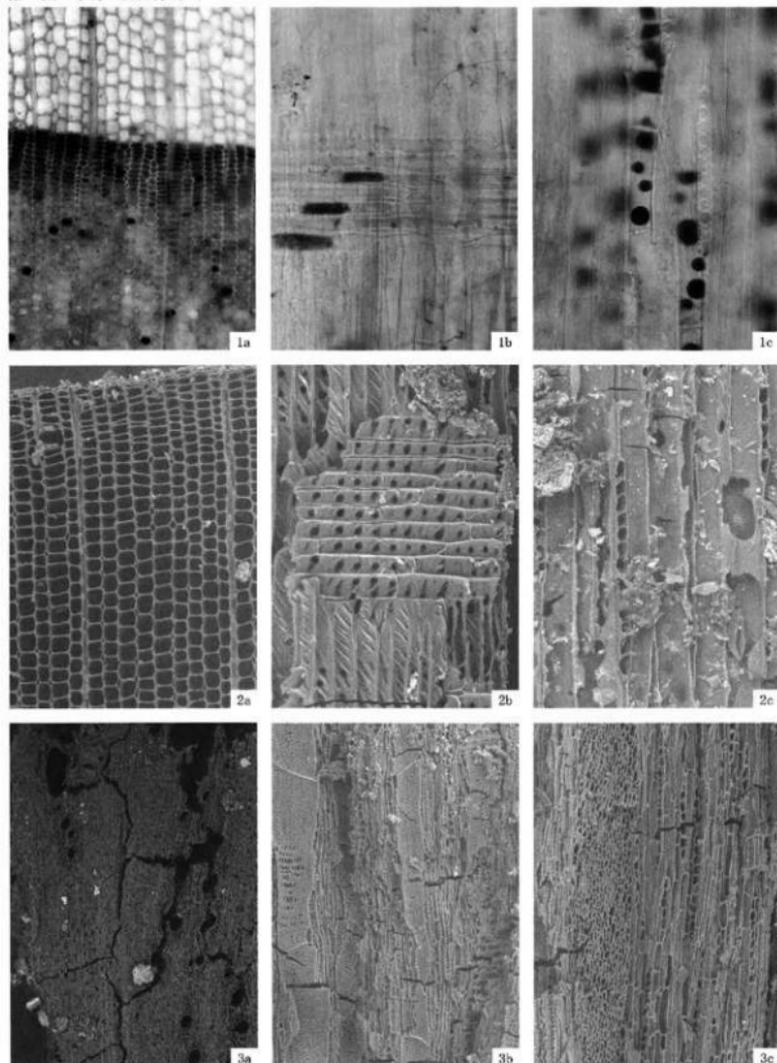


22

15. イネ属短細胞列(SI11)  
 17. イネ属機動細胞列(SI12)  
 19. イネ 穎(SK15)  
 21. イネ科 胚乳(SK15)

16. ススキ属短細胞列(SI11)  
 18. イネ 胚乳(SK15)  
 20. イネ科 胚乳(SK15)  
 22. アカザ科 種子(SK15)

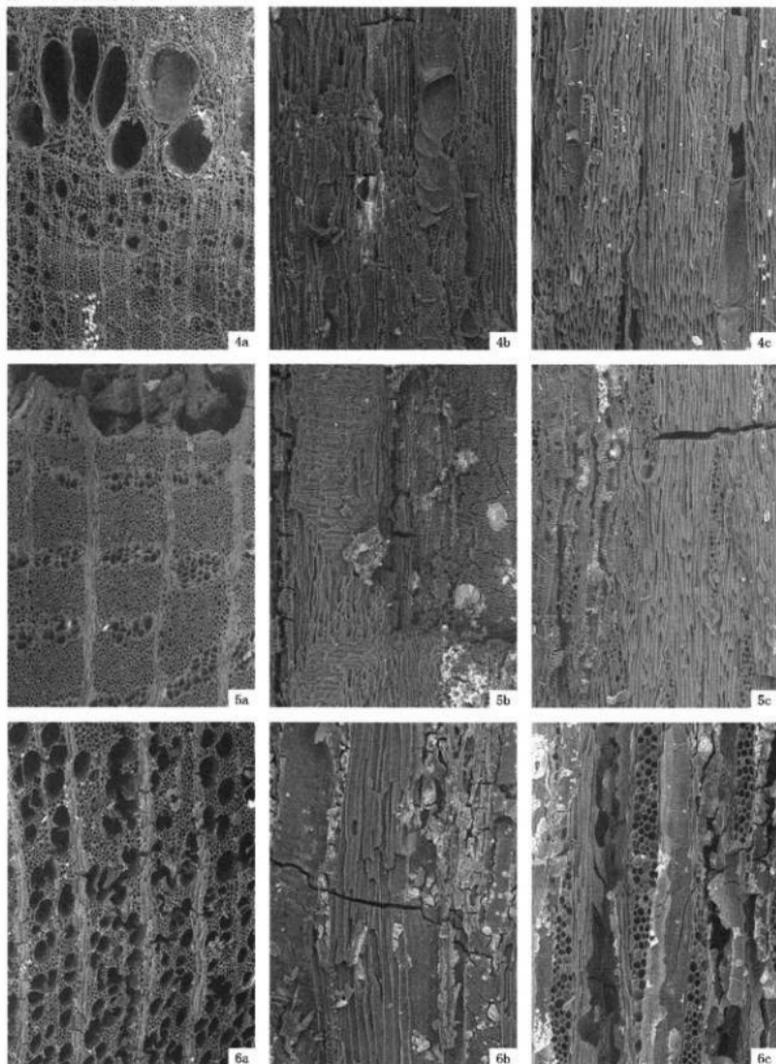
第12図 木材・炭化材(1)



1. スギ(SF07;柱根)  
 2. ヒノキ科(SK15)  
 3. コナラ属コナラ亜属クスギ節(SK15;CW5)  
 a:木口, b:柾目, c:板目

200  $\mu$ m:1a  
 100  $\mu$ m:1b, c  
 200  $\mu$ m:3a  
 200  $\mu$ m:2a, 3b, c  
 100  $\mu$ m:2b, c

第13図 炭化材(2)



4. クリ (SK15;CW2)  
 5. ケヤキ (SK15;CW3)  
 6. サクラ (SI11)  
 a: 木口, b: 径目, c: 板目

200 μm: a  
 200 μm: b, c

## 第5章 総括

今回の調査は住宅建設予定地の道路部分という限定された範囲であったにもかかわらず、古代の堅穴建物30棟、掘立柱建物8棟を検出した。同時にこれらの各遺構や包含層から遺物収納用コンテナ約32箱分の土器類が出土した。以下に今回の調査成果について簡単に総括しておきたい。

### (1) 遺構について

今回検出した遺構はほぼ古代に限定される時期の建物群（堅穴建物・掘立柱建物）で構成されている。平成8～10年度の隣接調査地では古代の建物群以外にも中世集落がみつまっているが（富山市教育委員会2000）、今回の調査では中世に属する時期の遺物はきわめて少なく、掘立柱建物など中世の集落遺構もみつっていない。従って以下はほぼ古代の建物群に限ったまとめとなる。

検出された古代の遺構は建物群が主体となる。既述のように今回の調査では堅穴建物と掘立柱建物からなる二種類の建物遺構が検出されている。このうち堅穴建物は総数で30棟あるものの、トレンチ状調査であることもあり、堅穴建物の全容を知ることのできる事例は少ない。堅穴建物の基本プランは方形で、規模の小さなもので一辺2.5～3 m、床面積8 m<sup>2</sup>弱（SI23）、規模の大きなものでは一辺4～5 m前後、床面積20 m<sup>2</sup>前後（SI13推定）である。平均的な堅穴建物は一辺3.5～4 m、床面積12 m<sup>2</sup>前後（SI18等）と考えられる。柱は無柱穴、内部施設では作りつけの竈を有するものがみられるが、部分検出であることもあり、竈を確認できていない堅穴建物も多い。また貼床も一部にみられるものの、それほど顕著にはみられない。

一方掘立柱建物については、今回の調査では東西方向に軒を揃えた総柱の倉庫状建物（SB02・03）、側柱建物（SB04～06）を検出することができた。とくにSB03・04・06は、北側東西柱列の軒をほぼ一直線に配置しており、相互に重複がないことから、同時期併存の建物群と捉えることができる。ただ残念ながらトレンチ状の調査区という制約から中心建物の相当する掘立柱建物や、これを含めた建物群の全体像を把握することはできなかった。ただ東西棟の棟方向を有し、2棟以上の倉庫群を伴う複数棟からなる建物群は過去の隣接調査地を含めてこれまで検出されておらず、付近に大規模複数棟からなる建物群が存在した可能性がきわめて高い。またこれらの建物群の棟方向がほぼ東西南北方位に規制されている点も重要である。同一方向の棟方向をとる建物は少なく、堅穴建物では30棟のうちSI04・05・14・25・30のわずか5棟が、これらの掘立柱建物と同一の棟方向を有しているに過ぎない。同様の傾向は過去の隣接調査地でも同様で、ほぼ全ての掘立柱建物、堅穴建物が東西南北方位ではなく、これよりも東に振れた棟方向を有している。従って建物の棟方向には東西南北方向を指す一群と、それよりも東に振れた建物の一群とに大きく分けることができよう。このうち東西南北方向の建物群については、大規模複数棟構成の建物が含まれている。とくに律令期においては建物の格式が高いほど真東西南北に規制された棟方向を持つ場合が多い。一方東振する建物群の方位規制がなぜ生じたかは定かでないが、平成8～10年度調査地から本調査地にかけて斜行して検出された旧河道跡SD01の概ねの流路方位にあわせて建物の棟方向を決めた可能性はあろう。これらの東振する建物群にも掘立柱建物と堅穴建物の二種がみられるが、掘立柱建物群では南北方向の2間×3間の側柱建物が多く、総柱の倉庫建物が見られない点に大きな特徴がある。同時に単棟構成（本調査地のSB07・08など）が多く、複数棟構成の場合でもせいぜい2棟前後が一単位である場合が多そうである（当然倉は伴っていない）。このことからこれらの建物が周辺に群在する堅穴建物群の管理棟である可能性が高いが、この点はもう少し詳細に遺構変遷を整理した上で判断したい。

最後にこれらの建物群の時期であるが、真東西南方位の建物群については、掘立柱建物の柱穴からの出土遺物や堅穴建物からの出土遺物を参考すると8世紀後半から9世紀初頭頃、東に棟方向が斜行する建物群については、9世紀中葉から降っても10世紀初頭頃までの時期幅で捉えることができるものと考えたい。

## (2) 出土遺物について

出土遺物はほぼ全てを土器類が占めている。また時期的には奈良・平安時代を主体としており、古代より前および中世以降のものはほとんど認められない。土器類では土師器、須恵器が主体となり、これに少量の黒色土器、赤彩土師器が加わる構成である。このうち最も遡る時期の遺物としては7世紀代の須恵器が数点みられる。古墳時代以来の器形的承譜をひく口縁部内面に立ち上がり有する杯(285)や、口縁部内面にカエリを有する蓋(323・324)などがこれに該当する。前者は畿内の宮都における土器編年に照らせば飛鳥Ⅱ期(7世紀前半～中頃)、後者は飛鳥Ⅲ～Ⅳ期(7世紀後半頃)に比定されよう(西1986)。同様に7世紀代に遡る遺物は隣接する過去調査地でも出土しており、本遺跡の形成時期の一端を示しているものと考えられる。反面7世紀代に遡る確実な建物遺構ははまだ把握されておらず、その検出が今後の発掘調査での重要課題となろう。

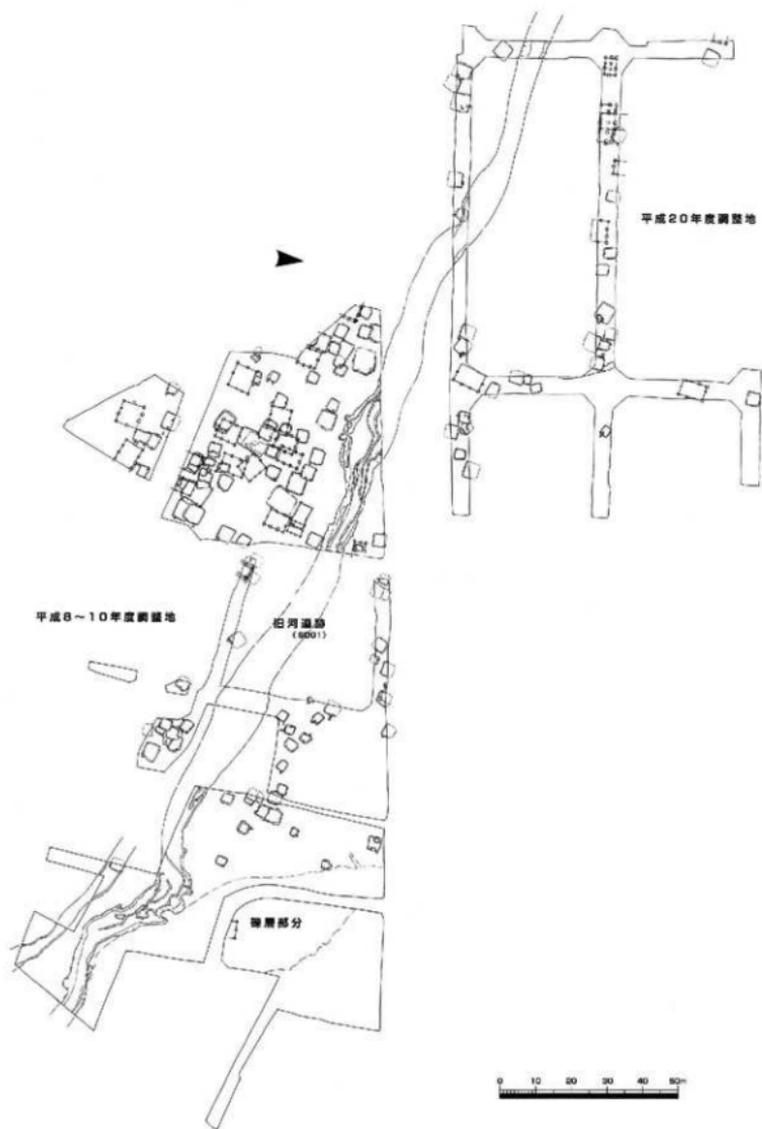
ついで8世紀以降の遺物では墨書土器が見られる。本調査地では15点の墨書土器が出土している。器種の内訳は土師器杯A7点、須恵器は総数8点のうち蓋3点、杯A3点、杯B2点である。墨書の内容では記号が最も多く7点(うち「=」4点、「×」2点、「○」1点)、単字句3点(「西」1点、「真?」1点、「大?」1点)、不明5点である。時期的には須恵器が8世紀後半から9世紀代、土師器の墨書土器は全て9世紀以降に位置づけられる。過去の隣接調査地でも墨書土器は19点が出土している。内容的には「長□?」1点、「真」ないし「真?」2点、「平」1点、記号の「×」2点など、本調査地とよく似た構成である。近隣遺跡での類別としては、単字句墨書では「真」が吉倉B遺跡で出土している(富山県埋蔵文化財センター1993)。「平」については、大型掘立柱建物が見つかった任海宮田遺跡B1地区で多量に出土している(財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所1997)。また「西」のような方位墨書は、どちらかというとも8世紀代までの古い時期に多く見られる傾向がある。上新保遺跡の場合、既存調査地を含めても墨書土器は34点しか出土していない。一方同じ富山平野内の遺跡でも任海宮田遺跡では800点以上の墨書土器が出土しているが(中野2001・2002、森田2003)、任海宮田遺跡の事例はあまり一般的とはいえず、本遺跡の様相はむしろ吉倉B遺跡(40点以上)や南中田D遺跡(富山県埋蔵文化財センター1991)など富山平野内に所在する一般的な古代集落の様相を示しているものと考えられる。

墨書土器以外では小破片であるが能登式製塩土器の尖底部の小破片が1点(009)出土している。

この他には黒色土器や赤彩土師器の出土もみられるものの、量的にはきわめて少ない。すなわち緑灰釉陶器といった施釉陶器類や転用碗・円面碗などの識字関係遺物、巡方・石帯等といった古代在地豪族あるいは地方官人などの存在を示す遺物はほとんどみられない。これらの出土遺物の傾向を見る限り、上新保遺跡は一般的な古代集落の様相を示しているものと考えることができよう。

## (3) 遺跡について

前述のように隣接する平成8～10年度調査地でも約120棟の堅穴建物、25棟の掘立柱建物が検出されている。これに今回検出された建物棟数を加えると堅穴建物150棟、掘立柱建物33棟がこれまでに本遺



第14図 上新保遺跡検出の古代建物全体図

跡で検出された古代建物の総数となる。一方上新保遺跡と同じ富山平野に立地し、本遺跡の南西側約4km離れて位置する任海宮田遺跡でもこれまでに堅穴建物215棟、掘立柱建物22棟からなる古代の建物群が検出されている(森1998・1999・2000)。この場合建物の実数だけを単純比較するならば、任海宮田遺跡のほうが検出棟数が多いものの、調査面積では上新保遺跡は32,000㎡であるのに対し、任海宮田遺跡ではその3倍以上の100,000㎡を超える膨大な面積が調査されている。換言するならば単位面積あたりの建物の密集度は、任海宮田遺跡より上新保遺跡の方が高いといえる。また掘立柱建物の比率についても上新保遺跡は高い傾向にある。任海宮田遺跡の場合、建物の検出棟数に占める掘立柱建物の比率は10%弱である。さらに任海宮田遺跡の南側に隣接する吉倉B遺跡では堅穴建物59棟、掘立柱建物12棟が調査の結果みつかっており、建物の検出棟数に占める掘立柱建物の比率は17%となる。これに対し上新保遺跡での建物総数に対する掘立柱建物の比率は18%で、任海宮田遺跡よりもむしろ吉倉B遺跡に近い比率となる。任海宮田遺跡(B1地区)、吉倉B遺跡(県調査地)ではともに大規模複数棟構成の建物群が検出されており、堅穴建物群の居住者を統括管理する集落の中心建物群と推定されている。上新保遺跡の場合倉庫2棟を含むSB02~04の3棟の建物群がこのような建物に該当する可能性が高いが、前述のようにトレンチ状調査による面的制約から中心建物や建物群構成・配置などは把握できていない。ただ推測としては出土遺物の様相などを勘案する限り、任海宮田遺跡B1地区タイプの大規模家族住宅型の建物群というより、それよりワンランク規模の小さい吉倉B遺跡タイプの建物規模である可能性が高そうである。

これらの大規模建物群は当地に展開する開墾集落を主導・管理する勢力の中心施設と考えられる。上新保遺跡の場合現状では国府や郡衙など官衙主導の様相が窺える出土資料は乏しい状況にある。またその管轄も土地の開墾と営農に重きを置いたものである可能性が高い。というのはこれだけの建物数が検出されているにもかかわらず、上新保遺跡ではこれまで土鍾の出土が皆無だからである。上新保遺跡と同じ富山平野内に所在する他の古代集落では一般的に土鍾が出土するケースが多い。任海宮田遺跡では網漁に使われたと考えられる大型土鍾が多量に出土しており、農地の開墾以外にも堅穴建物居住者を組織的に編成して大規模な河川漁業をおこなっていた可能性が高い(森2003)。また同じ富山平野内でも呉羽丘陵に近い井田川水系に位置する金屋南遺跡では、大小様々な形態の土鍾が多量に出土しており、刺し網や曳き網など多様な河川漁業に従事した様相が推測される(富山市教育委員会1999)。この他にも吉倉B遺跡や栗山椿原遺跡、長岡杉林遺跡などでも土鍾が多く出土している。このことから富山平野内の古代集落では農地の開発とともに、河川漁業も一般的におこなわれていた様相を窺うことができる。これに対し上新保遺跡はこれだけの建物棟数が見つかるにもかかわらず、土鍾の出土が皆無であるというのが、逆の意味で特異な現象と考えられる。その理由は定かでないが、すくなくとも上新保遺跡の居住者の場合、河川漁業に従事することはなかったものと考えられることであろう。すなわち上新保遺跡の建物群を管掌する主導者層は河川を占有する権利を有しておらず、農業を主体とする開発行為に携わっていた可能性が高い。

なお上新保遺跡では平成19年にも発掘調査をおこなっている(富山市教育委員会2009)。この調査地は今回の調査地から東側約0.5kmほど離れた位置にある。調査の結果やはり古代の堅穴建物や掘立柱建物が検出されているが、この調査地は本調査地や隣接する平成8~10年度調査地の建物群とは別グループの建物群である可能性が高い。このように上新保遺跡という同一遺跡内でも今後別系譜の建物群が検出される可能性がでてきており、周辺部においても今後のさらなる調査の進展が期待されよう。

## 引用・参考文献

- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2006 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2008 『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 武田健太郎 2001 『任海宮田遺跡の大型礎物について』『紀要第4号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 富山県埋蔵文化財センター 1991 『南中田D遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1993 『古倉B遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996 『任海宮田遺跡Ⅰ』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997 『任海宮田遺跡Ⅱ』
- 富山県埋蔵文化財センター 1998 『任海宮田遺跡Ⅲ』
- 富山市教育委員会 1996 『富山市上新保遺跡試掘調査報告-富山市上新保十地区西整理事業に先立つ試掘調査-』
- 富山市教育委員会 2000 『富山市上新保遺跡発掘調査報告-富山市上新保十地区西整理事業に伴う発掘調査-』
- 富山市教育委員会 2009 『富山市上新保遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 1999 『金原南遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 中野由紀子 2001 『任海宮田遺跡の墨書土器について』『紀要第4号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 中野由紀子 2002 『任海宮田遺跡の墨書土器について(2)』『紀要第5号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 西広海 1986 『土器様式の成立とその背景』真福社
- 森隆 1998 『越中の古代厨宅建物に関する覚書』『大塚第19号』
- 森隆 1998 『任海遺跡群の古代建物群構成(1)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森隆 1999 『任海遺跡群の古代建物群構成(2)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森隆 2000 『任海遺跡群の古代建物群構成(3)』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森隆 2003 『古代北陸の河川漁業に関する若干の考察』『続・文化財学論集』
- 森田利枝 2003 『任海宮田遺跡の墨書土器について』『紀要第6号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

上新築建築物調査結果一覧											土質	焼成	色調	残存率	備考
通物番号	出土地点	調査番号	種別	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	高さ (cm)					
001	S01	16	須惠部	甕	15.3	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/6			
002	S01	16	須惠部	甕	17.4	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/6			
003	S01	16	須惠部	杯A	10.8	3.1	6.7	—	微細~1.0mmの砂粒混	不良	淡黄灰色	1/6			
004	S01	16	須惠部	小型鉢	12.8	8.1	5.2	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/7		煤付着	
005	S01	16	須惠部	取手付鉢	10.2	8.0	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/6		煤付着 器底剥落多い	
006	S01	16	須惠部	甕	16.8	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/6			
007	S01	16	須惠部	甕	29.4	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒多く混	良	明黄褐色	1/6			
008	S02	16	須惠部	杯A	11.6	3.0	9.6	—	砂粒混	不良	明黄灰色	1/4			
009	S03	16	須惠部	飯盛土罐	—	—	—	—	砂粒多く混	良	黒灰色	底部破片			
010	S04	16	須惠部	杯B	11.2	3.6	—	7.2	微細砂混	良	淡灰茶褐色	1/3			
011	S04	16	須惠部	杯B	—	3.6	—	9.8	微細~2.0mmの砂粒混	良	青灰色	口縁部~底部1/2			
012	S04	16	須惠部	長壺	21.8	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/4			
013	S04	16	須惠部	長壺	22.0	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/3		煤付着	
014	S04	16	須惠部	長壺	21.8	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒少量混	良	明黄褐色	口縁部~体部中位1/4			
015	S05	16	須惠部	甕	16.0	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部破片		自然落	
016	S08	16	須惠部	杯A	13.5	3.1	7.0	—	砂粒多く混	不良	淡黄灰色	1/4			
017	S08	16	須惠部	小型甕	11.4	11.9	6.6	—	砂粒混	普通	明黄褐色	口縁部~体部1/3			
018	S08	16	須惠部	長壺	19.6	—	—	—	微細~1.0mmの砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部~体部中位1/2			
019	S08	16	須惠部	甕	—	—	—	—	白色粒混	良	淡黄灰色	天井部破片		内面に煤付着	
020	S08	16	須惠部	甕	17.0	—	—	—	砂粒多く混	良	灰褐色	口縁部破片			
021	S08	16	須惠部	杯B	—	—	—	8.8	砂粒少量混	良	淡黄灰色	底部1/6			
022	S08	16	須惠部	杯B	15.3	6.3	—	9.4	0.5~2.0mmの砂粒混	良	暗灰色	口縁部~体部3/4			
023	S08	16	須惠部	中型甕	19.0	—	—	—	砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部~体部下位1/6		煤付着	
024	S08	16	須惠部	中型甕	18.4	18.75	8.0	—	砂粒多く混	良	明黄褐色	1/4		煤付着	
025	S09	16	須惠部	杯A	11.4	3.4	7.0	—	0.5~2.0mmの砂粒少量混	不良	明黄灰色	2/3		煤付着	
026	S10	16	須惠部	甕	12.3	2.7	—	—	白色粒少量混	良	灰色	3/4			
027	S10	16	須惠部	甕	12.3	2.4	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	黄灰色	9/10			
028	S10	16	須惠部	甕	15.7	—	—	—	微細~1.5mmの砂粒混	良	灰色	1/6			
029	S10	16	須惠部	甕	17.0	3.6	—	—	白色粒混	普通	灰色	2/5			
030	S10	16	須惠部	甕	15.8	2.5	—	—	砂粒多く混	普通	灰褐色	1/2弱			
031	S10	16	須惠部	杯A	12.8	3.6	9.8	—	砂粒混	普通	灰白色	1/6			
032	S10	16	黒色土器	杯A	—	—	—	—	砂粒多く混	普通	明黄灰色	底部のみ			
033	S10	16	須惠部	小型甕	—	—	7.1	—	砂粒多く混	普通	褐色	底部のみ			
034	S10	16	須惠部	小型甕	13.1	—	—	—	微細~1.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部2/3~体部1/3		煤付着	
035	S10	16	須惠部	小型甕	—	11.5	6.7	—	砂粒混	良	明黄褐色	1/2 口縁部欠損			
036	S10	16	須惠部	小型甕	—	—	5.4	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	底部のみ		煤付着	
037	S11	17	須惠部	長壺	22.0	—	—	—	砂粒混	普通	明黄褐色	口縁部1/5			
038	S11	17	須惠部	長壺	21.2	—	—	—	砂粒多く混	不良	明黄灰色	口縁部1/3			
039	S11	17	須惠部	長壺	22.4	—	—	—	砂粒多く混	不良	明黄灰色	口縁部1/5			
040	S11	17	須惠部	長壺	24.0	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒若干混	良	明黄褐色	口縁部1/8			
041	S11	17	須惠部	長壺	34.0	—	—	—	0.5~1.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/8		煤付着	
042	S11	17	須惠部	長壺	20.0	—	—	—	微細~4.0mmの砂粒多く混	良	淡青色	1/7		煤付着	
043	S11	17	須惠部	甕	14.8	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	黄灰色	完好			
044	S11	17	須惠部	取手付鉢	9.4	6.55	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/2		煤付着	
045	S12	17	須惠部	甕	—	1.6	—	—	微白色粒少量混	良	灰色	天井部1/3			
046	S12	17	須惠部	長壺	18.4	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部~体部上位1/3		煤付着	
047	S12	17	須惠部	長壺	20.4	—	—	—	砂粒混	普通	明黄褐色	口縁部1/6			
048	S12	17	須惠部	長壺	20.0	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部~体部上位1/5		煤付着	
049	S12	17	須惠部	長壺	22.4	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/8			
050	S13	17	須惠部	長壺	—	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒少量混	良	明黄褐色	底部のみ			
051	S14	17	須惠部	杯B	14.3	3.9	—	8.0	0.5~3.0mmの砂粒混	普通	灰色	口縁部~体部1/2			
052	S15	17	須惠部	長壺	—	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	底部1/4			
053	S15	17	須惠部	長壺	—	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	淡褐色	体部1/4		煤付着	
054	S15	17	須惠部	鉢	—	—	—	—	砂粒少量混	良	明黄褐色	体部1/5		煤付着	
055	S16	17	須惠部	杯B	—	1.7	—	8.6	0.5~4.0mmの砂粒若干混	良	淡黄色	底部1/5			
056	S16	17	須惠部	長壺	20.0	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部1/4		煤付着	
057	S16	17	須惠部	長壺	—	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒多く混	良	明黄褐色	体部1/4			
058	S17	17	須惠部	甕	12.3	2.9	—	—	砂粒少量混	良	灰色	完好			
059	S17	17	須惠部	甕	16.0	3.2	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	1/4			
060	S17	17	須惠部	甕	14.4	—	—	—	白色粒若干混	普通	明黄灰色	口縁部1/6			
061	S17	17	須惠部	杯A	12.8	3.2	9.8	—	白色粒少量混	普通	灰褐色	口縁部~底部1/3			
062	S17	17	須惠部	長壺	—	—	—	—	砂粒若干混	良	明黄褐色	口縁部破片		煤付着	
063	S17	17	須惠部	小型甕	—	8.3	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	底部~体部下位1/2		煤付着	
064	S17	17	須惠部	長壺	—	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部破片			
065	S17	17	須惠部	長壺	22.0	—	—	—	砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部1/8			
066	S18	16	須惠部	長壺	20.2	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	1/4			
067	S18	16	須惠部	長壺	—	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	普通	淡青色	体部1/3			

065	SI15	18	土師器	長頸	—	—	—	0.5~3.0mmの砂粒多く混	良	淡黄灰色	口縁部破片	
069	SI20	18	土師器	長頸	18.2	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/8	
070	SI20	18	土師器	長頸	20.3	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/8	
071	SI20	18	土師器	長頸	21.0	—	—	砂粒混	良	淡黄灰褐色	口縁部1/6	
072	SI20	18	土師器	長頸	22.0	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	淡黄灰色	口縁部1/4	
073	SI20	18	須恵器	杯A	13.0	—	—	白色粒混	良	灰色	口縁部~体部1/5	
074	SI20	18	土師器	小型壺	14.8	—	—	微細粒~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/8	
075	SI20	18	土師器	長頸	22.6	—	—	0.5~2.0mmの砂粒多く混	良	淡黄灰色	口縁部1/5	煤付着
076	SI20	18	土師器	長頸	24.3	—	—	0.5~3.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/5	
077	SI20	18	土師器	長頸	23.6	—	—	0.5~3.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部~体部上位1/5	
078	SI21	18	土師器	鉢	32.8	—	—	微細~2.0mmの砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部破片	
079	SI21	18	土師器	鉢	33.4	—	—	微細~1.0mmの砂粒多く混	良	淡黄褐色	口縁部破片	
080	SI22	18	土師器	小型壺	12.8	—	—	砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部1/4	
081	SI22	18	土師器	小型壺	—	2.3	5.8	微細~2.0mmの砂粒少量混	良	明黄褐色	底部2/3	
082	SI22	18	土師器	長頸	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒若干混	良	明黄褐色	口縁部破片	煤付着
083	SI22	18	土師器	長頸	17.8	—	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	淡黄灰色	口縁部1/6	
084	SI22	18	土師器	長頸	21.6	—	—	0.5~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/8	煤付着
085	SI22	18	土師器	長頸	24.0	—	—	0.1~2.0mmの砂粒多く混	良	褐色	口縁部1/5	
086	SI24	18	須恵器	蓋	12.0	—	—	砂粒混	普通	灰色	1/3	
087	SI24	18	須恵器	蓋	12.7	—	—	微砂粒少量混	普通	明灰色	1/7	
088	SI24	18	須恵器	蓋	—	—	—	砂粒少量混	普通	明灰色	つまみのみ	
089	SI24	18	土師器	長頸	—	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部破片	
090	SI24	18	土師器	長頸	16.3	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部1/4	
091	SI24	18	土師器	長頸	—	—	11.0	砂粒多く混	普通	明黄褐色	底部1/5	煤付着
092	SI26	18	土師器	杯A	—	—	5.8	砂粒少量混	良	明黄褐色	底部1/3	
093	SI26	18	須恵器	杯A	13.2	9.1	8.6	白色粒若干混	不良	明黄灰色	1/8	煤付着
094	SI26	18	土師器	小型壺	13.8	—	—	砂粒混	普通	明黄褐色	口縁部~体部上位1/8	煤付着
095	SI26	18	土師器	小型壺	—	—	—	砂粒多く混	普通	褐色	口縁部破片	
096	SK01	19	土師器	鉢	—	—	—	砂粒少量混	良	明黄褐色	口縁部破片	
097	SK02	19	須恵器	蓋	14.8	—	—	砂粒混	普通	灰色	1/6	
098	SK02	19	須恵器	蓋	14.2	—	—	微細~1.0mmの砂粒少量混	普通	灰色	口縁部付近1/3	
099	SK03	19	須恵器	蓋	11.6	—	—	白色粒若干混	普通	褐色	口縁部破片	
100	SK04	19	土師器	土師支脚	—	—	—	砂粒多く混	普通	明黄褐色	脚部のみ(一本)	
101	SK05	19	土師器	長頸	—	—	—	砂粒混	普通	黄灰色	体部破片	
102	SK05	19	土師器	杯A	—	—	5.3	砂粒少量混	良	明黄褐色	底部1/2弱	底面外縁に「着青」口不明
103	SK06	19	須恵器	蓋	15.0	3.15	—	砂粒少量混	不良	明黄褐色	口縁部1/8	
104	SK06	19	須恵器	蓋	15.8	—	—	砂粒混	普通	淡褐色	口縁部~天井部1/4	
105	SK07	19	須恵器	杯B	—	—	8.0	砂粒若干混	普通	淡黄色	高台部1/4	
106	SK08	19	須恵器	蓋	12.6	2.85	—	白色粒若干混	普通	淡黄色	1/6	
107	SK09	19	須恵器	杯B	—	—	—	砂粒少量混	普通	黄灰色	高台部1/3	
108	SK10	19	須恵器	杯B	8.6	1.3	—	砂粒若干混	普通	黄灰色	高台部1/3	
109	SK11	19	土師器	壺	13.8	—	—	微細~3.0mmの砂粒混	普通	淡黄灰色	口縁部1/4	
110	SK12	19	須恵器	杯B	—	—	9.5	0.5~3.0mmの砂粒多く混	普通	淡褐色	底部~底部一部	底面外縁へ「X」印
111	SI30	19	須恵器	蓋	15.8	3.2	—	0.5~3.0mmの砂粒混	普通	明灰褐色	つまみ1/2欠損	
112	SI30	19	須恵器	蓋	11.3	3.3	—	砂粒少量混	普通	淡褐色	1/5	
113	SI30	19	須恵器	杯A	11.2	—	—	砂粒多く混	普通	淡褐色	1/3	灰かぶり
114	SK13	19	須恵器	蓋	14.2	—	—	微細粒若干混	不良	明黄褐色	口縁部~底部1/8	
115	SK14	19	土師器	皿	13.6	—	—	微細粒少量混	普通	灰褐色	口縁部~体部1/5	
116	SK14	19	土師器	蓋	19.0	—	—	0.5~2.0mmの砂粒多く混	良	明黄褐色	口縁部1/4	
117	SK15	19	須恵器	蓋	17.2	—	—	微細~2.0mmの砂粒少量混	良	灰褐色	口縁部付近1/3	
118	SK16	19	須恵器	蓋	—	—	—	砂粒多く混	不良	灰褐色	天井部2/3	
119	SK17	19	土師器	長頸	19.8	—	—	砂粒混	不良	淡茶褐色	1/8	煤付着
120	SK17	19	土師器	長頸	—	—	—	微細~2.0mmの砂粒混	良	明黄褐色	体部一部	
121	SK18	19	土師器	杯A	11.8	3.75	4.6	微細粒若干混	良	明黄褐色	1/8	煤付着
122	SK18	19	土師器	杯A	13.6	4.4	5.4	砂粒混	普通	黄灰色	底部1/2~体部1/6	煤付着 回転糸切り
123	SI23	19	土師器	杯A	13.5	4.4	4.0	微細~2.0mmの砂粒少量混	良	明黄褐色	1/3	
124	SI23	19	土師器	杯A	12.6	4.3	4.6	0.5~3.0mmの砂粒若干混	良	明赤褐色	口縁部一部破損	内外面赤彩物有り
125	SI23	19	土師器	杯A	12.2	3.9	5.0	0.5~2.0mmの砂粒少量混	良	明赤褐色	底面外縁~体部1/6	
126	SI23	19	土師器	杯A	13.2	—	—	砂粒若干混	良	明赤褐色	口縁部~体部1/6	
127	SI23	19	土師器	杯A	—	—	5.2	微細~2.0mmの砂粒若干混	良	明赤褐色	底部~体部下位1/3	
128	SI23	19	土師器	蓋	14.4	—	—	砂粒多く混	良	明赤褐色	口縁部付近2/3	内外面赤彩
129	SI23	19	土師器	杯B	—	—	8.4	砂粒混	良	明黄褐色	高台変形	内外面赤彩 回転糸切り
130	SI23	19	須恵器	杯A	14.8	—	—	砂粒混	良	明黄褐色	口縁部~体部1/7	
131	SI23	19	土師器	小型壺	14.0	—	—	砂粒若干混	良	明黄褐色	口縁部1/4	煤付着
132	SI23	19	土師器	長頸	—	—	—	砂粒多く混	普通	明黄褐色	口縁部破片	
133	SI23	19	土師器	小型壺	—	—	—	砂粒混	良	明赤褐色	口縁部破片	
134	SI23	19	土師器	長頸	—	—	—	0.5~2.0mmの砂粒多く混	不良	淡黄褐色	口縁部破片	
135	SI23	19	須恵器	蓋	16.0	—	—	白色粒混	良	灰褐色	1/4弱	
136	SI23	19	須恵器	杯A	11.8	3.6	6.5	0.5~3.0mmの砂粒少量混	不良	明黄褐色	完形	煤付着
137	SI23	19	土師器	杯A	—	—	6.2	砂粒混	良	淡茶褐色	底部2/3	煤付着

138	SZ28	19	土師器	杯A	--	--	5.1	--	砂粒若干含	不良	明黄褐色	底部1/2	回転糸切り
139	SZ9	19	土師器	小空壺	13.7	--	--	--	砂粒混	普通	淡茶褐色	1/8	煤付着
140	SZ7	19	須恵器	壺	12.8	--	--	--	砂粒混	普通	灰褐色	1/3	
141	SZ7	19	須恵器	壺	15.8	--	--	--	砂粒多量	普通	灰褐色	1/3	
142	SZ7	19	須恵器	杯A	11.6	3.0	6.9	--	砂粒多量	不良	淡黄灰色	1/6	
143	SZ7	19	須恵器	杯B	--	--	--	8.9	砂粒若干含	不良	明黄灰色	底部1/5	
144	SZ7	19	須恵器	杯B	--	--	--	6.4	砂粒少量含	良	淡黄灰色	底部1/5	
145	SZ7	19	土師器	壺	--	--	--	--	砂粒多量	普通	褐色	口縁部破片	煤付着
146	SP01	19	土師器	瓶	--	--	--	--	砂粒多量	良	明黄褐色	取っ手のみ	
147	SP02	19	須恵器	壺	--	--	--	--	白色粒混	良	淡黄色	口縁部破片	
148	SP03	19	須恵器	壺	13.5	2.2	--	--	白色粒混	良	褐色	1/8	
149	SP04	19	土師器	長壺	23.4	--	--	--	砂粒混	良	明黄灰色	口縁部破片	
150	SP04	19	土師器	小空壺	--	--	6.5	--	砂粒混	良	明黄灰色	底部1/4~1/5	煤付着
151	SD01	20	須恵器	壺	12.4	--	--	--	白色粒多量	良	明黄灰色	口縁部~天井部1/4	
152	SD01	20	須恵器	壺	12.8	2.9	--	--	白色粒混	良	灰色	1/7	
153	SD01	20	須恵器	壺	13.1	--	--	--	白色粒若干含	良	明灰褐色	1/3	
154	SD01	20	須恵器	壺	15.8	--	--	--	白色粒多量	良	淡灰褐色	9/10	
155	SD01	20	須恵器	壺	14.4	--	--	--	白色粒少量含	良	灰色	口縁部~天井部1/4	
156	SD01	20	須恵器	壺	18.4	--	--	--	砂粒含	良	灰褐色	口縁部一部~天井部1/4	
157	SD01	20	須恵器	杯B	16.8	--	--	--	砂粒混	不良	淡黄灰色	1/8	
158	SD01	20	須恵器	杯B	--	--	--	10.4	白色粒混	普通	灰褐色	底部~底部1/4	
159	SD01	20	須恵器	杯B	12.0	3.45	--	7.2	白色粒混	良	灰色	底部完形~口縁部1/2	
160	SD01	20	須恵器	杯B	11.8	3.8	--	7.4	白色粒若干含	良	灰褐色	口縁部1/3~底部1/2	
161	SD01	20	須恵器	杯B	--	--	--	6.8	白色粒若干含	良	灰褐色	底部1/2	一部自然離
162	SD01	20	須恵器	杯B	--	--	--	7.3	白色粒少量含	良	青灰色	底部1/4	
163	SD01	20	須恵器	杯A	11.8	2.95	7.4	--	砂粒混	良	灰色	1/4	
164	SD01	20	須恵器	杯A	14.2	2.7	10.2	--	微細粒若干含	普通	明灰色	底部1/8~口縁部1/2	
165	SD01	20	須恵器	杯A	11.6	3.2	7.0	--	0.5~3.0mmの砂粒含	不良	明黄灰色	完形	
166	SD01	20	須恵器	杯A	12.2	3.1	6.8	--	白色粒少量含	普通	明黄灰色	1/3	
167	SD01	20	土師器	杯A	--	--	5.2	--	砂粒若干含	良	淡黄褐色	底部のみ	赤彩
168	SD01	20	須恵器	壺	--	--	--	--	白色粒少量含	普通	淡黄灰色	頸部1/2部	自然離
169	SD01	20	黒色土師	大型杯A	--	--	--	--	砂粒少量含	良	明黄灰色	底部一部	
170	SD01	20	土師器	長壺	29.0	--	--	--	砂粒混	良	明黄灰色	口縁部~底部上段1/8	煤付着
171	SD02	20	須恵器	壺	7.5	--	--	--	微細粒混	良	灰褐色	口縁部1/6	
172	SD02	20	須恵器	大型壺	--	--	--	--	白色粒少量含	良	灰色	口縁部破片	
173	SD02	20	土師器	小空壺	13.0	--	--	--	微細~2.5mmの砂粒少量含	普通	明黄灰色	口縁部~底部2/3	
174	SD03	20	須恵器	壺	12.2	--	--	--	微細~2.0mmの砂粒多量	普通	淡黄灰色	口縁部付近1/4弱	
175	SD03	20	須恵器	壺	16.7	--	--	--	微細粒混	普通	淡黄灰色	口縁部~天井部1/5	
176	SD03	20	須恵器	杯B	15.0	3.8	--	10.4	白色粒若干含	良	灰褐色	口縁部~高台1/4弱	
177	SD03	20	須恵器	杯B	--	--	--	9.4	白色粒若干含	普通	淡黄灰色	高台1/3	
178	SD03	20	須恵器	杯B	--	--	--	--	微白色粒若干含	普通	淡黄灰色	高台1/4	
179	第1調査区	20	須恵器	壺	10.6	2.7	--	--	微砂若干含	良	灰色	2/5	
180	第1調査区	20	須恵器	壺	16.0	--	--	--	微砂少量含	不良	明黄灰色	1/6	
181	第1調査区	20	須恵器	壺	13.0	--	--	--	砂粒少量含	良	黒灰色	1/6	
182	第1調査区	20	須恵器	壺	14.0	--	--	--	微砂含	良	黒灰色	1/4	
183	第1調査区	20	須恵器	壺	16.0	--	--	--	微白色粒若干含	良	灰色	破片	
184	第1調査区	20	須恵器	壺	12.3	--	--	--	白色粒少量含	普通	暗灰色	1/8	
185	第1調査区	20	須恵器	壺	15.0	--	--	--	白色粒少量含	良	青灰色	口縁部1/6	
186	第1調査区	20	須恵器	壺	--	--	--	--	微砂若干含	良	暗灰色	1/6	
187	第1調査区	20	須恵器	壺	--	--	--	--	微砂含	良	灰色	1/3	
188	第1調査区	20	須恵器	壺	--	--	--	--	微砂少量含	普通	灰褐色	天井部1/3	
189	第1調査区	20	須恵器	壺	--	--	--	--	白色粒少量含	良	灰褐色	1/3	
190	第1調査区	20	須恵器	杯B	--	--	--	9.6	微砂若干	普通	淡黄灰色	1/8	天井部内面へ2記号「=」
191	第1調査区	20	須恵器	杯B	15.8	4.4	--	11.4	微砂少量含	良	灰褐色	1/8	
192	第1調査区	20	須恵器	杯B	--	--	--	7.8	微砂少量含	普通	淡黄灰色	底部1/8	
193	第1調査区	20	須恵器	杯B	--	--	--	8.0	白色粒少量含	普通	灰褐色	底部1/2部	
194	第1調査区	20	須恵器	杯B	11.8	3.5	--	7.2	微砂少量含	良	暗灰褐色	口縁部~底部破片	煤付着
195	第1調査区	20	須恵器	杯A	12.0	3.3	--	--	精良	良	灰色	1/2	
196	第1調査区	20	須恵器	杯A	12.8	3.3	--	--	微砂若干含	良	明灰褐色	1/3	
197	第1調査区	20	須恵器	杯A	11.8	--	--	--	微砂若干含	良	灰褐色	1/6	
198	第1調査区	20	須恵器	杯A	11.8	--	--	--	白色粒少量含	普通	明灰色	1/6	
199	第1調査区	20	須恵器	杯A	9.5	3.3	--	--	微砂少量含	不良	明黄灰色	1/6	
200	第1調査区	20	須恵器	杯A	11.2	3.5	--	--	微砂若干含	良	明黄灰色	2/5	
201	第1調査区	20	須恵器	杯A	13.0	--	--	--	微砂少量含	良	青灰色	1/8	
202	第1調査区	20	須恵器	杯A	--	--	8.0	--	微砂少量含	良	明黄灰色	1/3	
203	第1調査区	20	須恵器	杯A	--	--	9.0	--	微白色粒若干含	普通	明灰色	底部1/6	
204	第1調査区	20	須恵器	壺	20.8	--	--	--	微砂含	普通	明灰褐色	口縁部破片	
205	第1調査区	20	須恵器	壺	--	--	--	--	微砂含	普通	明灰色	口縁部破片	
206	第1調査区	20	須恵器	広口壺	16.0	--	--	--	白色粒若干含	普通	明灰色	口縁部1/3	
207	第1調査区	20	須恵器	広口壺	15.2	--	--	--	白色粒少量含	良	灰色	頸部~底部2/3	

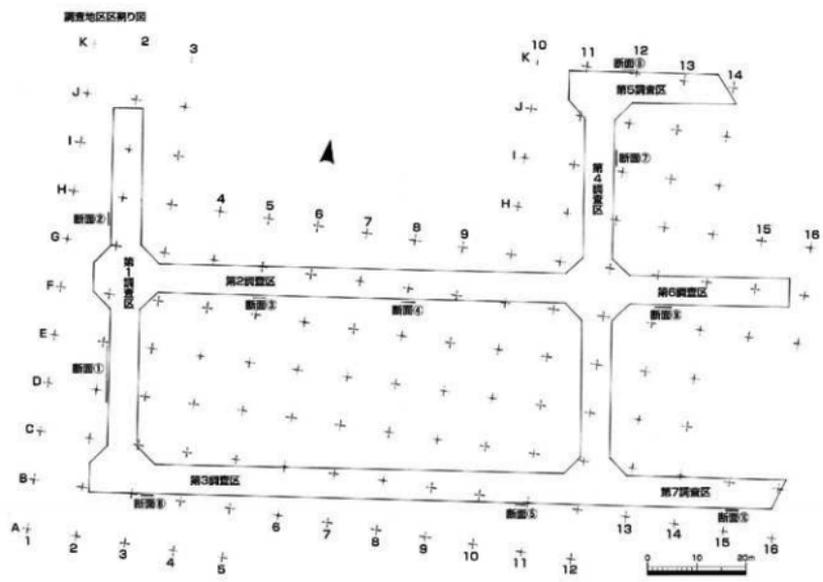
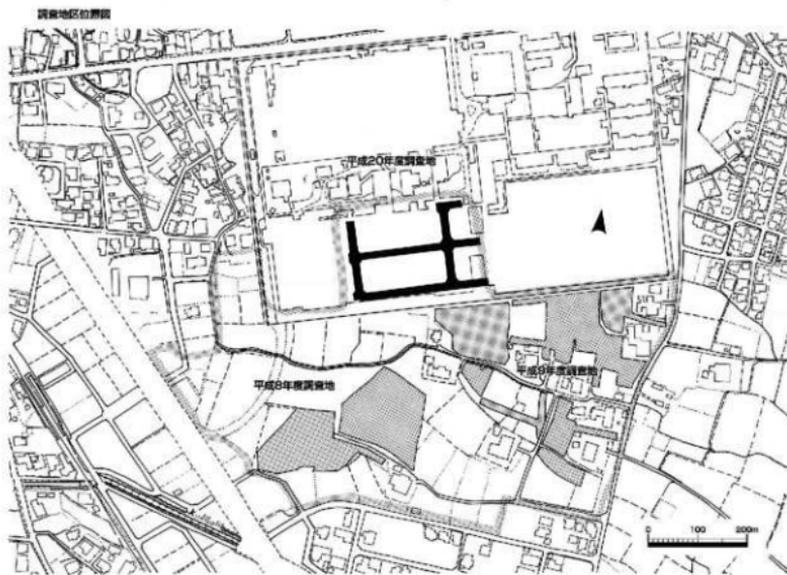
208	第1調査区	21	土師器	鉢ないし瓶	—	—	—	—	—	砂粒含	良	灰色	取っ手のみ	
209	第1調査区	21	須恵器	杯A	—	—	6.5	—	—	微白色粒若干含	良	明灰色	底部3/4	回転糸切り
210	第1調査区	21	土師器	小型壺	12.6	—	—	—	—	微砂粒含	良	明黄褐色	1/4	
211	第1調査区	21	土師器	長頸	16.0	—	—	—	—	微砂若干含	良	明黄灰色	口縁部～体部上位1/4	
212	第1調査区	21	須恵器	長頸	—	—	—	—	—	白色粒少量含	良	暗灰色	体部1/4	自然釉
213	第1調査区	21	土師器	壺	16.6	—	—	—	—	砂粒含	良	淡黄褐色	1/10	
214	第1調査区	21	土師器	長頸	18.0	—	—	—	—	微砂若干	普通	黄褐色	1/4	
215	第1調査区	21	土師器	長頸	22.0	—	—	—	—	微砂若干含	良	明黄褐色	口縁部1/7	煤付着
216	第1調査区	21	土師器	長頸	32.0	—	—	—	—	精良	良	黄褐色	1/8	
217	第1調査区	21	陶磁	筒	—	—	—	4.8	—	精良	良	灰褐色	底部2/3	灰釉 近世?
218	第1調査区	21	越中瀬戸	小皿	—	—	—	5.0	—	微砂少量含	良	黄灰色	1/3	灰釉 瀬戸内面に菊花文穴穿? 瓦葺
219	第2調査区	21	須恵器	壺	14.9	2.9	—	—	—	砂粒少量含	良	明灰褐色	5/8	天井部内面へう記号「x」
220	第2調査区	21	須恵器	壺	15.7	2.9	—	—	—	微砂含	良	明灰色	1/3	
221	第2調査区	21	須恵器	壺	14.4	3.4	—	—	—	微砂含	普通	明灰色	口縁部一部	
222	第2調査区	21	須恵器	壺	16.0	2.8	—	—	—	微砂含	良	黄灰色	2/3	
223	第2調査区	21	須恵器	壺	15.0	3.6	—	—	—	砂粒含	良	明灰褐色	1/2弱	
224	第2調査区	21	須恵器	壺	16.0	—	—	—	—	微砂若干含	普通	明灰褐色	口縁部破片	
225	第2調査区	21	須恵器	壺	15.8	4.9	—	—	—	微砂少量含	普通	灰褐色	1/2弱	天井部外面へう記号「-」
226	第2調査区	21	須恵器	壺	16.1	4.0	—	—	—	微砂含	普通	灰色	1/3	
227	第2調査区	21	須恵器	壺	17.8	—	—	—	—	微砂含	良	灰色	1/8	
228	第2調査区	21	須恵器	壺	12.4	—	—	—	—	白色粒含	良	明灰色	1/2弱	
229	第2調査区	21	須恵器	壺	11.8	—	—	—	—	微砂含	良	灰色	1/6	
230	第2調査区	21	須恵器	壺	12.6	—	—	—	—	微砂若干含	普通	明黄灰色	1/4	
231	第2調査区	21	須恵器	壺	13.4	—	—	—	—	微砂若干含	良	黄灰色	口縁部～天井部1/7	
232	第2調査区	21	須恵器	壺	12.0	—	—	—	—	微砂少量含	良	灰褐色	1/3	
233	第2調査区	21	須恵器	壺	11.5	2.7	—	—	—	微砂若干含	良	灰色	1/5	
234	第2調査区	21	須恵器	壺	12.2	2.7	—	—	—	微砂含	普通	灰褐色	1/2弱	
235	第2調査区	21	須恵器	壺	12.4	2.9	—	—	—	白色粒若干含	普通	明灰褐色	体部1/4～口縁一部	
236	第2調査区	21	須恵器	壺	13.0	2.1	—	—	—	白色粒若干含	普通	明灰褐色	口縁部一部	天井部内面へう記号「x」
237	第2調査区	21	須恵器	壺	16.4	—	—	—	—	微砂若干含	良	黄灰色	口縁部1/6	
238	第2調査区	21	須恵器	壺	12.0	—	—	—	—	微砂含	良	灰色	口縁部～天井部1/3	
239	第2調査区	21	須恵器	壺	11.6	—	—	—	—	微砂含	良	暗灰色	1/2	
240	第2調査区	21	須恵器	壺	11.8	—	—	—	—	白色粒少量含	良	黄灰色	1/8	
241	第2調査区	21	須恵器	壺	13.0	—	—	—	—	微砂少量含	良	明灰色	1/8	
242	第2調査区	21	須恵器	壺	13.0	—	—	—	—	微砂少量含	良	灰褐色	1/4	
243	第2調査区	21	須恵器	壺	—	—	—	—	—	微砂含	良	灰褐色	口縁部破片	
244	第2調査区	21	須恵器	杯B	—	—	—	10.3	—	微砂若干含	良	明灰褐色	高台～体部1/6	
245	第2調査区	21	須恵器	杯B	14.0	3.6	—	—	—	微砂若干含	良	灰褐色	1/4	煤付着
246	第2調査区	21	須恵器	杯B	—	—	—	9.8	—	微砂少量含	良	黄灰色	高台1/4	
247	第2調査区	21	須恵器	杯B	—	—	—	7.5	—	微砂少量含	良	黄灰色	高台のみ	
248	第2調査区	21	須恵器	杯A	—	—	—	8.6	—	白色粒少量含	良	黄灰色	高台1/4	
249	第2調査区	21	須恵器	杯B	—	—	—	8.8	—	微砂含	良	灰茶褐色	底部1/3	自然釉
250	第2調査区	21	土師器	鉢	—	—	—	8.0	—	白色粒少量含	不良	明黄褐色	底部1/2弱	
251	第2調査区	21	須恵器	杯B	10.4	4.2	—	—	—	微砂少量含	良	明灰色	ほぼ完形	底部外面へう記号「=」
252	第2調査区	21	須恵器	杯B	12.1	4.3	—	—	—	微砂含	良	黄灰色	1/2弱	煤付着
253	第2調査区	21	須恵器	杯B	—	—	—	9.9	—	白色粒含	普通	淡黄灰色	底部1/3	
254	第2調査区	21	須恵器	杯B	—	—	—	8.3	—	微砂若干含	良	灰褐色	高台1/4	煤付着
255	第2調査区	21	須恵器	壺	—	—	—	10.2	—	白色粒含	普通	明灰色	底部1/2	
256	第2調査区	21	土師器	鉢	30.0	—	—	—	—	微砂若干含	不良	淡黄灰色	口縁部～体部上位1/8	
257	第2調査区	21	須恵器	鉢	—	—	—	—	—	微砂少量含	不良	淡黄灰色	口縁部	
258	第2調査区	21	須恵器	杯A	12.0	—	—	—	—	微砂若干含	不良	灰白色	1/8	
259	第2調査区	22	須恵器	杯A	13.1	3.7	9.1	—	—	砂粒含	普通	淡黄灰色	口縁部～体部2/3	
260	第2調査区	22	須恵器	杯A	13.0	—	—	—	—	砂粒少量含	良	灰茶褐色	1/8	
261	第2調査区	22	須恵器	杯A	15.0	—	—	—	—	精良	良	灰色	口縁部～体部1/6	
262	第2調査区	22	須恵器	杯A	10.6	3.2	7.3	—	—	白色粒含	普通	淡黄褐色	2/3	
263	第2調査区	22	須恵器	杯A	11.4	3.0	8.0	—	—	微砂若干含	良	明褐色	1/3	
264	第2調査区	22	須恵器	杯A	11.6	3.1	8.1	—	—	微砂少量含	不良	明黄灰色	2/3	
265	第2調査区	22	須恵器	杯A	13.0	3.2	6.8	—	—	白色粒含	普通	灰褐色	1/5	
266	第2調査区	22	須恵器	杯A	12.6	3.7	7.0	—	—	微砂若干含	普通	淡黄灰色	2/3	煤付着
267	第2調査区	22	土師器	杯A	—	—	—	4.8	—	砂粒少量含	普通	明黄褐色	底部のみ	
268	第2調査区	22	土師器	杯A	—	—	—	5.9	—	微砂少量含	良	淡黄褐色	底部1/2弱	赤彩
269	第2調査区	22	土師器	杯A	—	—	—	5.6	—	砂粒少量含	良	明黄褐色	底部1/2弱	赤彩 回転糸切り
270	第2調査区	22	土師器	杯	—	—	—	—	—	砂粒少量含	良	明黄褐色	体部破片	赤彩 底部外面に黒彩「大」?
271	第2調査区	22	土師器	中型壺	16.2	—	—	—	—	微砂若干含	良	茶褐色	口縁部～体部中位1/6	煤付着
272	第2調査区	22	土師器	中型壺	17.9	—	—	—	—	微砂若干含	良	茶褐色	口縁部～体部中位1/4	
273	第2調査区	22	土師器	長頸	19.8	—	—	—	—	微砂含	普通	明黄褐色	口縁部1/7	
274	第2調査区	22	土師器	長頸	—	—	—	—	—	砂粒含	不良	明黄褐色	口縁部破片	
275	第2調査区	22	土師器	小型壺	—	—	—	—	—	微砂少量含	良	明茶褐色	口縁部～体部中位破片	煤付着
276	第2調査区	22	土師器	長頸	—	—	—	—	—	微砂少量含	不良	明黄褐色	口縁部破片	

277	第2調査区	22	土師器	長甕	23.0	--	--	--	微砂若干含	普通	淡黄茶色	1/7	
278	第2調査区	22	土師器	長甕	22.0	--	--	--	砂粒少量含	普通	明黄茶色	口縁部付近1/6	
279	第2調査区	22	土師器	長甕	19.8	--	--	--	0.5~2.0mm白色粒少量含	普通	明黄褐色	口縁部一腰部上位1/6	煤付着
280	第2調査区	22	土師器	長甕	26.0	--	--	--	微一砂粒少量	良	灰褐色	口縁部一腰部上位1/5	煤付着
281	第2調査区	22	土師器	鉢	--	--	--	--	砂粒含	良	明黄茶色	体部破片	
282	第2調査区	22	土師器	鉢	35.0	--	--	--	砂粒含	良	明黄灰色	口縁部	煤付着
283	第2調査区	22	土師器	鉢	35.0	--	--	--	精良	普通	明黄茶色	口縁部一腰部上位1/6	
284	第2調査区	22	土師器	小型甕	--	--	6.8	--	微砂若干含	良	明黄褐色	底部劣形一腰部中位1/3	面染糸切
285	第2調査区	22	須恵器	杯	11.8	2.8	7.0	--	白色粒少量含	良	灰色	1/4	
286	第3調査区	22	須恵器	甕	15.5	--	--	--	砂粒含	不良	灰色	1/6	
287	第3調査区	22	須恵器	甕	13.4	--	--	--	微砂少量含	不良	灰褐色	1/6	
288	第3調査区	22	須恵器	甕	14.1	--	--	--	微砂若干含	良	青灰色	1/6	
289	第3調査区	22	須恵器	甕	17.0	--	--	--	白色粒少量含	良	灰色	1/6	内面面に墨書「x」
290	第3調査区	22	須恵器	甕	16.4	3.3	--	--	砂粒少量混	良	灰褐色	1/3	
291	第3調査区	22	須恵器	甕	15.0	--	--	--	微砂若干	良	明黄灰色	1/3	
292	第3調査区	22	須恵器	甕	15.6	--	--	--	精良	良	灰褐色	1/4	
293	第3調査区	22	須恵器	甕	12.2	--	--	--	白色粒少量含	良	灰色	1/2弱	
294	第3調査区	22	須恵器	甕	--	--	--	--	微砂含	良	灰褐色	天井部2/3	
295	第3調査区	22	須恵器	甕	--	--	--	--	微砂若干含	良	青灰色	天井部1/3	
296	第3調査区	22	須恵器	杯A	13.7	3.7	10.3	--	微砂含	普通	茶褐色	1/4	
297	第3調査区	22	須恵器	杯A	13.2	3.4	10.2	--	精良	不良	明灰褐色	1/4	
298	第3調査区	22	須恵器	杯A	11.6	3.4	8.2	--	微砂少量含	良	灰色	1/3	
299	第3調査区	22	須恵器	杯A	12.6	--	--	--	微砂少量含	不良	淡黄灰色	破片	
300	第3調査区	22	須恵器	杯A	12.2	4.0	10.6	--	微砂少量含	不良	淡黄灰色	2/3	
301	第3調査区	22	須恵器	杯A	--	--	9.1	--	微砂少量含	不良	淡黄灰色	底部1/2	
302	第3調査区	22	須恵器	杯B	11.4	4.0	--	7.7	微砂粒含	良	灰褐色	1/6	
303	第3調査区	22	須恵器	杯B	10.0	3.6	--	6.0	精良	良	明灰褐色	1/3	
304	第3調査区	22	須恵器	杯B	13.2	3.9	--	9.9	微砂若干含	普通	淡黄褐色	1/6	
305	第3調査区	22	須恵器	杯B	14.4	3.7	--	9.8	微砂含	良	灰褐色	1/3	
306	第3調査区	23	須恵器	杯B	--	--	--	8.3	微砂少量含	良	灰褐色	底部のみ	
307	第3調査区	23	須恵器	杯B	--	--	--	9.4	微砂粒含	普通	黄灰褐色	1/3	
308	第3調査区	23	須恵器	杯B	14.5	4.3	--	9.8	微砂含	良	黄灰色	1/6	
309	第3調査区	23	須恵器	杯B	14.0	4.2	--	8.0	微砂含	良	灰色	1/4	内面底部へら刻字「x」
310	第3調査区	23	須恵器	甕	22.2	--	--	--	微砂少量含	良	灰褐色	1/6	
311	第3調査区	23	須恵器	横瓶	--	--	--	--	精良	良	明灰褐色	1/6以下	内面に虫具痕
312	第3調査区	23	土師器	小型甕	13.2	--	--	--	微砂含	普通	淡茶褐色	1/4	煤付着
313	第3調査区	23	土師器	小型甕	12.9	--	--	--	微砂少量含	普通	淡茶褐色	1/4	煤付着
314	第3調査区	23	土師器	小型甕	--	--	--	--	砂粒含	普通	淡茶褐色	口縁部付近破片	
315	第3調査区	23	土師器	取手付鉢	9.8	--	--	--	砂粒少量含	良	黄褐色	1/3	
316	第3調査区	23	土師器	取手付鉢	--	--	--	--	精良	良	明黄褐色	1/4	
317	第3調査区	23	土師器	長甕	23.4	--	--	--	微砂若干含	良	青赤褐色	1/4	
318	第3調査区	23	土師器	長甕	22.8	--	--	--	微砂若干含	良	黄褐色	1/3	
319	第3調査区	23	土師器	長甕	26.2	--	--	--	微砂若干含	良	明黄褐色	1/6	
320	第3調査区	23	土師器	鉢	32.2	--	--	--	微砂粒若干含	良	明黄褐色	1/6	
321	第3調査区	23	土師器	甕	--	--	--	--	微砂若干含	良	茶褐色	1/4	
322	第3調査区	23	土師器	鉢	35.8	--	--	--	砂粒若干含	良	明黄褐色	1/6	
323	第4調査区	23	須恵器	甕	10.8	2.1	--	--	砂粒含	普通	灰褐色	1/4	
324	第4調査区	23	須恵器	甕	10.4	--	--	--	砂粒少量含	良	灰褐色	1/4	
325	第4調査区	23	須恵器	甕	11.9	3.1	--	--	微砂少量含	良	灰褐色	2/3	
326	第4調査区	23	須恵器	甕	11.2	2.7	--	--	微砂含	良	青灰色	1/4	
327	第4調査区	23	須恵器	甕	11.8	2.7	--	--	白色粒少量含	良	灰褐色	1/4	
328	第4調査区	23	須恵器	甕	15.0	--	--	--	砂粒含	普通	灰褐色	1/6	
329	第4調査区	23	須恵器	甕	14.3	--	--	--	砂粒含	普通	灰褐色	口縁部1/7	灰かぶり
330	第4調査区	23	須恵器	甕	15.8	--	--	--	砂粒含	良	灰褐色	1/6	
331	第4調査区	23	須恵器	甕	15.2	--	--	--	精良	良	淡灰茶褐色	1/6	
332	第4調査区	23	須恵器	甕	14.0	--	--	--	微砂若干含	良	灰褐色	1/6	
333	第4調査区	23	須恵器	甕	12.0	--	--	--	微砂少量含	良	灰褐色	1/5	自然釉
334	第4調査区	23	須恵器	甕	14.6	--	--	--	精良	良	明黄灰色	1/4	
335	第4調査区	23	須恵器	甕	13.6	--	--	--	微砂少量含	普通	灰褐色	1/7	体部外面に墨痕
336	第4調査区	24	須恵器	甕	--	--	--	--	白色粒少量含	普通	灰褐色	1/6 口縁部欠損	
337	第4調査区	24	須恵器	甕	15.2	2.7	--	--	砂粒多く含	良	灰褐色	1/6	
338	第4調査区	24	須恵器	甕	17.2	--	--	--	微砂若干含	不良	淡黄灰色	1/4	
339	第4調査区	24	須恵器	甕	18.0	--	--	--	微砂少量含	不良	淡黄灰色	破片	
340	第4調査区	24	須恵器	杯A	13.0	2.4	9.2	--	微砂少量含	不良	黄灰色	1/3	粘土結核
341	第4調査区	24	須恵器	杯A	12.7	3.3	10.8	--	微砂若干含	不良	淡黄灰色	1/2弱	煤付着
342	第4調査区	24	須恵器	杯A	12.8	3.8	8.8	--	砂粒含	不良	黄灰色	底部1/2~口縁部1/4	
343	第4調査区	24	須恵器	杯A	12.9	2.6	10.0	--	微砂含	良	灰色	1/4	
344	第4調査区	24	須恵器	杯A	11.8	3.2	8.8	--	微砂少量含	良	灰褐色	1/3	
345	第4調査区	24	須恵器	杯A	12.0	3.0	9.8	--	微砂少量含	良	灰褐色	1/6	
346	第4調査区	24	須恵器	杯A	--	--	7.4	--	微細~3.0mmの砂粒混	普通	明黄褐色	底部1/2	底部外面に墨書「aa」



416	第8調査区	23	土壌層	小断面	12.3	--	--	--	砂粒少量含	不良	淡赤褐色	口縁部～体部中位1/7		
417	第8調査区	25	土壌層	長ないし偏	--	--	--	--	砂粒含	普通	淡黄褐色	口縁部破片		
418	第8調査区	25	土壌層	甚しい偏	20.0	--	--	--	砂粒若干含	普通	淡黄褐色	口縁部1/6		
419	第7調査区	25	湧き部	蓋	12.3	2.6	--	--	白色粒少量含	良	灰褐色	1/4		
420	第7調査区	25	湧き部	蓋	14.8	2.8	--	--	微砂若干含	普通	明灰色	1/4		
421	第7調査区	25	湧き部	蓋	14.0	3.6	--	--	微白色粒少量含	良	灰褐色	1/6		
422	第7調査区	25	湧き部	蓋	15.0	--	--	--	微白色粒若干含	良	青灰色	1/6		
423	第7調査区	25	湧き部	杯A	11.4	--	--	--	微砂含	良	暗青灰色	1/8		
424	第7調査区	25	湧き部	杯A	11.8	3.0	6.0	--	砂粒若干含	普通	明灰褐色	1/2		
425	第7調査区	25	湧き部	杯A	12.0	3.2	9.3	--	砂粒若干含	普通	灰白色	1/2		
426	第7調査区	25	湧き部	杯B	--	--	--	7.4	白色粒少量含	良	暗緑灰色	底部1/2		
427	第7調査区	25	湧き部	杯B	--	--	--	8.0	精炭	良	暗青灰色	1/8		
428	第7調査区	25	湧き部	杯B	--	--	--	9.0	微砂若干含	良	明灰褐色	底部～体部1/3	内面環らから使用痕あり	
429	第7調査区	25	湧き部	杯B	--	--	--	6.8	微砂少量含	良	明灰褐色	底部完形	ひずみ著しい	
430	第7調査区	25	湧き部	杯B	--	--	--	8.8	微砂少量含	不良	淡黄灰色	底部～体部下位1/4		
431	第7調査区	25	湧き部	広口蓋	22.0	--	--	--	微砂含	良	暗緑灰色	口縁部破片		
432	第7調査区	25	土師器	杯A	12.9	3.9	5.0	--	精炭	普通	赤褐色	2/3		
433	第7調査区	25	土師器	杯A	13.8	--	5.6	--	微砂少量含	不良	淡褐色	底部完形～口縁部一部		
434	第7調査区	25	土師器	杯A	12.4	3.9	5.0	--	精炭	普通	淡赤褐色	2/3	外底面に蓋裏「口」不明	
435	第7調査区	26	土師器	杯A	12.2	3.4	6.0	--	微砂少量含	普通	淡赤褐色	体部1/5		
436	第7調査区	26	土師器	杯A	13.4	--	--	--	砂粒含	不良	淡茶灰色	口縁部1/7		
437	第7調査区	26	土師器	杯A	--	--	6.0	--	砂粒含	普通	淡褐色	底部1/2	回転糸切り	
438	第7調査区	26	土師器	杯A	--	--	5.6	--	砂粒少量含	不良	淡褐色	底部1/2		
439	第7調査区	26	土師器	杯A	--	--	5.0	--	微砂若干含	普通	淡褐色	底部1/4		
440	第7調査区	26	土師器	杯A	--	--	6.0	--	砂粒少量含	普通	淡赤褐色	底部1/3	回転糸切り	
441	第7調査区	26	土師器	杯A	--	--	6.2	--	微砂若干含	普通	淡褐色	底部1/7	回転糸切り	
442	第7調査区	26	土師器	小型瓿	13.8	--	--	--	微砂少量含	不良	淡赤褐色	口縁部～体部上位1/6		
443	第7調査区	26	土師器	小型瓿	12.8	--	--	--	精炭	良	淡黄褐色	口縁部～体部上位1/6	僅付着	
444	第7調査区	26	土師器	小型瓿	11.3	--	--	--	砂粒少量含	普通	淡赤褐色	口縁部1/5		
445	第7調査区	26	土師器	小型瓿	12.8	--	--	--	微砂少量含	普通	淡赤褐色	口縁部～体部上位1/6		
446	第7調査区	26	土師器	小型瓿	12.8	--	--	--	微砂若干含	普通	淡黄褐色	口縁部1/6		
447	第7調査区	26	土師器	小型瓿	--	--	--	--	砂粒少量含	不良	淡黄褐色	口縁部破片		
448	第7調査区	26	土師器	小型瓿	--	--	--	--	微砂少量含	普通	暗赤灰色	口縁部破片		
449	第7調査区	26	土師器	小型瓿	--	--	--	--	微砂少量含	普通	淡褐色	口縁部破片		
450	第7調査区	26	土師器	長瓿	23.4	--	--	--	微砂若干含	普通	淡黄褐色	口縁部～体部上位1/3	僅付着	
451	第7調査区	26	土師器	長瓿	23.3	--	--	--	微砂若干含	普通	淡赤褐色	口縁部～体部上位1/4	僅付着	
452	第7調査区	26	土師器	小型瓿	--	--	7.4	--	微砂少量含	普通	淡赤褐色	底部1/5	回転糸切り	
453	その他	26	湧き部	蓋	15.0	--	--	--	精炭	良	暗青灰色	1/4		
454	その他	26	湧き部	蓋	17.2	--	--	--	白色粒含	良	青灰色	1/5		
455	その他	26	湧き部	蓋	14.4	2.5	--	--	白色粒少量含	良	灰色	1/3		
456	その他	26	湧き部	蓋	12.2	3.4	--	--	砂粒少量含	不良	淡黄褐色	1/3		
457	その他	26	湧き部	蓋	12.4	--	--	--	砂粒若干含	良	明黄褐色	1/6		
458	その他	26	湧き部	蓋	12.8	--	--	--	微砂含	良	暗灰褐色	1/7		
459	その他	26	湧き部	蓋	--	--	--	--	精炭	良	明灰褐色	天井部のみ		
460	その他	26	湧き部	蓋	--	--	--	--	白色粒少量含	良	灰褐色	天井部1/3		
461	その他	26	湧き部	杯A	11.0	3.3	6.0	--	微砂含	普通	灰白色	1/5		
462	その他	26	湧き部	杯A	11.4	3.4	--	--	微砂若干含	良	明灰褐色	1/2		
463	その他	26	湧き部	杯A	11.8	3.3	--	--	白色粒若干含	普通	明灰褐色	ほぼ完形		
464	その他	26	湧き部	杯A	13.0	3.7	--	--	微細粒少量含	良	灰褐色	1/2		
465	その他	26	湧き部	杯A	12.8	3.4	--	--	微砂若干含	良	明灰色	底部～口縁部1/3	底部外面へ「記号」×	
466	その他	26	湧き部	杯A	10.8	3.0	6.2	--	精炭	良	暗灰色	1/8		
467	その他	26	湧き部	杯A	18.8	--	--	--	砂粒少量含	良	暗褐色	口縁部～体部中位1/6		
468	その他	26	湧き部	杯A	11.5	4.0	6.5	--	砂粒若干含	良	明黄褐色	口縁部～体部1/8	底部外面に蓋裏「O」 内外面記号あり	
469	その他	26	湧き部	杯B	17.2	4.2	--	--	白砂粒含	良	灰褐色	1/4		
470	その他	26	湧き部	杯B	--	--	--	12.9	微白色粒少量含	良	青灰色	蓋合付近1/4		
471	その他	26	湧き部	杯B	--	--	--	10.0	精炭	良	灰褐色	1/3		
472	その他	26	湧き部	杯B	14.2	4.4	--	--	微砂少量含	普通	暗青灰色	1/4		
473	その他	26	湧き部	杯B	--	--	--	11.4	砂粒若干含	不良	灰白色	蓋合1/4		
474	その他	26	湧き部	杯B	--	--	--	10.0	微白色粒少量含	普通	明青灰色	蓋合付近1/2		
475	その他	26	湧き部	杯B	--	--	--	9.4	微砂少量含	良	灰褐色	1/4		
476	その他	26	湧き部	杯B	11.2	3.8	--	--	7.2	白色粒若干含	良	黄灰色	1/2輪	底部外面へ「記号」-
477	その他	26	湧き部	広口蓋	--	--	--	--	精炭	良	明灰色	1/2	外面蓋縁 内外面記号あり	
478	その他	26	土師器	小型瓿	13.8	--	--	--	微砂含	良	明黄褐色	1/4		
479	その他	26	陶器	瓶	--	--	--	4.8	微砂若干含	良	淡黄色	蓋合部1/2輪	灰粒	
480	その他	26	土師器	杯A	--	--	6.0	--	微砂若干含	良	褐色	底部1/4	底部外面に蓋裏「口」不明	
481	その他	26	土師器	小型瓿	13.0	--	--	--	砂粒含	普通	暗褐色	口縁部付近1/4	僅付着	
482	その他	26	土師器	小型瓿	13.0	--	--	--	微砂少量含	普通	淡赤褐色	口縁部1/6		
483	その他	26	土師器	小型瓿	11.4	--	--	--	微砂少量含	普通	淡茶黄色	1/4		
484	その他	27	土師器	瓶	--	--	--	--	砂粒含	良	明赤褐色	取っ手のみ		

485	その他	27	土師器	長壺	-	-	-	-	砂粒若干金	普通	明黄褐色	口縁部破片	
486	その他	27	土師器	長壺	13.3	3.4	-	-	白色粒若干金	普通	明灰褐色	ほぼ完整	
487	その他	27	土師器	長壺	25.0	-	-	-	微砂若干金	良	明黄褐色	口縁部~体部上位	
488	その他	27	土師器	長壺	22.4	-	-	-	微砂少量金	良	明黄褐色	1/6	塚付着
489	その他	27	土師器	罎	36.4	-	-	-	砂粒金	普通	淡黄色	口縁部1/8	
490	試器	27	須恵器	壺	-	-	-	-	砂粒混	良	灰色	天井部破片	
491	試器	27	須恵器	壺	14.5	-	-	-	数種~1.0mmの砂粒若干金	良	黄灰色	破片	
492	試器	27	須恵器	壺	16.9	-	-	-	白色粒混	良	灰色	1/8	
493	試器	27	須恵器	壺	16.0	-	-	-	微細粒混	良	灰色	破片	
494	試器	27	須恵器	壺	14.7	-	-	-	微白色粒混	良	灰色	1/6	
495	試器	27	須恵器	壺	14.2	-	-	-	数種~3.0mmの砂粒多く混	良	黄灰色	1/6	
496	試器	27	須恵器	壺	14.4	-	-	-	微白色粒多く混	良	灰色	破片	
497	試器	27	須恵器	壺	11.8	-	-	-	白色粒多く混	良	黄灰色	1/6	
498	試器	27	土師器	杯A	12.0	-	-	-	微砂粒混	良	褐色	破片	
499	試器	27	土師器	杯A	11.4	-	-	-	砂粒若干金	良	褐色	破片	
500	試器	27	土師器	杯A	12.4	-	-	-	砂粒若干金	良	黄褐色	破片	
501	試器	27	土師器	杯A	11.9	-	-	-	数種~1.5mmの砂粒混	良	黄褐色	破片	
502	試器	27	土師器	杯A	14.7	-	-	-	微砂粒若干金	良	褐色	破片	
503	試器	27	土師器	杯A	13.7	-	-	-	砂粒少量金	良	褐色	破片	
504	試器	27	土師器	杯A	15.2	-	-	-	微砂粒混	良	にぶい褐色	破片	
505	試器	27	須恵器	杯A	10.6	3.1	6.2	-	数種粒混	普通	灰黄色	1/4	
506	試器	27	須恵器	杯A	12.0	3.1	8.0	-	数種~2.0mmの砂粒若干金	不良	灰白色	口縁部~底部1/4	
507	試器	27	須恵器	杯A	12.0	2.7	6.6	-	数種~1.5mmの砂粒混	良	灰黄色	1/6	
508	試器	27	須恵器	杯A	12.4	3.5	6.9	-	砂粒混	良	黄灰色	底部完形~1/6	
509	試器	27	須恵器	杯A	-	-	6.8	-	白色粒若干金	良	灰色	底部7/12	
510	試器	27	須恵器	杯	12.4	-	-	-	白色粒若干金	良	灰色	破片	
511	試器	27	須恵器	杯	12.0	-	-	-	数種~2.0mmの砂粒若干金	良	灰白色	破片	
512	試器	27	須恵器	杯	13.7	-	-	-	数種粒多く混	良	灰色	破片	
513	試器	27	須恵器	杯	14.2	-	-	-	微白色粒混	良	灰白色	破片	
514	試器	27	須恵器	杯	11.8	-	-	-	数種粒多く混	良	黄灰色	破片	
515	試器	27	須恵器	杯	13.2	-	-	-	数種~2.0mmの砂粒混	良	灰色	破片	
516	試器	27	須恵器	杯	14.0	-	-	-	数種~2.0mmの砂粒混	良	灰色	破片	自然粘
517	試器	27	須恵器	杯	15.7	-	-	-	微白色粒混	良	黄灰色	破片	
518	試器	27	須恵器	杯	15.5	-	-	-	砂粒多く混	良	黄褐色	破片	
519	試器	27	須恵器	杯B	-	-	5.8	-	数種~4.0mmの砂粒混	良	灰白色	1/6	
520	試器	27	須恵器	杯B	-	-	7.1	-	砂粒混	良	灰色	1/6	
521	試器	27	須恵器	杯B	-	-	8.8	-	砂粒混	良	黄黄色	1/4	
522	試器	27	須恵器	杯B	-	-	10.0	-	砂粒混	良	黄灰色	1/4	
523	試器	27	須恵器	壺	-	-	-	-	砂粒多く混	良	黄灰色	体部破片	広口壺ないし長頸壺
524	試器	27	須恵器	横瓶	-	-	-	-	数種~1.0mmの砂粒多く混	良	灰色	体部破片	
525	試器	27	土師器	杯	-	-	-	-	砂粒若干金	良	褐色	破片	
526	試器	27	土師器	杯	-	-	-	-	砂粒若干金	良	褐色	破片	
527	試器	27	土師器	杯A	-	-	5.0	-	微砂粒混	良	にぶい褐色	底部1/6	回転糸切り
528	試器	27	土師器	杯A	-	-	7.0	-	微砂粒混	良	にぶい黄褐色	破片	回転糸切り
529	試器	27	土師器	杯A	-	-	5.1	-	砂粒若干金	良	黄褐色	1/4	
530	試器	27	土師器	杯A	-	-	5.4	-	砂粒少量金	良	褐色	底部1/6	回転糸切り
531	試器	27	土師器	杯A	-	-	4.8	-	砂粒混	良	淡黄褐色	1/3	
532	試器	27	土師器	杯A	-	-	6.8	-	0.5~3.0mmの砂粒多く混	良	淡黄色	1/4	
533	試器	27	土師器	長壺	15.9	-	-	-	砂粒混	良	にぶい黄褐色	1/2體	
534	試器	27	土師器	長壺	19.3	-	-	-	0.5~2.0mmの砂粒混	良	にぶい黄褐色	1/4	
535	試器	28	土師器	甕	17.8	-	-	-	砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
536	試器	28	土師器	甕	17.7	-	-	-	砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
537	試器	28	土師器	甕	19.6	-	-	-	砂粒多く混	良	にぶい黄色	1/2	
538	試器	28	土師器	甕	21.8	-	-	-	0.5~3.0mmの砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
539	試器	28	土師器	甕	21.5	-	-	-	砂粒多く混	良	灰白色	破片	
540	試器	28	土師器	甕	19.6	-	-	-	砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
541	試器	28	土師器	甕	12.8	-	-	-	砂粒混	良	にぶい黄褐色	破片	塚付着
542	試器	28	土師器	甕	13.5	-	-	-	白色粒若干金	良	灰褐色	破片	
543	試器	28	土師器	甕	14.8	-	-	-	微砂粒多く混	良	褐色	破片	
544	試器	28	土師器	甕	17.0	-	-	-	微砂粒多く混	良	淡黄褐色	破片	
545	試器	28	土師器	甕	15.6	-	-	-	0.5~2.0mmの砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
546	試器	28	土師器	長壺	-	-	-	-	砂粒多く混	普通	にぶい黄褐色	1/2	
547	試器	28	土師器	甕	17.8	-	-	-	砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
548	試器	28	土師器	甕	17.8	-	-	-	砂粒多く混	良	にぶい黄褐色	破片	
549	試器	28	土師器	甕	38.6	-	-	-	数種~1.0mmの砂粒少量混	良	褐色	口縁部破片	
550	試器	28	土師器	甕	37.0	-	-	-	砂粒多く混	良	黄褐色	破片	塚付着
551	第4調査区	23	須恵器	壺	14.0	-	-	-	砂粒少量金	良	黄灰色	1/4	口縁部外面に赤錆(Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )の記号残存



第1調査区南側 (SDO1付近) ①



1. 2.57% 2.0% 黄褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層 (層上)
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層 (層上)
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
8. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
9. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
10. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
11. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
12. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
13. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
14. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
15. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
16. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
17. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
18. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
19. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
20. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
21. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
22. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第1調査区北②



1. 現代瓦葺
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層 (層上)
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層 (層上)
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層 (層上)
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
8. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
9. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
10. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層 (層上)

第2調査区西③



1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
8. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
9. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第2調査区東④



1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
8. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
9. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
10. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第3調査区東⑤



1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第3調査区西⑥



1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第4調査区北⑦



1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第5調査区⑧



1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
8. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
9. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
10. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第6調査区⑨



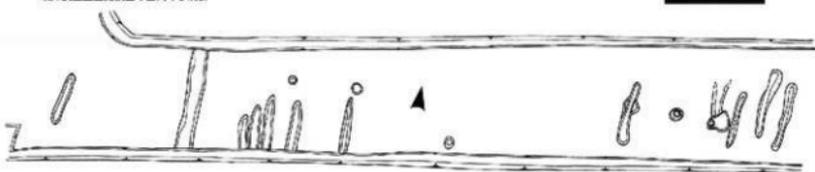
1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
6. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
7. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
8. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
9. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
10. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第7調査区東⑩

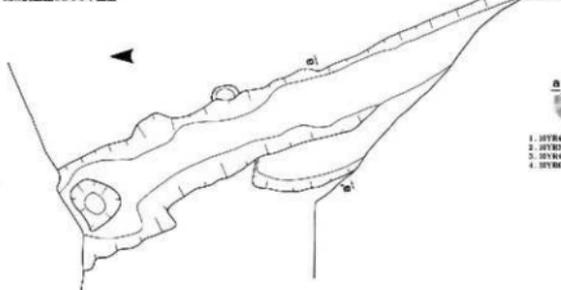


1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
5. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

第3調査区西側検出の古代の小溝群

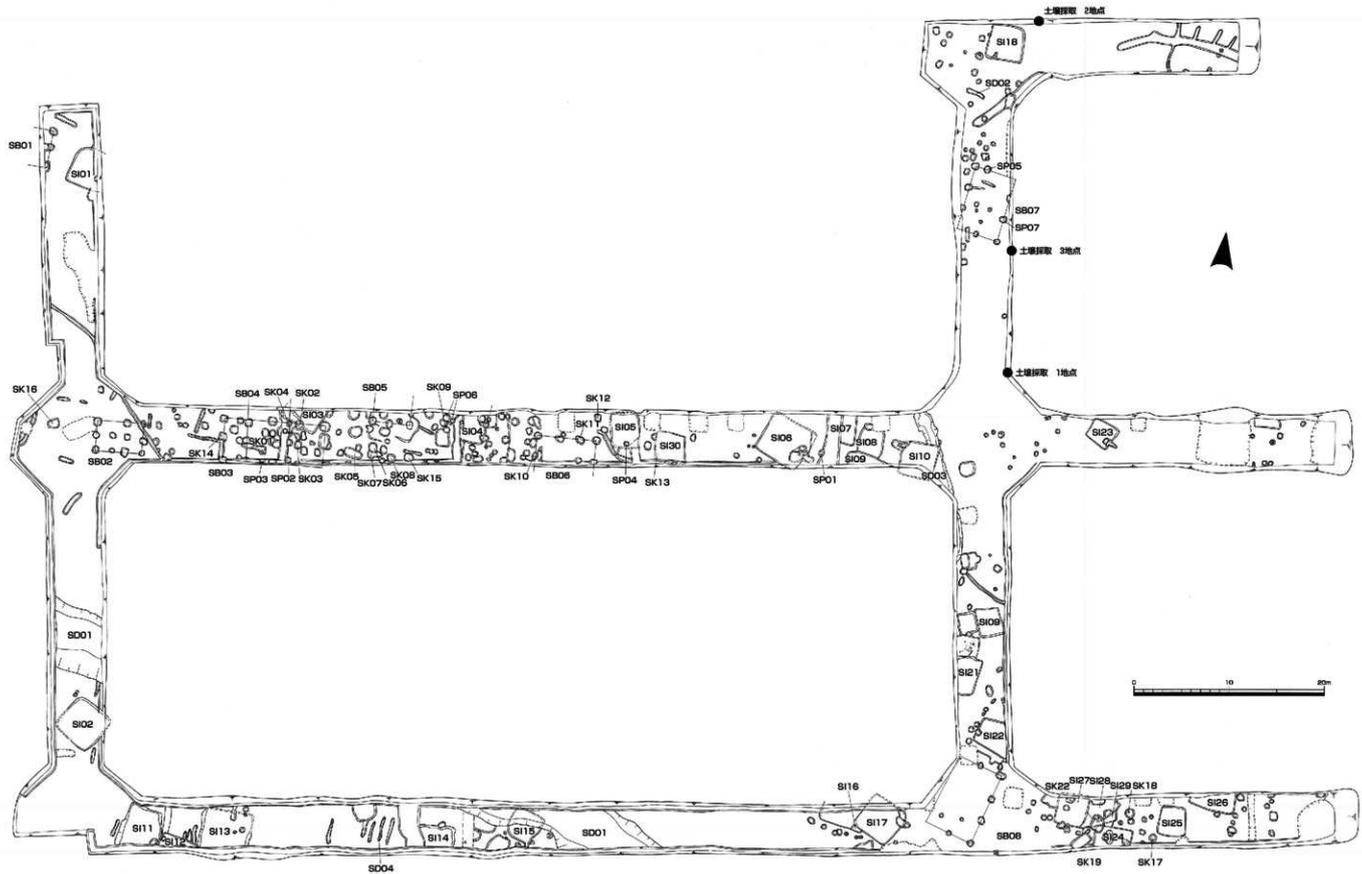


第2調査区SDO3平面図



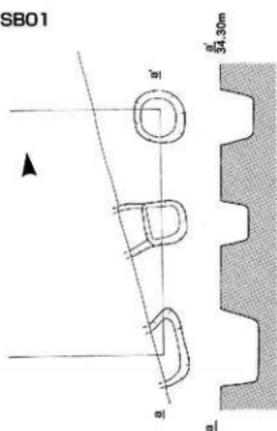
SDO3

1. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
2. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
3. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層
4. 2.57% 2.0% 赤褐色砂土層

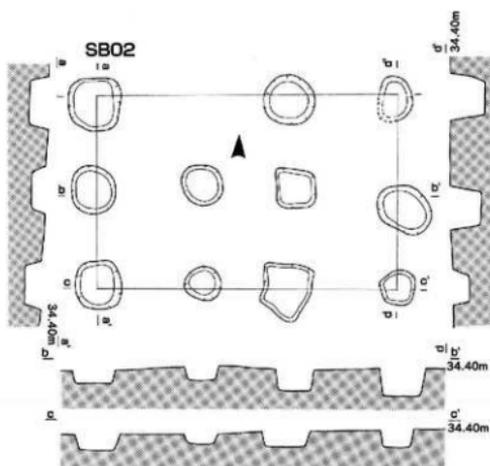


上新保遺跡 調査地全体図

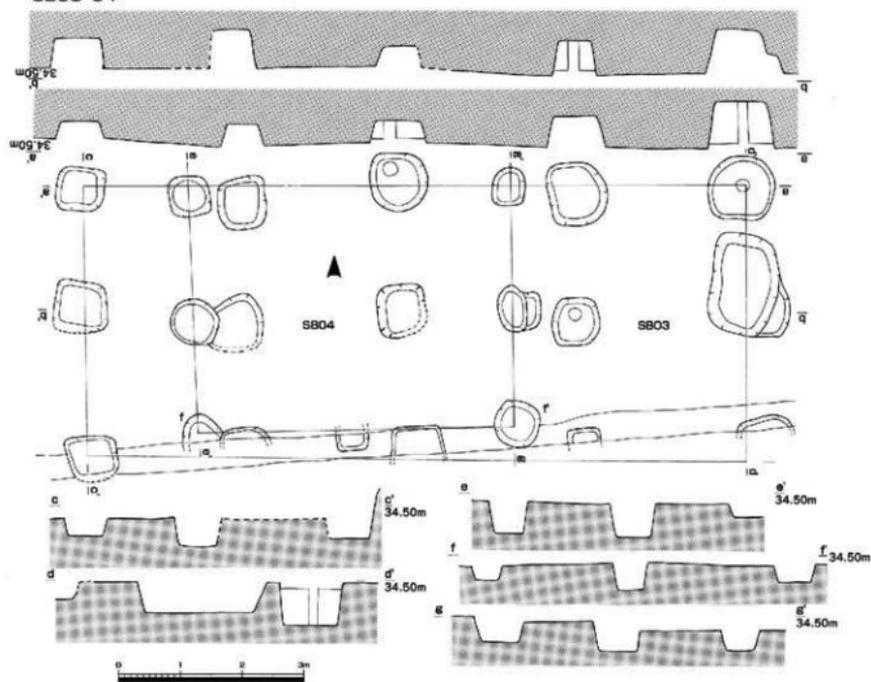
SB01

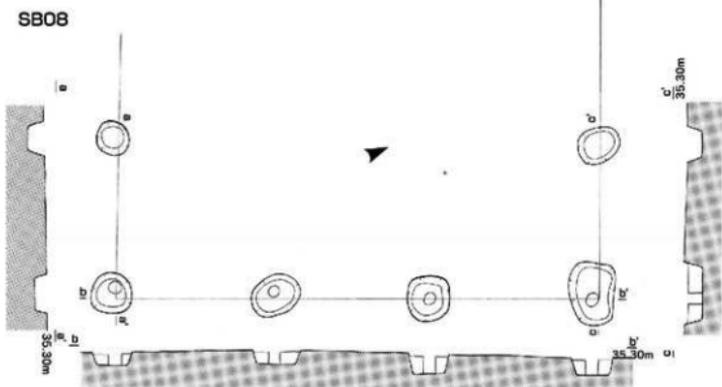
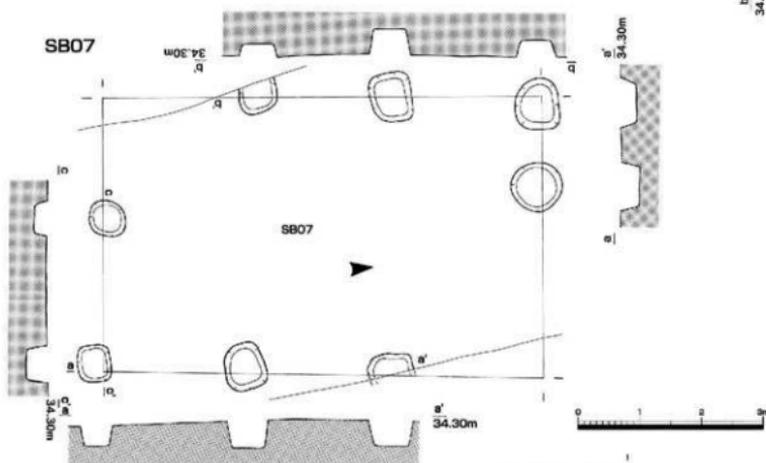
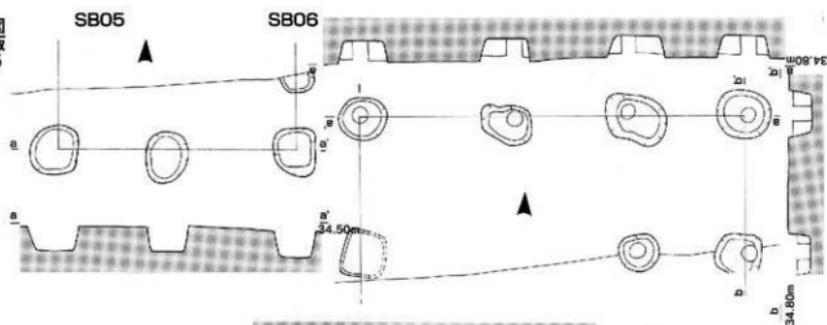


SB02



SB03-04





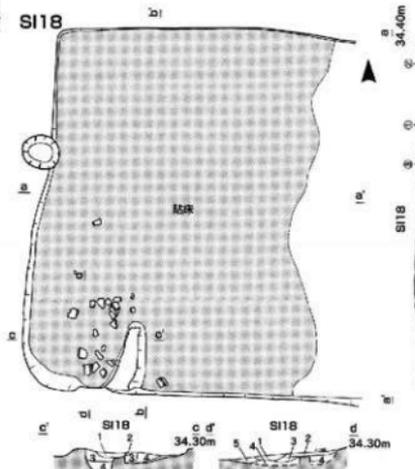










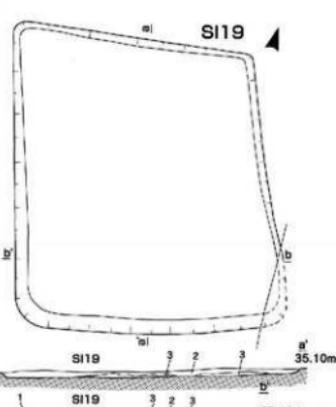


1. 1973年2月調査+2.1973年11月自由掘りによる60cm幅の溝跡 1層
2. 溝土 赤褐色土層
3. 溝土 赤褐色土層
4. 溝土 赤褐色土層
5. 2.5m幅の溝跡 溝土赤褐色土層

1. 1973年2月調査+2.1973年11月自由掘りによる60cm幅の溝跡 1層
2. 1973年11月調査+2.1973年11月自由掘りによる60cm幅の溝跡 1層
3. 1973年11月調査+溝土赤褐色土層 1層
4. 溝土 赤褐色土層
5. 溝跡跡の溝跡 溝土赤褐色土層

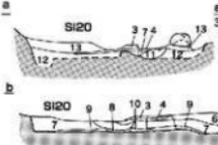
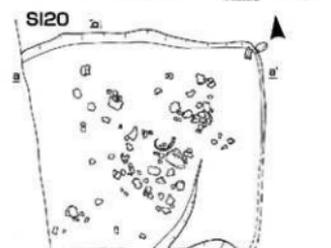


1. 1973年2月調査+2.1973年11月自由掘りによる60cm幅の溝跡 1層
2. 1973年11月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 1973年11月調査+溝土赤褐色土層 1層
4. 1973年11月調査+溝土赤褐色土層 1層
5. 1973年11月調査+溝土赤褐色土層 1層



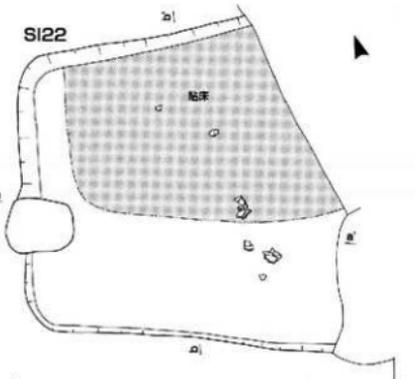
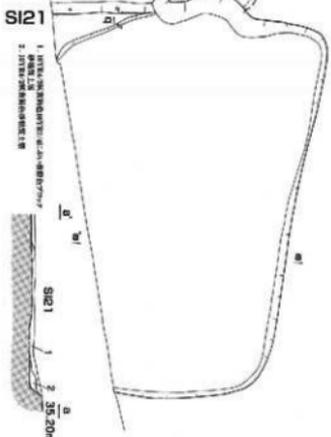
1. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
2. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層

1. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
2. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層



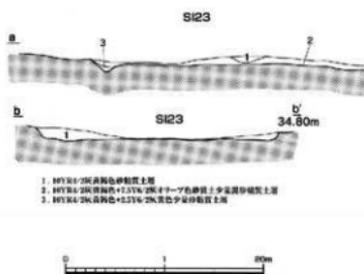
1. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
2. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 溝土 赤褐色土層
4. 溝土 赤褐色土層
5. 溝土 赤褐色土層
6. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
7. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
8. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
9. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
10. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
11. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
12. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層

1. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
2. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 溝土 赤褐色土層
4. 溝土 赤褐色土層
5. 溝土 赤褐色土層
6. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
7. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
8. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
9. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
10. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
11. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
12. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層

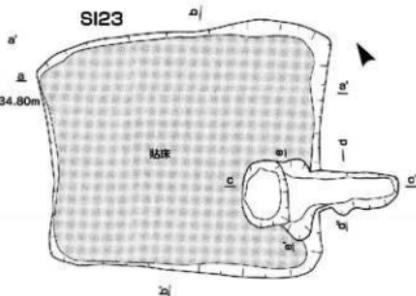


1. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
2. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
4. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
5. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
6. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層

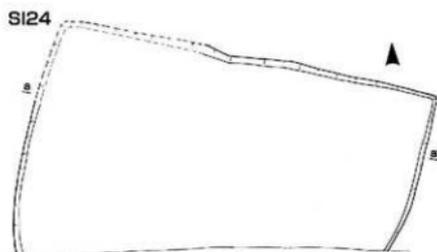
1. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
2. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
3. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
4. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
5. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層
6. 1973年2月調査+溝土赤褐色土層 1層



1. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
2. 18YR6/2R赤褐色+7.5YR/2R4-7P赤褐色+少量黒砂粘質土層
3. 18YR6/2R赤褐色+7.5YR/2R4-7P赤褐色+少量黒砂粘質土層



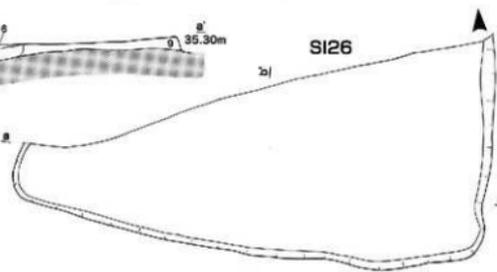
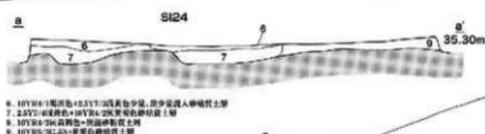
1. 18YR6/2R赤褐色+7.5YR/2R4-7P赤褐色+少量黒砂粘質土層
2. 赤土+少量黒砂粘質土層
3. 18YR6/2R赤褐色+7.5YR/2R4-7P赤褐色+少量黒砂粘質土層
4. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
5. 7.5YR/2R4-7P赤褐色+18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層



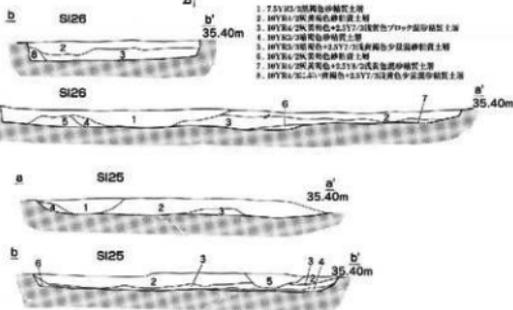
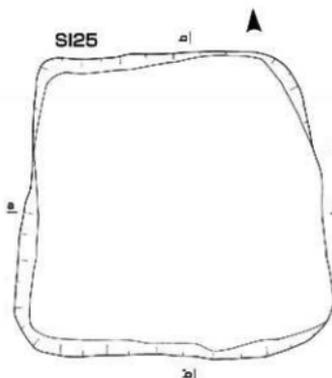
6. 10YR6/1黒褐色+2.5Y/2R5黄褐色少砂、少量黒砂粘質土層
7. 2.5Y/2R5黄褐色+18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
8. 18YR6/2R赤褐色+少量黒砂粘質土層
9. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層



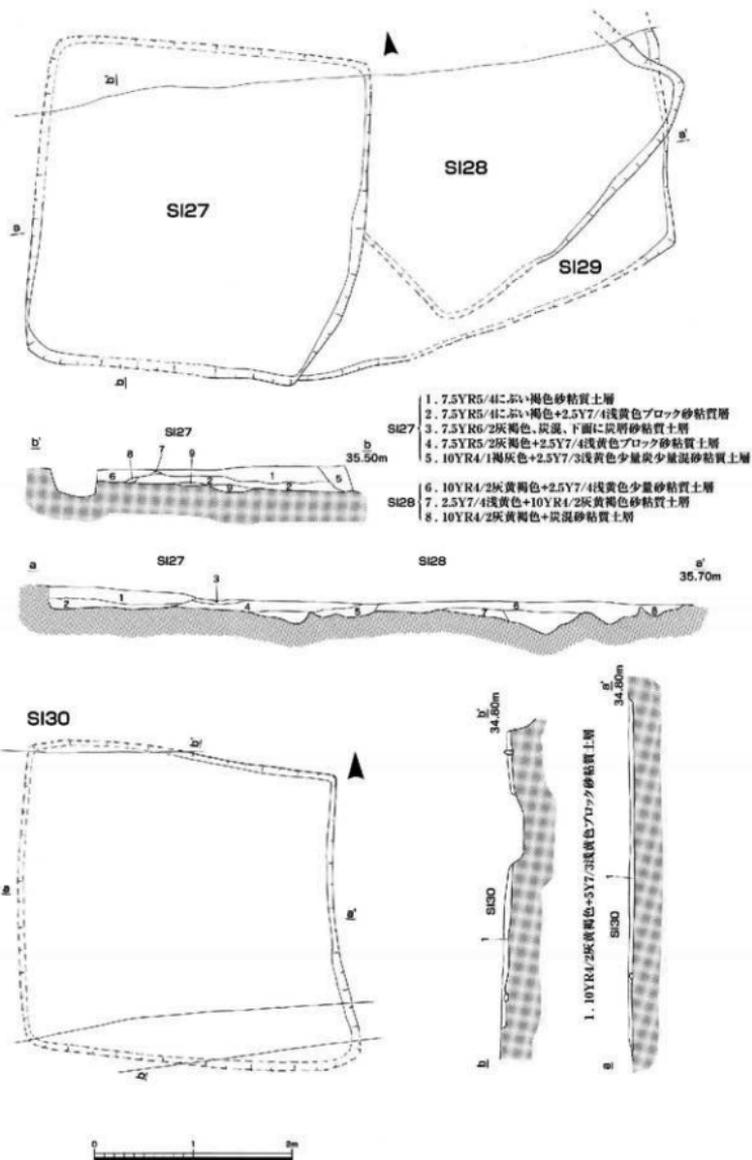
1. 18YR6/2R赤褐色+7.5YR/2R4-7P赤褐色+少量黒砂粘質土層
2. 7.5YR/2R4-7P赤褐色+18YR6/2R赤褐色少量黒砂粘質土層
1. 18YR6/2R赤褐色+7.5YR/2R4-7P赤褐色+少量黒砂粘質土層
2. 黄土+少量黒砂粘質土層
3. 7.5YR/2R4-7P赤褐色+18YR6/2R赤褐色少量黒砂粘質土層



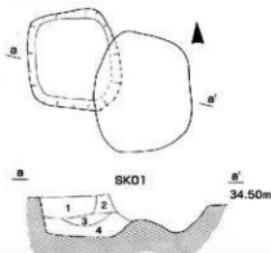
1. 7.5Y/2R5黄褐色中砂粘質土層
2. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
3. 18YR6/2R赤褐色+2.5Y/2R5黄褐色+少量黒砂粘質土層
4. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
5. 18YR6/2R赤褐色+少量黒砂粘質土層
6. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
7. 18YR6/2R赤褐色+2.5Y/2R5黄褐色中砂粘質土層
8. 18YR6/2R赤褐色+2.5Y/2R5黄褐色少量黒砂粘質土層



1. 18YR6/2R赤褐色+少量黒砂粘質土層
2. 18YR6/2R赤褐色中砂粘質土層
3. 18YR6/2R赤褐色+18YR6/2R赤褐色少量黒砂粘質土層
4. 18YR6/2R赤褐色+18YR6/2R赤褐色+少量黒砂粘質土層
5. 18YR6/2R赤褐色+18YR6/2R赤褐色+少量黒砂粘質土層
6. 2.5Y/2R5黄褐色+18YR6/2R赤褐色少量黒砂粘質土層

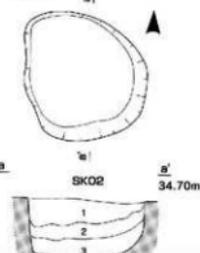


SK01



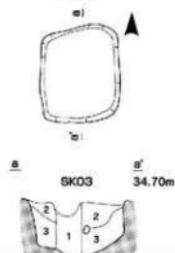
1. 10YR4/2灰黄褐色+2.5Y6/3黄褐色少量砂粘質土層
2. 10YR4/2灰黄褐色砂粘質土層
3. 10YR5/2灰黄褐色砂粘質土層
4. 10YR5/2灰黄褐色+10YR7/6明黄褐色ブロック土混砂粘質土層

SK02



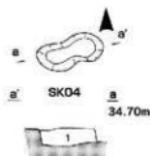
1. 10YR3/2黒褐色砂粘質土層
2. 10YR3/2黒褐色+2.5Y6/2灰黄色少量砂粘質土層
3. 2.5Y6/2灰黄色+10YR3/2黒褐色砂粘質土層

SK03



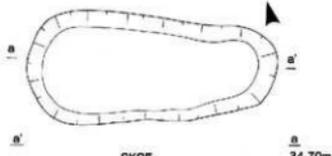
1. 10YR4/3に赤い黄褐色砂粘質土層
2. 10YR4/2灰黄褐色+5Y6/3オリーブ黄色少量砂粘質土層
3. 10YR4/2灰黄褐色+5Y6/3オリーブ黄色砂粘質土層

SK04



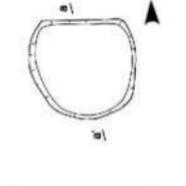
1. 10YR3/2黒褐色砂粘質土層

SK05



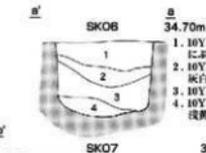
1. 10YR4/1黒灰色灰泥
2. 10YR6/1黒灰色+2.5Y6/3に赤い黄褐色砂粘質土層
3. 2.5Y6/3に赤い黄褐色+10YR4/1黒灰色砂粘質土層
4. 10YR6/1黒灰色+2.5Y6/3に赤い黄褐色砂粘質土層

SK08

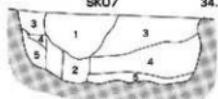


1. 10YR7/3に赤い黄褐色+10YR4/2灰黄褐色砂粘質土層
2. 10YR4/2灰黄褐色+10YR7/3に赤い黄褐色砂粘質土層
3. 10YR7/3に赤い黄褐色+10YR4/3に赤い黄褐色砂粘質土層

SK06・07

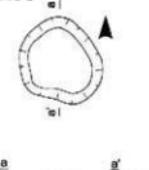


1. 10YR4/2浅黄褐色+10YR7/2に赤い黄褐色ブロック砂粘質土層
2. 10YR4/2浅黄褐色+10YR7/1に赤い黄褐色砂粘質土層
3. 10YR4/2浅黄褐色砂粘質土層
4. 10YR6/3浅黄褐色+10YR4/2浅黄褐色少量砂粘質土層



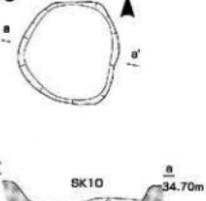
1. 10YR4/3に赤い黄褐色砂粘質土層
2. 10YR4/2浅黄褐色砂粘質土層
3. 10YR4/2浅黄褐色+10YR7/1に赤い黄褐色砂粘質土層
4. 10YR4/2浅黄褐色+10YR7/3に赤い黄褐色砂粘質土層
5. 10YR8/4浅黄褐色砂粘質土層

SK09



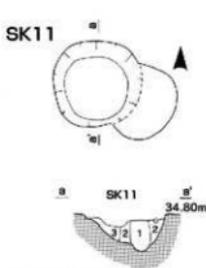
1. 10YR4/3に赤い黄褐色砂粘質土層
2. 10YR7/4に赤い黄褐色+10YR4/2浅黄褐色少量砂粘質土層
3. 10YR4/2浅黄褐色+10YR4/2浅黄褐色少量砂粘質土層
4. 10YR4/1黒灰色砂粘質土層
5. 10YR4/2浅黄褐色+少量+10YR7/3に赤い黄褐色ブロック砂粘質土層

SK10

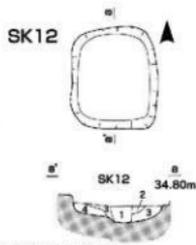


1. 7.5YR6/6棕色黄砂+5-30cmレキ含砂粘質土層
2. 10YR4/3に赤い黄褐色砂粘質土層
3. 10YR6/2浅黄褐色+10YR7/4に赤い黄褐色ブロック砂粘質土層
4. 10YR4/2浅黄褐色+10YR7/4に赤い黄褐色ブロック砂粘質土層

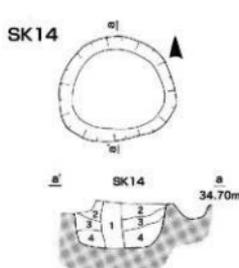




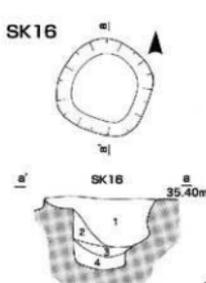
1. 10YR3/1黒褐色砂粘質土層
2. 10YR4/2黄褐色砂粘質土層
3. 2.5Y7/2黄褐色+10YR4/2黄褐色少量砂粘質土層



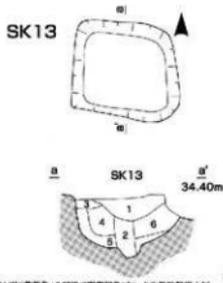
1. 10YR3/1黒褐色砂粘質土層
2. 10YR4/2黄褐色砂粘質土層
3. 10YR4/2黄褐色+2.5Y7/2黄褐色少量砂粘質土層
4. 2.5Y7/2黄褐色+10YR4/2黄褐色少量砂粘質土層



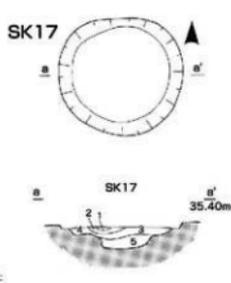
1. 10YR3/2黄褐色+2.5Y7/4黄褐色少量砂粘質土層
2. 10YR3/2黄褐色+2.5Y7/4黄褐色少量砂粘質土層
3. 10YR3/2黄褐色+2.5Y7/4黄褐色+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
4. 10YR3/2黄褐色砂粘質土層



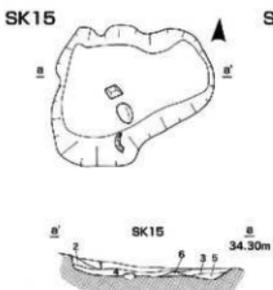
1. 10YR4/1黄褐色砂粘質土層
2. 10YR4/1黄褐色+2.5Y7/2黄褐色少量砂粘質土層
3. 10YR4/2黄褐色+2.5Y7/2黄褐色砂粘質土層
4. 10YR4/2黄褐色砂粘質土層



1. 10YR4/2黄褐色+2.5Y7/6黄褐色+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
2. 10YR4/2黄褐色+2.5Y7/6黄褐色少量砂粘質土層
3. 2.5Y7/6黄褐色+10YR4/2黄褐色少量砂粘質土層
4. 10YR3/2黄褐色+2.5Y7/6黄褐色少量砂粘質土層
5. 10YR3/2黄褐色+2.5Y7/6黄褐色砂粘質土層
6. 10YR3/2黄褐色砂粘質土層



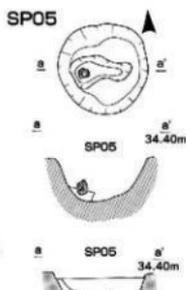
1. 面上
2. 底
3. 10YR4/2黄褐色砂粘質土層
4. 10YR4/2黄褐色+10YR7/6黄褐色+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
5. 10YR4/2黄褐色+10YR7/6黄褐色+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層



1. 10YR3/2黄褐色砂粘質土層
2. 10YR3/2黄褐色+2.5Y7/2黄褐色+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
3. 10YR3/2黄褐色 少量+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
4. 10YR3/1黄褐色 少量+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
5. 10YR3/1黄褐色 少量+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
6. 2.5Y7/2黄褐色 少量+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層

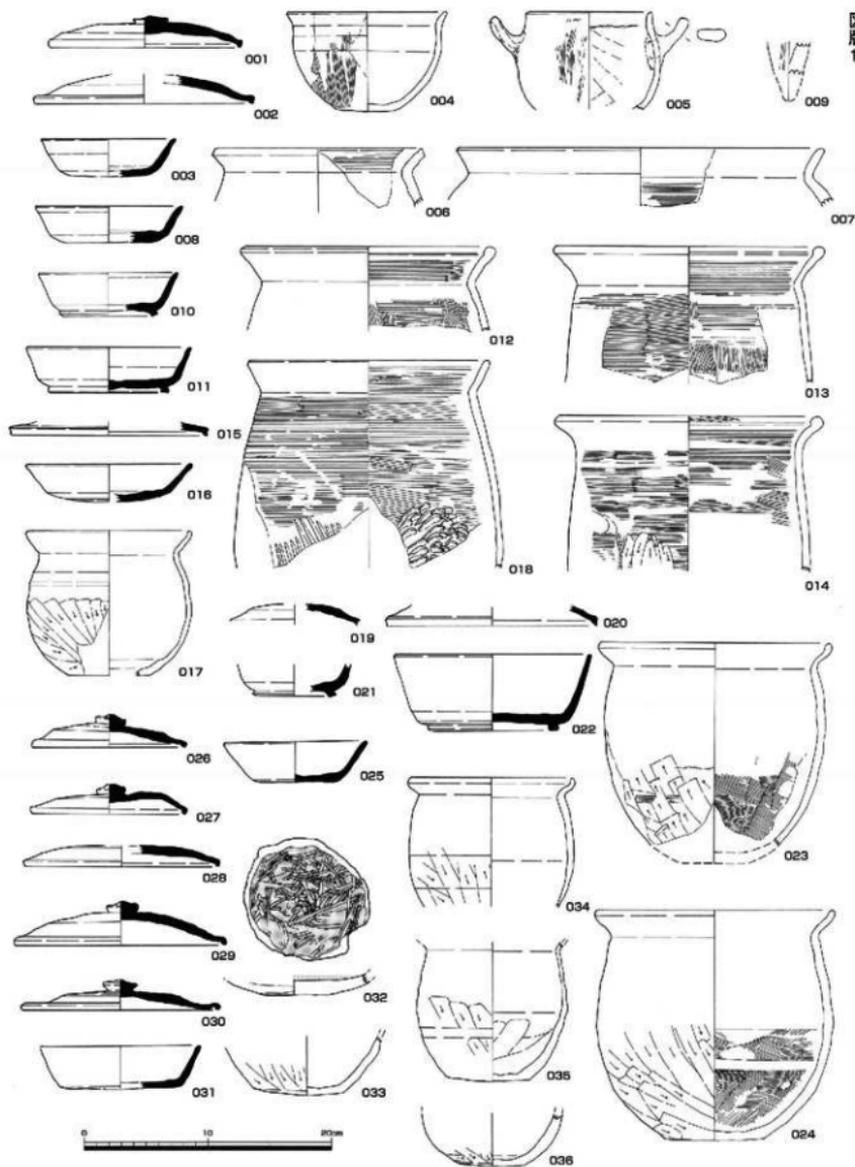


1. 10YR4/1黄褐色 砂粘質土層
2. 10YR4/1黄褐色+10YR7/6黄褐色砂粘質土層
3. 10YR7/6黄褐色+10YR4/1黄褐色少量砂粘質土層

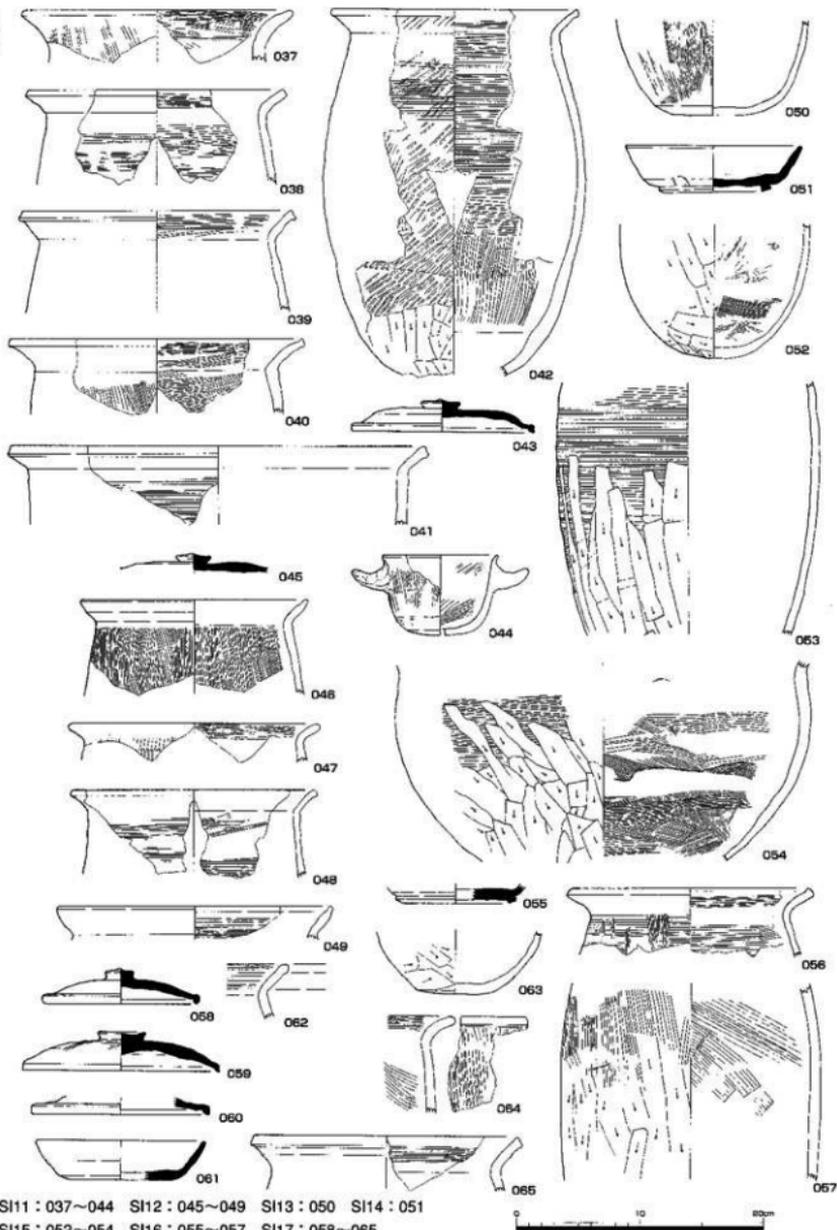


1. 10YR4/1黄褐色+2.5Y6/3黄褐色+7.5Y6/2黄褐色少量砂粘質土層
2. 7.5Y6/2黄褐色+10YR4/1黄褐色少量砂粘質土層





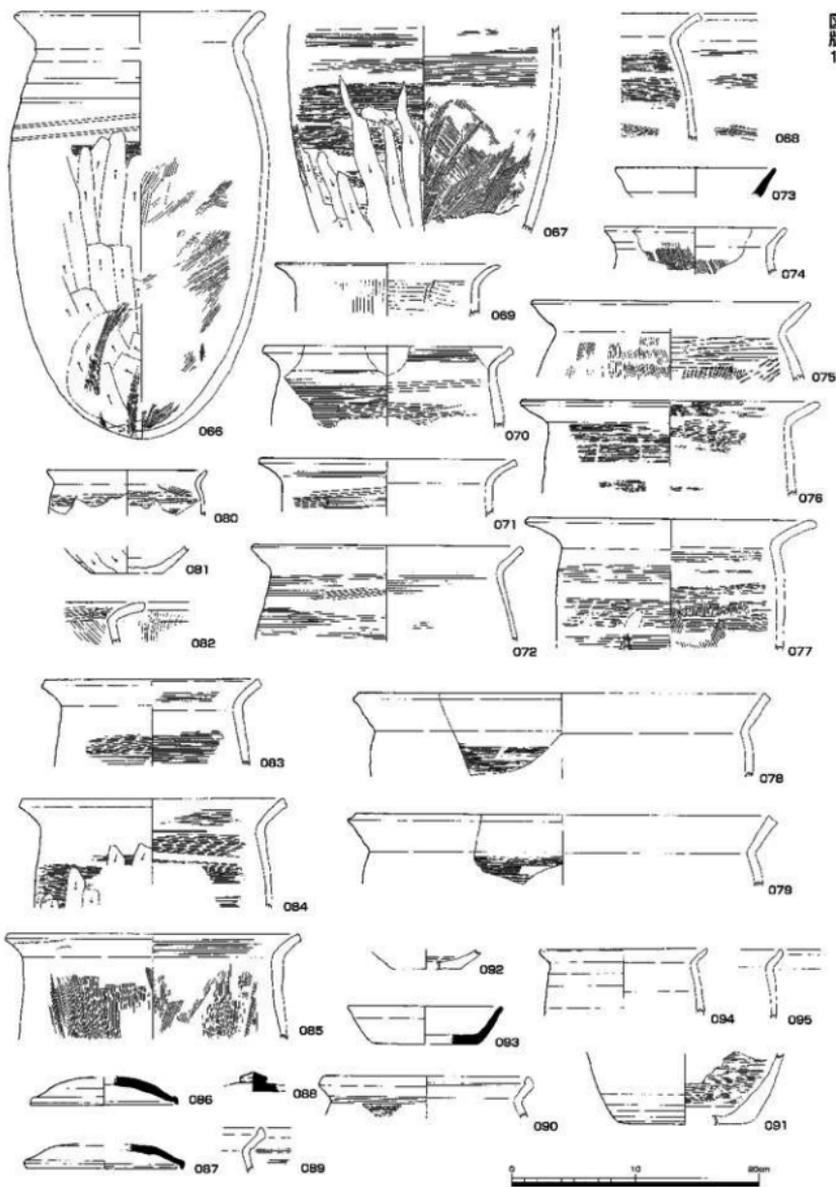
SI01 : 001~007 SI02 : 008 SI03 : 009 SI04 : 010~014 SI05 : 015 SI06 : 016~018  
 SI08 : 019~024 SI09 : 025 SI10 : 026~036



SI11 : 037~044 SI12 : 045~049 SI13 : 050 SI14 : 051

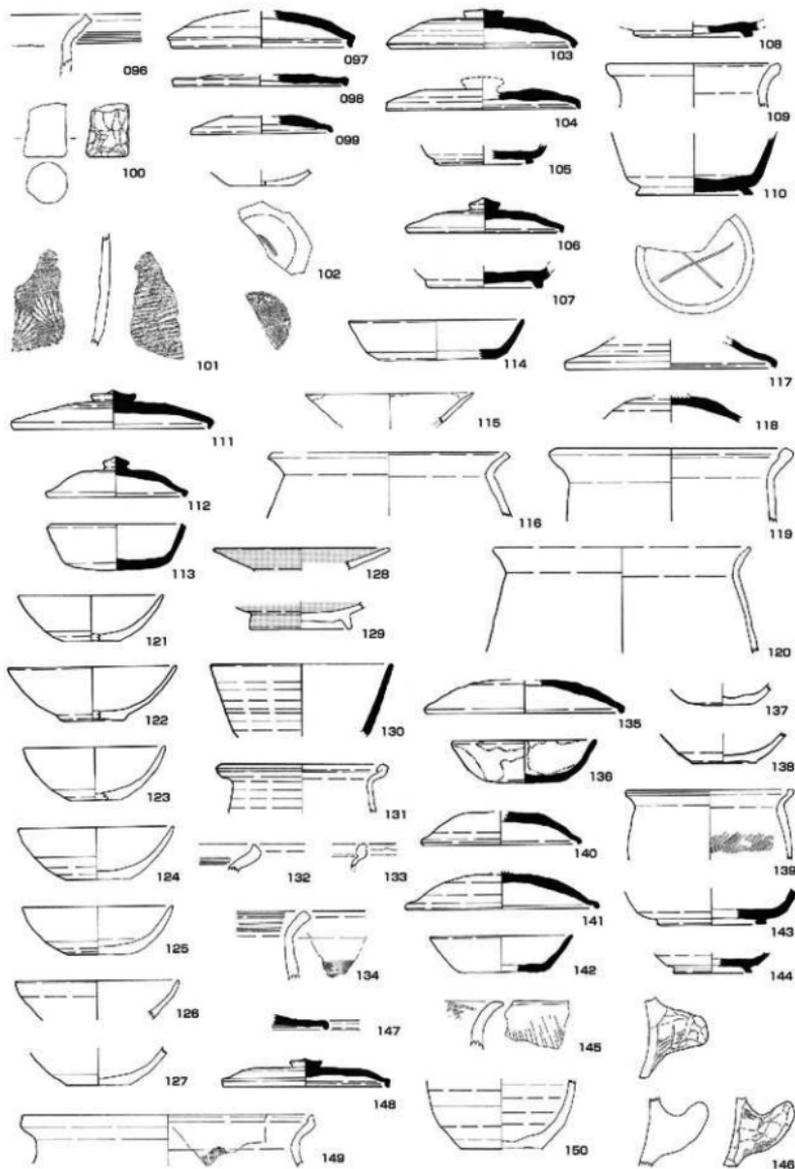
SI15 : 052~054 SI16 : 055~057 SI17 : 058~065

0 10 200mm



SI18 : 066~068 SI20 : 069~077 SI21 : 078 · 079

SI22 : 080~085 SI24 : 086~091 SI26 : 092~095



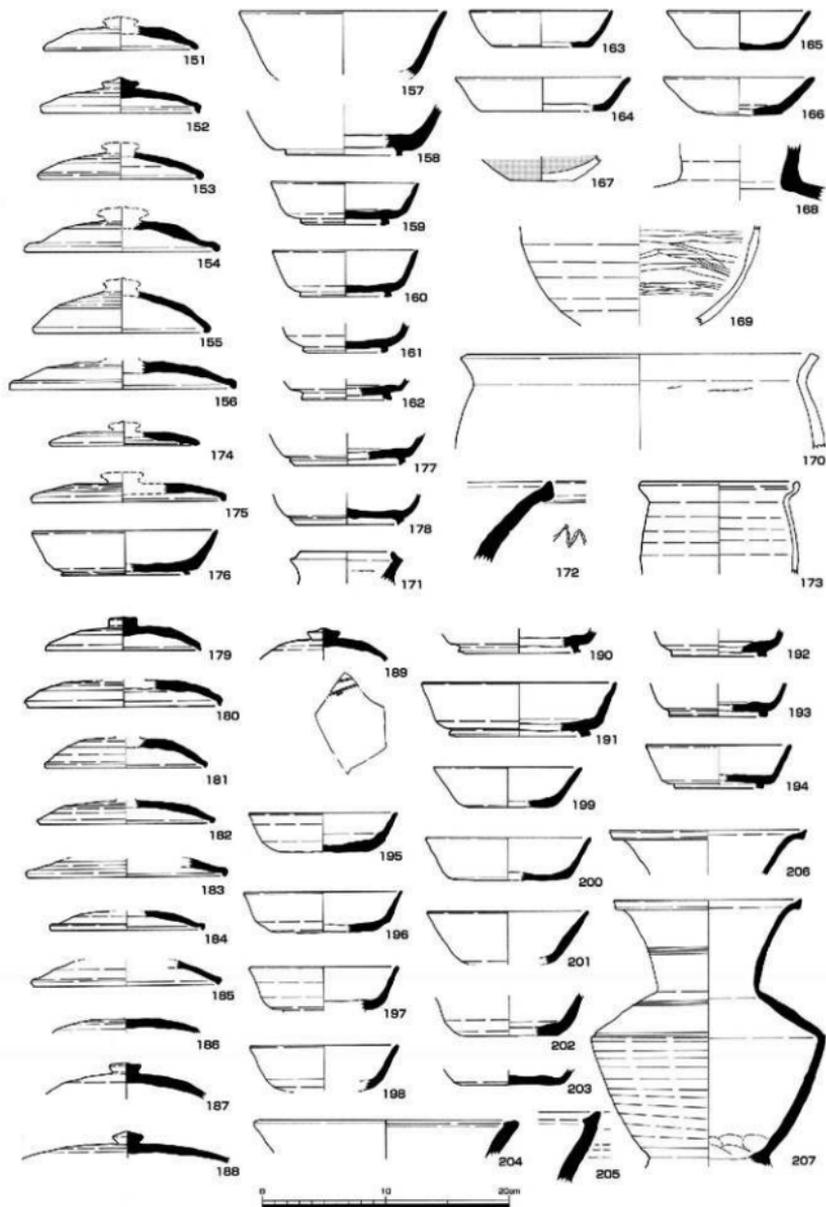
SK01 : 096 SK02 : 097 · 098 SK03 : 099 SK04 : 100

SK05 : 101 · 102 SK06 : 103 · 104 SK07 : 105 SK08 : 106 SK09 : 107 SK10 : 108

SK11 : 109 SK12 : 110 SI30 : 111~113 SK13 : 114 SK14 : 115 · 116

SK15 : 117 SK16 : 118 SK17 : 119 · 120 SK18 : 121 · 122 SI29 : 123~134 SI28 : 135~139 SI27 : 140~145

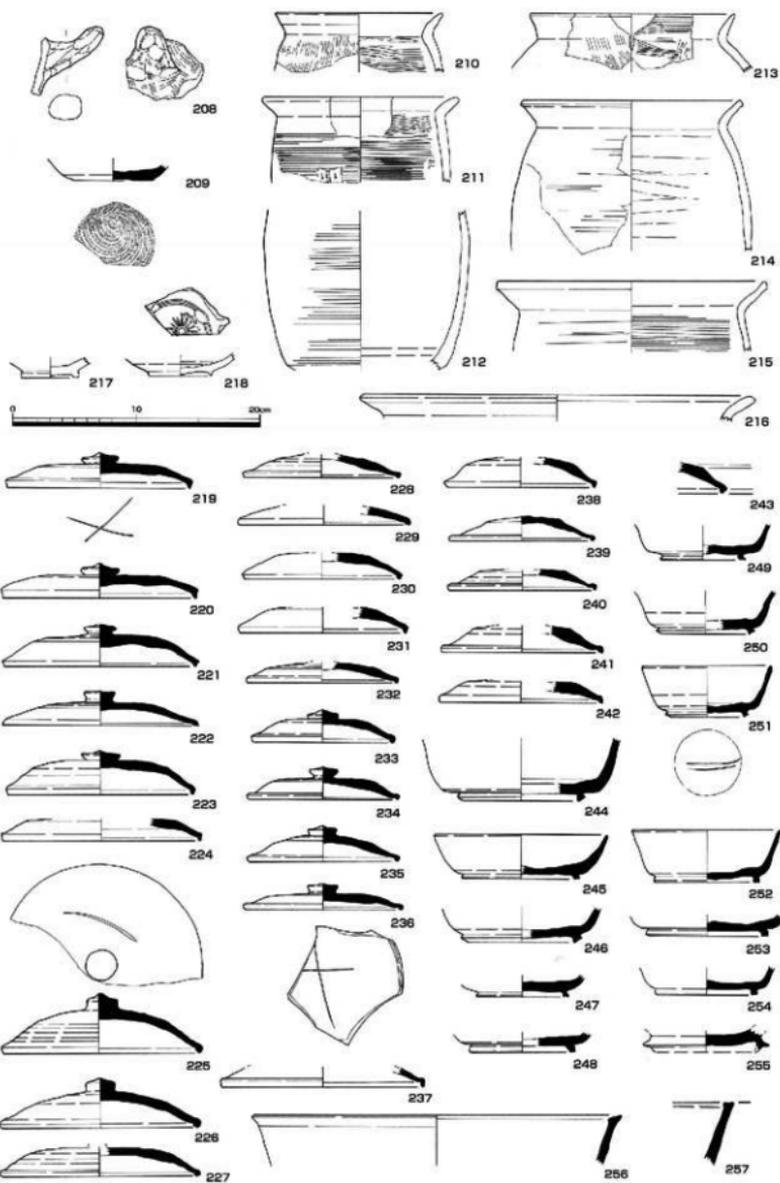
SP01 : 146 SP02 : 147 SP03 : 148 SP04 : 149 · 150



SD01 : 151~170 SD02 : 171~173

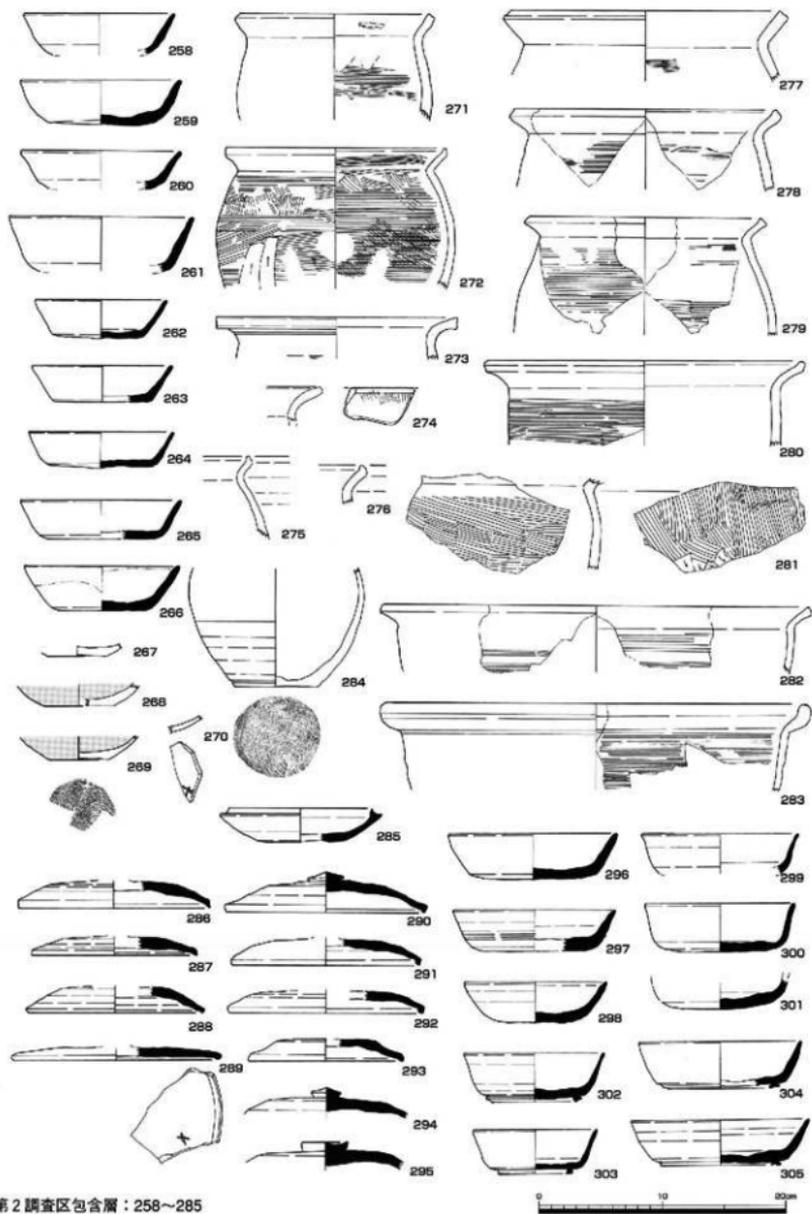
SD03 : 174~178

第 1 调查区包含层 179~207

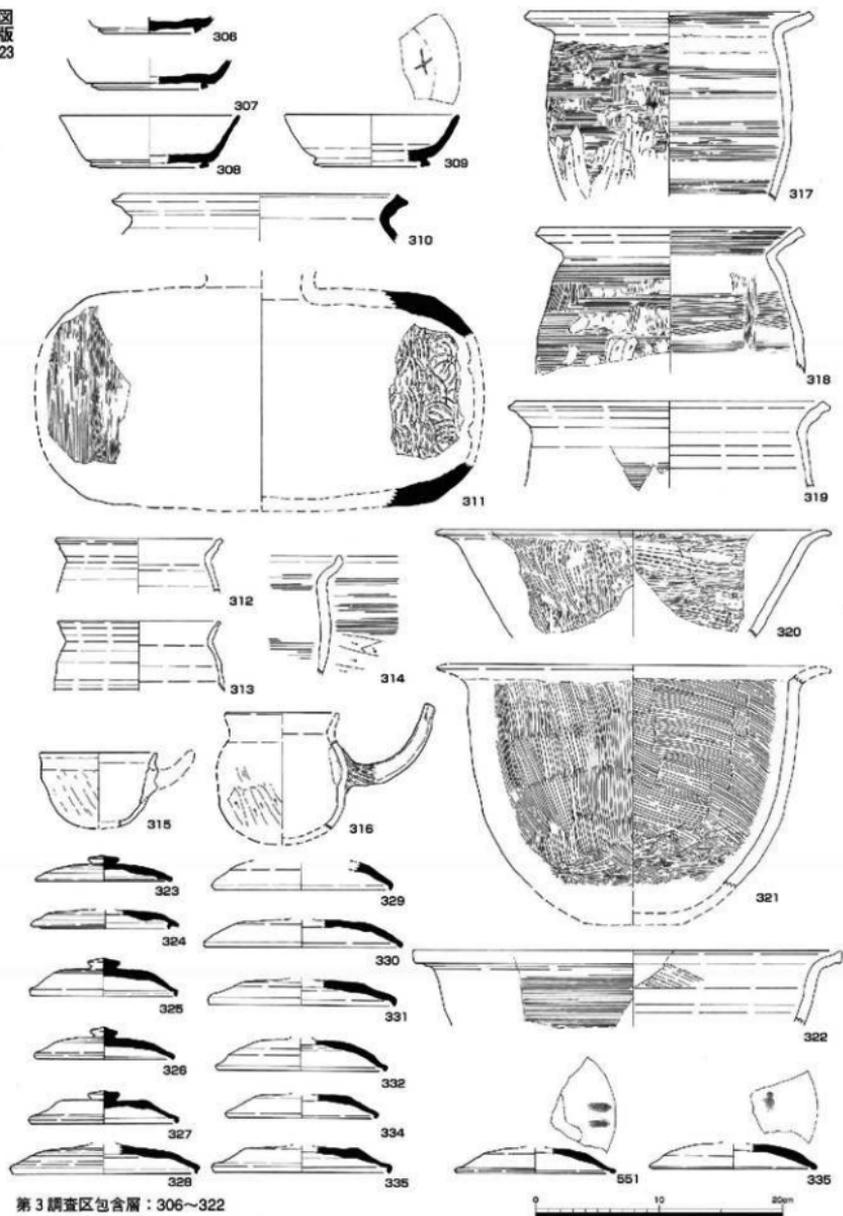


第1 調査区包含層：208～218

第2 調査区包含層：219～257

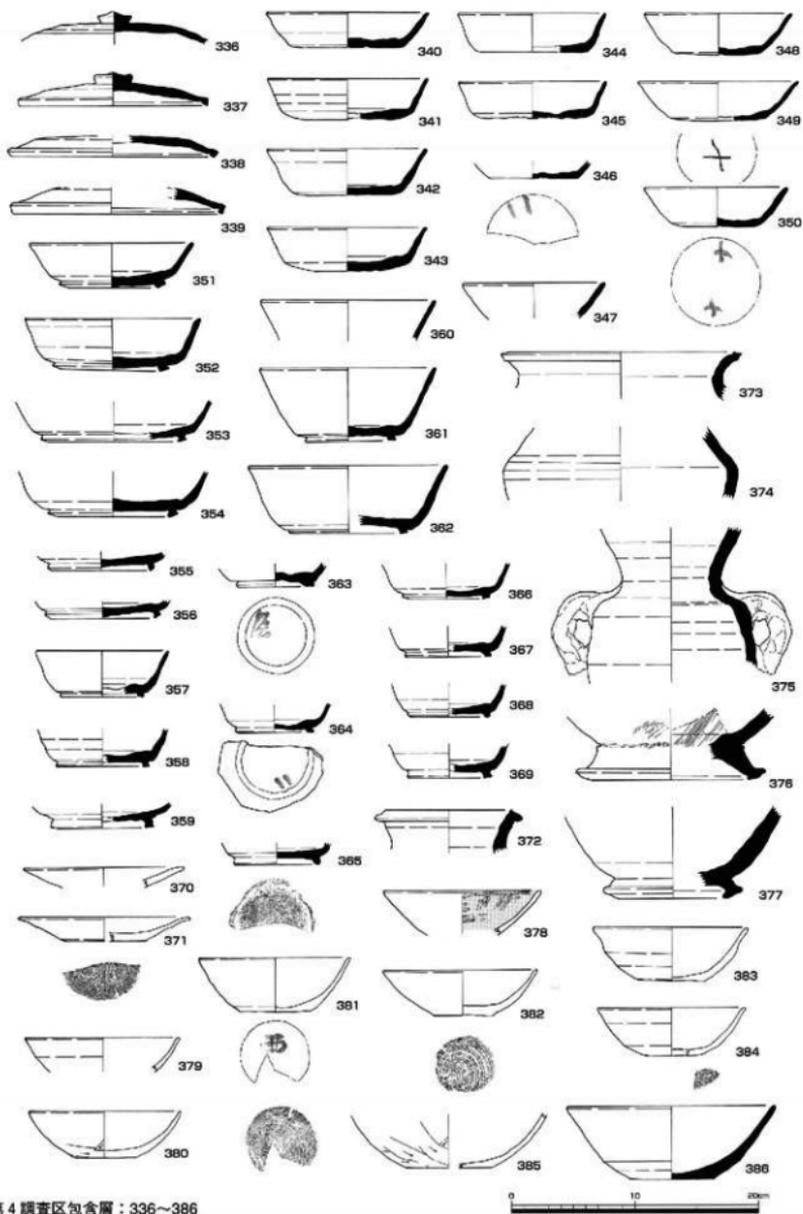


第2調査区包含層：258～285  
第3調査区包含層：286～305

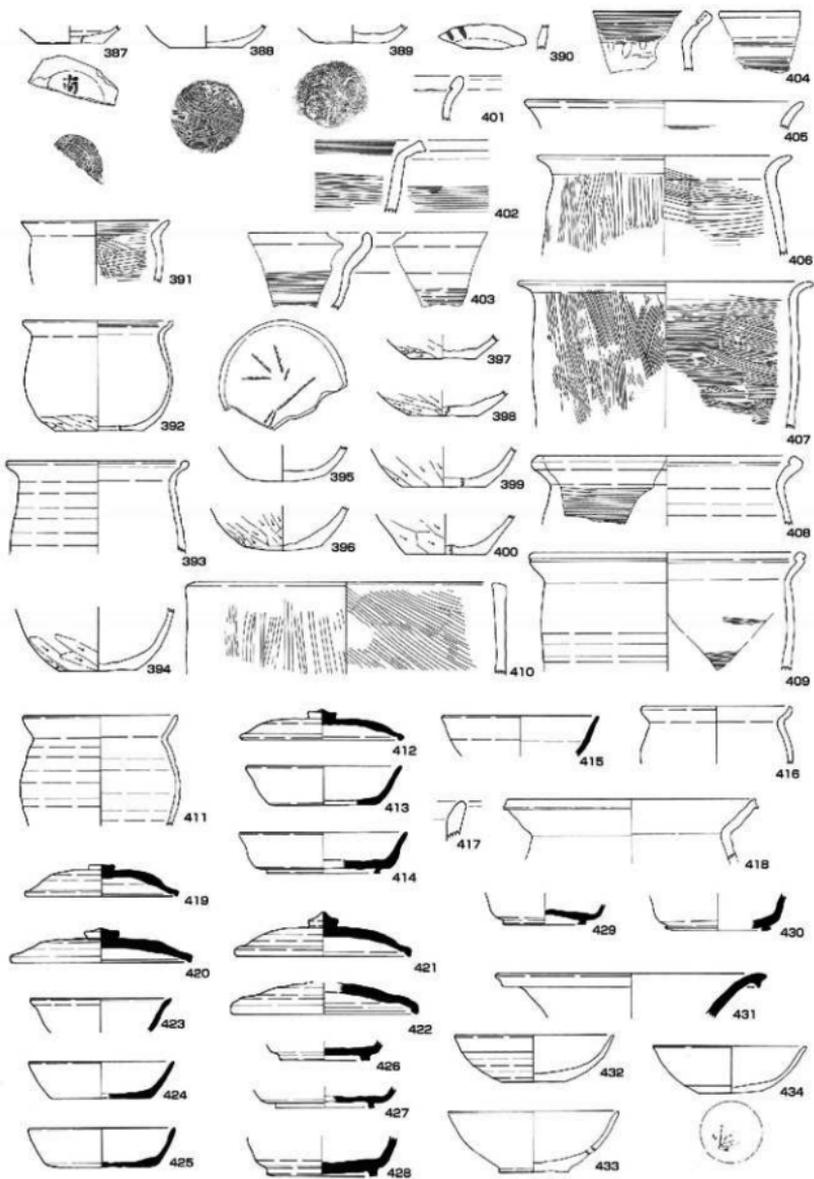


第3調查区包含層：306~322

第4調查区包含層：323~335・551



第4调查区包含层：336~386



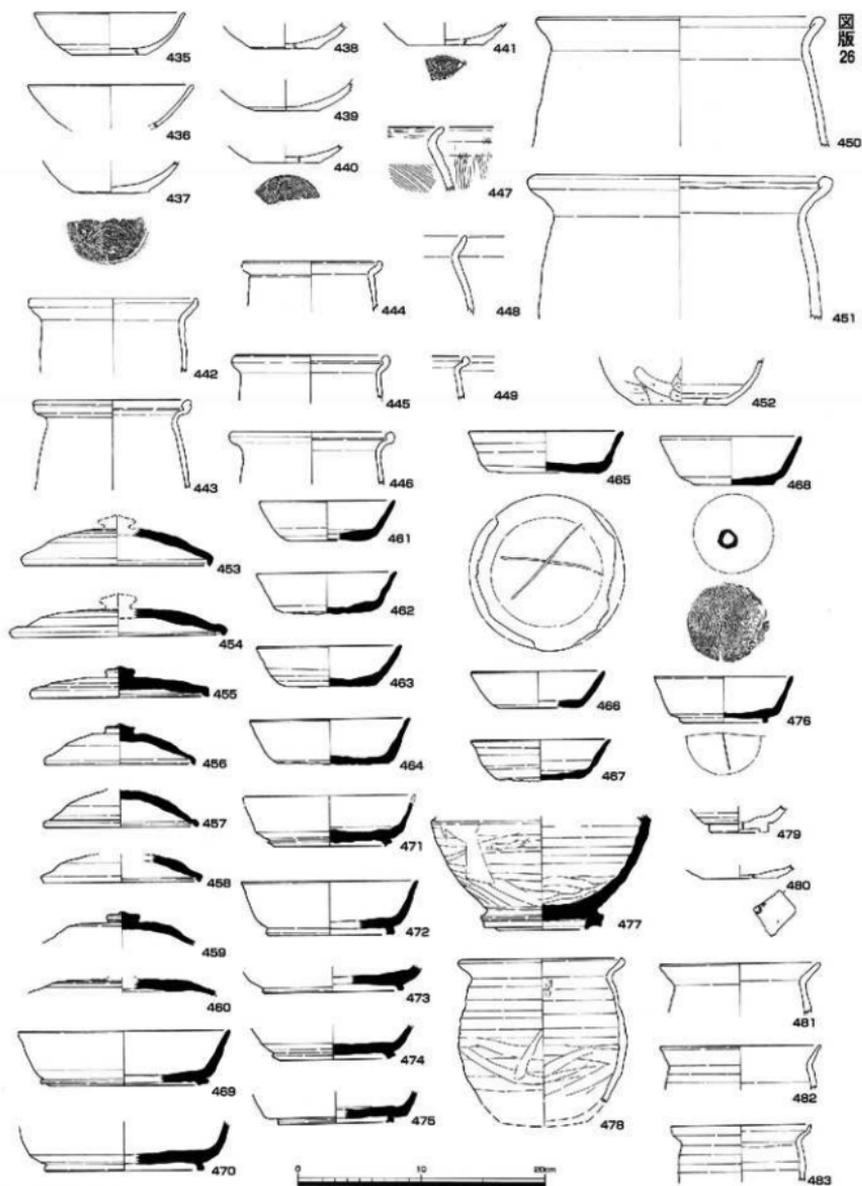
第4调查区包含层：387~410

第5调查区包含层：411

第6调查区包含层：412~418

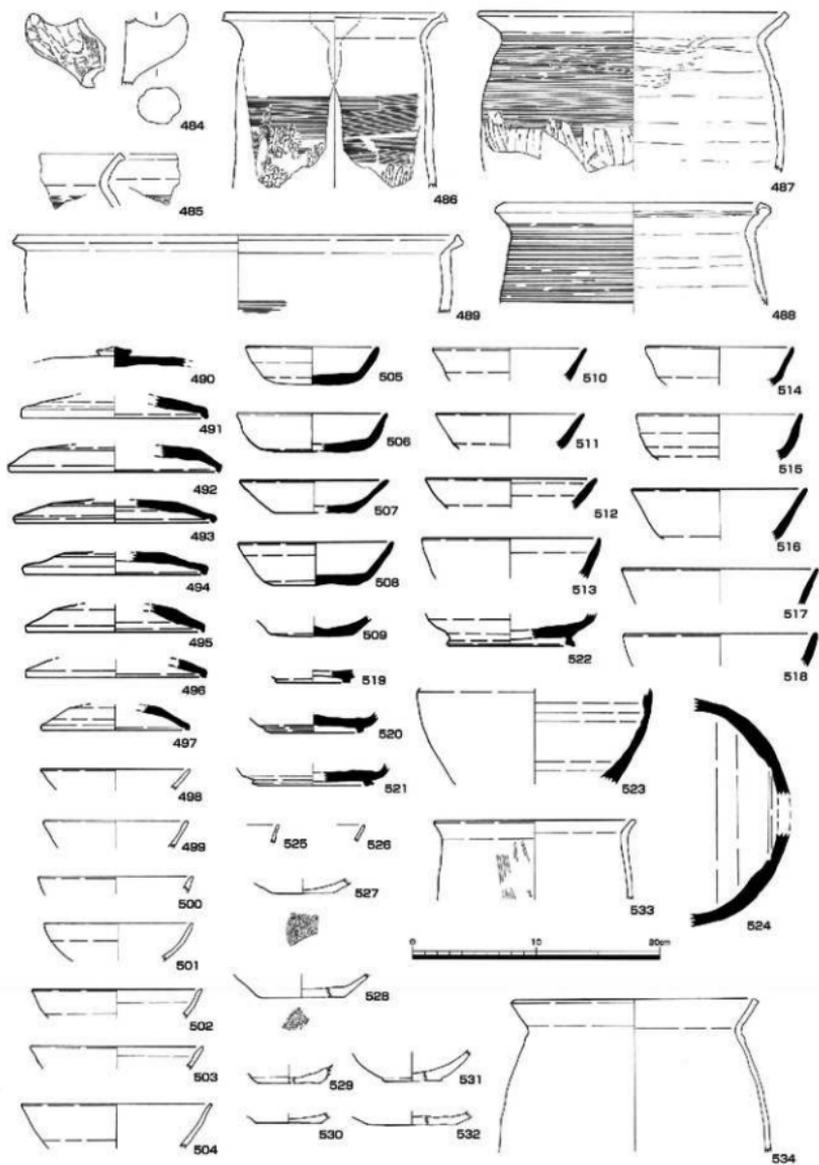
第7调查区包含层：419~434



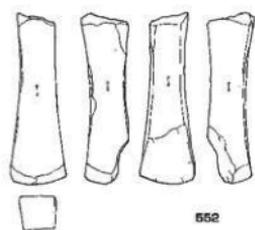
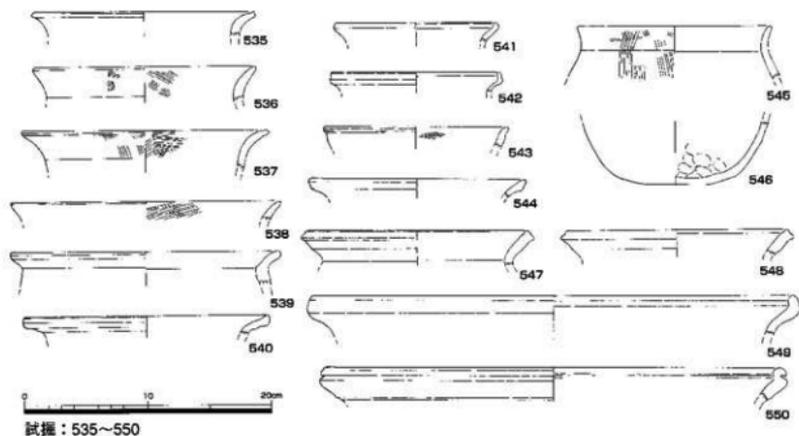


第7調査区包含層435~452

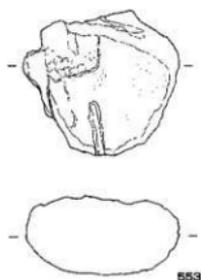
排出土・攪乱土抗・側溝掘剛土：453~483

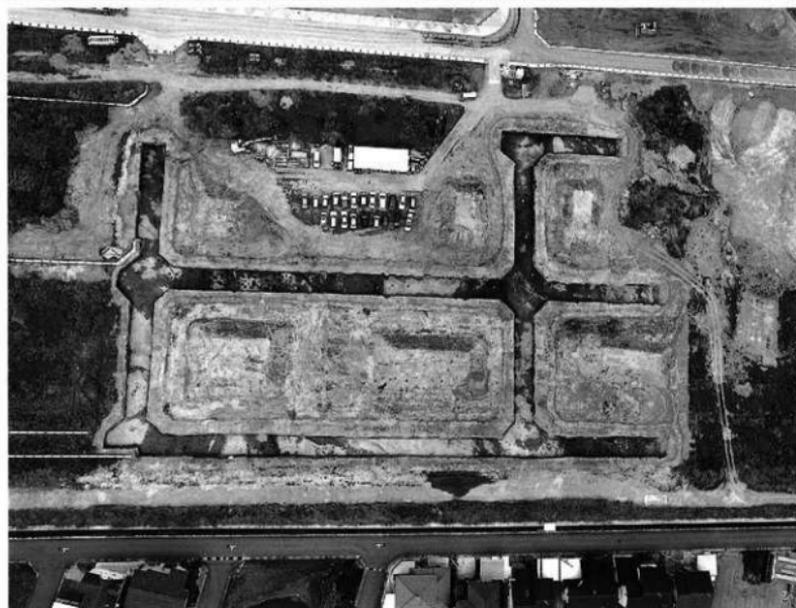


排土・攪乱土坑・側溝掘削土：484~489  
 試掘：490~534



SP06 : 552  
S129 : 553





1. 調査地全景 (西から)
2. 調査地全景 (真上から)



1. 調査地全景 (南から)
2. 調査地東半全景 (北から)



1. 第1調査区全景 (南から)  
2. 第1調査区全景 (北から)



1. 第2調査区全景 (西から)  
2. 第3調査区全景 (西から)



1. 第3・7調査区全景（東から）  
2. 第2・6調査区全景（東から）



1. 第4調査区全景（南から）  
2. 第4調査区南半全景（北から）



1. 第2調査区西側獨立柱建物群（真上から）  
2. 第2調査区中央獨立柱建物群（真上から）



1. 第2調査区SB06 (西から)
2. 第2調査区東半竪穴建物群 (西から)